
悲しき勇者 異説 愚者の舞い 第1章

竜王寺 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しき勇者 異説 愚者の舞い 第1章

【Nコード】

N6786F

【作者名】

竜王寺 聖

【あらすじ】

魔王降臨から約120年。理想の平和を実現すべく、ルーケは強大な力を持つ男に師事を求める。

愚者の舞い 予告編

魔王が討伐されて はや100年。

しかし、真の平和は訪れる事は無く、人々は分散された魔物との戦いと日々の生活に追われ、いつしか、平和と言ったものがどんなものか、忘れかけていた。

そんな時、一人の若者が自然界に生をうけ。

そして、幾多の悲しみを胸に、少年は・・・自ら変革を起こすべく行動を始めた。

「今の世は乱れ、疲れ果てています！！ お願いします！ 僕を・・・僕を弟子にしてください！！！！」

かつて 魔王と名乗った男が

「やだ。」

強大な力を持ちし銀竜が

「わらわはアクティース。 今日からお前の主人じゃ。」

運命と言う歯車に組み込まれ 今 動きだす！！

「もう分かっていると思うが・・・ どうするんだ？」

「そうじゃな・・・ お前が貰ってくれぬか？」

「冗談じゃねえ。 今更人間などいらんわ。」

平和とは

「おのれよくも仲間達を！！ 貴様ら、絶対に生きて返さん！！」

「ぬかせ！ 魔物の分際で！！」

剣によつて

「あなたの命をいただきたい。」

「なにを馬鹿な事を。 わらわの命はわらわのもの。 寄越せと言われてやれるものではないわ。」

作れるものなのか

「クーナさん・・・すいません！ でも、でも、いずれ分かつてもらえますっ！ きつと！ 俺の築く平和な世界を見れば、きつと！」
「ば・・・か・・・な・・・ひ・・・と・・・。」

悲しき勇者 異説 愚者の舞い
そのうち執筆！

平和への一歩

どうで

踏み誤ったのか・・・。

お断り

内容は少し または大幅に またはまったく変わる事があります。

投稿の練習です^^;

ですが、タイトル通りのものを書いていくつもりです。

愚者の舞い プロローグ

「来たか。」

豪勢な玉座に座したまま、男はそう呟いた。

そこは玉座の間。

魔王と名乗り、自らの魔力により作りだした居城の最上階に位置する、広い空間。

男の見つめる正面には、高さ3メートルほどの立派な扉がある。

その扉を体格の良い戦士が、体当たりするように押し開けて突入して来て・・・突如ストンと斜めに下がった床でバランスを崩し、豪快にすっ転ぶ。

「ウオオオオオ!？」

そして斜めになった床をツルツと滑って行き、突き当りの木の壁に頭から激突し、牛を模し、角の付いた兜が見事に突き刺さり抜けなくなり、バタバタと暴れる。

その戦士に構わず、仲間達は斜めの床を避けてバラバラと室内に侵入し、散開した。

「又オオオ! め、抜けん!!!」

「兜を脱げ。 土くれは愚鈍で困る。」

「なにをぉ!? この枝娘があ!!!!!!」

戦士のドワーフと、冷たい声で言い放つ女エルフ。

一見仲が悪そうに見えるがそんな事はあるまい。

魔王は城の中に溢れんばかりの魔物を配置してあったのだ。

その魔物を排除してここまでたどり着くような者達に、結束が無い筈がない。

「クツクツクツク。ここまで見事に引っ掛かってくれると嬉しくって涙が出てくるぜ。 ようこそ、勇者諸君。 俺がこの城の主だ。」

幾多の悲劇と破壊を巻き起こし、世界中にもたらした男。

背にある、カラスよりも黒く艶のある一対の翼をゆつくりと広げながら、男はそう言つて玉座から立ち上がった。

「小さい罾も連携すると、なかなか効果的だろ？ 本当ならそのドワーフの上に岩などを設置して殺害するんだが・・・そんな物でお前らを倒しても仕方がないからな。遊び程度にしておいた。」

ニヤニヤ笑いながらそう言われ、後に勇者と呼ばれ賞賛される若者達は険しい表情になる。

まあ、若者と言っても数百歳生きているエルフと50年ほど生きているドワーフもいるのだが。

そんな魔王の口上を断ち切る様に、背後でドワーフがぶつくさ文句を言いながら立ち上がる気配を確認しつつ、抜き身で持っていたレイピアをヒュッとエルフは振るつた。

「今更お前がなぜこんな事をしたのか聞かん。大人しく魔界に帰つてもらおう。」

「ククク。強気だなクラスィーヴィ。俺を楽しませてくれたら大人しく帰つてやるぜ。」

「覚悟！！」

人間の若者の号令で、戦端は開かれた。

愚者の舞い 第1章 彷徨う運命

激しい戦いが、彼らの足元で繰り広げられていた。

鉄の塊である、戦車と呼ばれる兵器が火砲を連続で撃ち出し、戦闘機と呼ばれる鋼鉄の飛行機は互いを滅ぼそうと急旋回を繰り返して撃ち合う。

やがて、彼らのいる上空を一発のミサイルが飛んで来て、戦争は終結した。

少なくとも、この地域は。

ミサイルは上空から一気に大地に向けて急降下し、大地に激突する事無く、その前に空中で爆発した。

激しい光であらゆるものを一瞬にして焼き尽くし、次いで爆発による水蒸気の発生、そして、水蒸気は大地の塵芥も吸い上げて、キノコのような形になった。

言わずと知れた、核ミサイルである。

それらを彼らは、つぶさに眺めていた。

もつとも、もし、地上が平和で、空を見上げる人がいたとしても、彼らの存在は見えなかったであろう。

彼らは一種の霊魂的存在であり、存在しながら存在しなかったのだから。

もし彼らが見えたとしたら、まずその立派な宙に浮かぶ巨木が目についたであろう。

この太陽系第三惑星のある神話に登場する、ユグドラシルと呼ばれる巨木が。

その巨木の根元に当たる部分に、二人の男の姿があった。

二人は双子らしく、外見は全く一緒だった。

「で、兄貴。これを見ても、まだ人間は必要だと言い張るのか？」
「そうだ。」

即答する兄に、弟は深々とため息をつく。

「そもそも、私は科学文明を与えるつもりはないと言っているだろう。」

「何度も言っているのは俺も同じだ。確かに科学文明を主体に発展させてきた人間は八割方自滅する発展をした。それに対し、魔法文明を主体にしていれば五割で済んでいる。俺はそんな危険な賭けをする必要があるのかと聞いている。」

「それに対しても何度も答えているだろう。人間は確かに愚かな生物かもしれない。だが、極一部ではあっても、私達の領域に辿り着く人間もいたではないか。私はそこをあくまで求めていきたい。」

「・・・やっぱ説得は無駄か。わかった協力しよう。だがな、兄貴。」

「なんだ？」

「天界・妖精界・自然界・魔界と作ったが、人間は天界と自然界だけにしてくれ。最悪の場合、被害は最小限に抑えたいし、その程度の被害なら何とか作り直せるからな。」

「異界の容量を考えると言いたいのか？」

「その通り。人間と共に全てを滅ぼされては敵わん。それと、俺はあくまで人間を創造するのは反対だって事も忘れないでくれ。」
「・・・分かった。」

同じ時間の流れの中にいながら同じでない世界。

それが異次元空間にあるパラレルワールドと呼ばれる世界だ。

それらをいくつもいくつも渡り歩き、参考にして学び、勉強した彼らは、自分達の世界を作り上げた。

その世界を彼らは、クオーレ、と、名付けた。

世界が創造されて幾多の月日が過ぎたある日、天界と魔界が戦争をした。

後に聖魔戦争と呼ばれるこの戦争は、魔界の敗北に終わった。

その約300年後、魔界は次の標的を自然界に定め、魔王の指揮の下、攻め込んだ。

後に魔王戦争と呼ばれるこの戦いは、多くの悲しみと破壊を生み、多くの国々が滅んだ。

その魔王が冒険者一行に倒され、はや100年。

傷痕が癒し切れていない時代。

そこに、一人の男子が生誕した。

「ご主人様！」

待ちかねていた赤子の産声が突然屋敷中に響き渡り、夫であり屋敷の主人である男は、座っていた椅子から腰を上げ、飛び出て来た産婆助手を押しつけるように寝室へ駆け込んだ。

疲れ果てた表情の愛しい妻の腕には、産まれたばかりの赤ん坊が抱かれ、屋敷の主人は思わず自分の頬を力いっぱい殴ってぶっ倒れた。

「旦那様！？」

驚いた産婆助手が慌てて駆け寄ると、屋敷の主人はそれを意にも介さず、倒れたまま大きく大の字に手足を伸ばし、歓喜の声を上げた。

「これが夢なら早く覚めてくれ！ 私は何に感謝すればいい！？

誰か教えてくれ！」

幸せの絶頂にある屋敷の主人を、産婆を含め、皆が笑顔で見つめていた。

魔王を倒した冒険者一行のリーダーである人間の戦士、アレスの子孫がまた、産まれた瞬間であった。

屋敷の主人はそう叫び、ひとしきり大きく笑うと、おもむろに起き上がって我が子の元へ駆け寄った。

赤子はそんな両親や周りの事などお構いなしに、元気一杯に泣き続けていた。

「よくぞ産まれて来た！ ルーケよ！ 私はお前を大いに歓迎するぞー！！」

「まあ、あなた。 私に何の相談もなく、名前を決めてしまったの？」

呆れ果てたという顔で言う妻も、拗ねた顔を作ってからすぐに笑顔になった。

「許せ妻よ。男の子ならこの名にしようと思っていたのだ。古代神聖語だかどっかの国の言葉だか忘れたが、希望と言う意味だ。」
「良い意味だけど・・・適当ねえ。」

愚者の舞い 2

グラン大陸には、3つの大国がある。

東西南北の名を冠し、それぞれがほぼ、名称に一致した位置に存在する。

それぞれを簡単に説明すると、東の王国は頑固者が多く、ドワーフの住む洞窟も多数存在し、北の王国は実力主義で、何事も力が最優先を主体とする。

南の王国は奴隷による制度で発展した小国が合併されてできた国である。

西の王国は、実は存在しない。

そのため3つの大国なのだが、概ね大陸西部にある小国の乱立する地域を総じて西の王国と呼ぶ。

この中には女性しか存在しないと言われる、アマゾネスの国もある。また、他の国では国を守り統治する戦士を騎士と呼ぶが、西の王国では侍、諜報で忍者がいるという、独特の文化を持つ地域でもある。そんな東西南北の国の間に挟まれ、その間にも小さな国々が点在していた。

中には街道沿いの宿場町が発展し、民衆が共同で統治・防衛している独立国もある。

そんな情勢の中、大陸中央に位置する小国に、ルーケは生まれた。

曾祖父のアレスは既に亡く、祖父もまた、先年他界していた。

今は屋敷の当主であるルーケの父が、騎士の一人として仕えていた。もともと、アレスの血を引くのは夫人の方であり、夫は熱烈な恋愛の末に婿になった、一般の騎士である。

そして、待望の後継者に恵まれ、喜びに屋敷が包まれてから、20年の月日が流れた。

街道、と言うと、整備されて凹凸があまりなく、踏み固められて

雑草は生える事も出来ず、馬車が余裕ですれ違える広さがあって人々は笑顔で挨拶しながら行き交う。

そんなイメージを抱くだろうが、ところがどっこい。

馬車なんぞゆっくり進むのが関の山と言うような、細い、獣道に毛が生えた程度である。

それと言うのも、魔王降臨以前は人間やバードマン、ドワーフにエルフなどなど、人型の生物同士での争いが絶えなかったからだ。

そのため街道整備なんてしようものなら、大軍さんいらっしやい状態になってしまったため、どこの街道もこんなものである。

魔王降臨により、人型生物達はそれぞれの存亡を守るため、一致団結して魔王と戦い、最終的に勇者一行が魔王を討ち果たして一応の平和は訪れたのだが、今度はその損害の回復に汲々とし、他国に繋がる街道の整備どころではなかった。

しかも魔王は討ち果たしたが、統治者のいなくなった生き残りの魔物達は各地へ分散し、日常的な脅威となっていた。

国どころか小さな村でさえも自警団を組織し、堀や壁、柵などを作り、防衛しなければならぬ状況であり、のんきに他人の使う街道整備などしてられないし、整備なんてしていたら魔物にたちどころに攻められてしまう危険もあった。

そんな細い街道を、全力で馬車が走っていた。

その馬車はどこかの金持ちの持ち物らしく、非常に丈夫に作られていた。

そのため、走る衝撃で馬車が分解してしまう心配はなさそうだ。

もつとも、中にいる人はこれでもかと言うくらいの振動で、無事とは限らないが。

そんな道を、御者は見事な綱裁きで疾走させていた。

よほど腕の良い御者を雇っているのだろう、普通ならとうの昔にひっくり返っているか木に激突している。

何故そんなに急いでいるのかと聞かれれば、馬車を追いかけてくる物があるからである。

そう、物、だ。

者ではなく。

魔物の代表格にして知らない者がいないと言われるほどよく見かけられ、しかも残忍・凶暴な臆病者、ゴブリンである。

そのゴブリンが3匹、全力疾走で馬車を追いかけていた。

いくら馬車を疾走させていると言っても、所詮細く整備もろくにされていない街道である。

思ったよりも速度は出ていないし、ゴブリンは成人の人間に比べて背の高さは半分程度ではあるが、体力は底無しなほどあるし、走る速さも普通の人間並みにある。

もつとも、そんなゴブリンズも全力疾走が長いため、へばり気味であるが。

醜い顔が息も絶え絶えで更に醜くゆがみ、涎も垂れ放題と言う、別の意味でも醜悪な容姿になっている。

そこまでしつこく追って来るほど腹が減っているのかと、思わず餌を与えたくなるほどであるが、ゴブリンが求める餌は人間や家畜などである。

はいどうぞとあげるわけにもいかないため、こうやって逃げているのだ。

そんな逃走劇も終焉を迎えた。

辺りを囲んでいた木々が切れ、草原が広がっているのが視界に入っただのだ。

草原に入ってしまったえば障害物は格段に減り、馬車の速度も増す事が出来る。

現状で距離を縮める事が出来ないのだから、速度が増せば逃げられる。

そんな御者の希望はしかし、儚く消え失せた。

あと少しで草原に出るという直前、突然大木が横から倒れてきて道を塞ぎ、馬は驚いて急停止して馬車を強引に止め切った瞬間、その首筋に矢が突き立ったのだ。

矢面に立つ気は毛頭ない御者は、慌てて御者席から飛び降りたが、中に声をかける前に追いついて来たゴブリンの餌食となってしまうた。

ゴブリン達が馬車を取り巻き、ギャホギャホ騒ぎ始めた時、倒れたばかりの大木の影から一匹のゴブリンが出て来て持っていた弓を投げ捨てつつ一喝し、沈黙させる。

そのゴブリンは普通のゴブリンより体格が一回り大きい。

ゴブリンの中でも上位種、ゴブリンキングであった。

愚者の舞い 3

大陸のほぼど真ん中に位置する小国、ライヒ。

南に位置する大国、南の王国との間には大陸最高峰の霊峰ファレーズがあり、ライヒはその恵みの恩恵を受けられるため、比較的豊かな国だった。

ただ、王族は野心家が多く、少しでも国を大きくしようと色々画策しているという噂が絶えない。

そんなライヒから、一人の若者が北へ向けて旅立った。

隣国との間にある森にゴブリンが住み着いたので、退治して欲しいという依頼を受けたためだ。

ライヒから隣国までいくつか道はあるが、直接繋がっている街道がその森を突っ切っており、危険だし、行人や旅人の脅威になるので取り除いて欲しいと言うのがその内容だ。

若者は冒険者と呼ばれるなんでも屋のアウトローであった。

ただ、まだ駆け出しだが。

冒険者、そう名乗るとかつこよさげなのでそう自称するが、実際には命がけの割になんでも屋であり、盗賊・野盗もそう名乗るため、アウトローと同列に見られるし、事実半分は本当に盗賊とかだったりする。

そのため、かなり胡散臭い目で見られる連中ではあるが、夢を追いかけて真面目に魔物退治などをする、この若者のような者もいるのだ。

そう、夢を追いかけて。

手柄次第で一国の主にだって成れちゃうのが冒険者。

そのため、夢を追いかけて冒険者になる若者も多いため、まっとうな冒険者をまとめて支援しようと思ったのが冒険者ギルドだ。

そして、盗賊、通称シーフもギルドがある。

こちらはシーフギルドと呼ばれ、盗賊・情報屋・詐欺師・暗殺者（

アサツシンと呼ばれる）などなど、まっとうな仕事ではない分野を司るギルドであり、各王国・国家と犬猿の仲の連中であるが、冒険者とも密接な関係であるため、協力態勢にある。

そのため、まっとうではない冒険者はシーフギルドが即座にアサツシンを派遣し始末する。

そうやって冒険者もまともに市民に受け入れられる存在になってきた。

もっとも、冒険者と言う職業（？）は古くからあったが、魔王降臨に伴い魔物が急増したため、その対策に冒険者も大いに活躍したために存在を認められてきたのもある。

そしてまっとうではない冒険者とは、依頼を受けて以来先の町などに滞在し、前金を受け取っておきながら好き放題に無料で飲み食いした挙句、トンズラするような連中である。

本気で困って、国家が役に立たないから冒険者に頼むのに、その信頼を裏切る相手であるから容赦はない。

また、そういう連中は、同じ冒険者仲間が始末しても国家も黙認する、暗黙の了解となっていた。

ライヒの酒場兼宿屋にして冒険者の宿と呼ばれる、冒険者ご用達の拠点がある。

冒険者になりたい者はこの宿に登録し、根城にする事になる。

依頼主が冒険者を雇いたい時も宿を通す事になる。

宿に登録し、ギルドメンバーになる事によって、宿泊費も安くなるし依頼の斡旋も受けられ、また、依頼主は先に述べたような信頼できる冒険者を雇う事も出来るのである。

そんな宿の戸を、堂々と押し開けて一人の若者が入って来た。

彼は酒場になっっている一階をグルツと見渡してから、暇そうにジョッキを磨いているマスターの所へ歩み寄り。

「何か依頼はないかな？」

と、声をかけた。

マスターは若者を一瞥すると、

「駆け出しはまず登録してもらおうか。」

そう言いつつ、一枚の羊皮紙を突き出した。

若者は手慣れた風を装っていたが、新品の剣に皮鎧では台無しである。

若者は苦虫を噛み潰したような顔をしつつも素直に記入し、これでいいかとマスターを見ると、マスターは酒場の一角を無言で指差した。

そこにはいくつもの羊皮紙が張られ、何か書き込まれていた。

「あれが今ある依頼だ。自分の力量にあつた仕事を選ぶがいい。」

「ありがとう。」

若者は素直にお礼を言うと、さっそく吟味を始めた。

『いなくなつた愛犬を探して下さい。お願いします。』 『可愛

いペットのサラマンダーが行方不明になりました。火のある所を

搜索し、見つけて下さい。お願いします。』 『うちの隣にある

空き家に毎晩光る物が！ 正体を突き止めて下さい！』

などなど。

思わず突つ伏し、勢い良く立ち上がるなり若者は叫んだ。

「なんじゃこりやあゝ！！！！！！！！」

「そうそう夢も希望もある仕事なんてありやしないよ。これが現実つてもんだ、坊や。」

いつの間に来たのか、マスターにうんうんわかるわかると言わんばかりに頷きつつ、優しくそう言いながら肩をポンポンと叩かれ、若者は更にガツクリと頂垂れた。

そこへ、カラーンと入口の戸に仕掛けられた小さな呼子を鳴らして、一人の中年が入って来た。

「冒険者への依頼はこちらでよろしいですか？」

どうせろくな依頼じゃないだろうなと若者は中年に背を向けて、とりあえずの食いぶちにでもと、簡単そうな依頼を物色し始めた。

「そうですが、どのような依頼ですか？」

「魔物の」

「お任せ下さい!!」

魔物と言っ言葉に即座に反応し、真正面に突撃して来て急停止した若者に、思わず中年は一步後退る。

「ななな!？」

「魔物退治なら是非僕」

ボクッ! と、トレーの角で頭頂部を叩かれ、蹲る若者。

「邪魔だ。で、その魔物はどこでのようなの？」

「え、え〜っと・・・ですね。（本当に大丈夫かな。）」

如実に表情でそう表現しつつ、それでも背に腹は代えられない中年は話し始めた。

「ここから北に行った森に、ゴブリンが住み着いたらしいのです。

そのため被害が出ているのですが、国も何かと忙しいらしく手が回せないと言います。我々としては死活問題なので、早急に排除していただきたいのです。」

「分かりました! 今すぐに!!」

「あ、おい!」

マスターの制止も聞かず、若者は復活と同時に飛び出して行った。

「あの阿呆。報酬も期間も聞かずに飛び出しおつて。」

「マスター。」

そこへ、酒場に先にいた、たった一人の客である体格の良い男が歩み寄って来た。

背の高さは中ぐらいなのだが、その筋肉質な体はオーガーのようである。

平凡な顔立ちで印象に残りにくいのだが、体格で人目を引く存在である。

また、この道にいる者なら、誰しも一度は名を聞く存在であった。

「モリオンさん。行っていましたか？」

「一応、将来有望そうな、実直そうな若者ですからね。」

「すいません、ご足労をおかけします。」

「マスターのせいではありませんからお気になさらずに。」

モリオンはそう言つと、若者の後を追つた。

もつとも急ぐ気は無いらしく、ゆつたりと歩いてではあつたが。

「・・・えゝつと・・・。」

事の成り行きに置いてけぼりを食らつた依頼主の中年は、所在無さ
気だ。

「あんたは運がいい。あの人を金で動かすためには、一国の国家
予算並みな金額が必要なんですよ。」

冒険者もピンキリだが、実力に応じて金額は当然上がる。
もつとも、冒険者一組の金額であるが。

「そ、そんなに凄い人なんですか!？」

「彼なら一人でも、竜退治も魔族退治も任せられます。」

愚者の舞い 4

ライヒは他の町よりも高く厚みのある城壁に囲まれている。それは、ライヒが四方共他国と隣接するため、戦乱の歴史を現していた。

もつとも、攻められる主とした理由はライヒが手出しするためであり、周りの国は自立できていればそれでいい状態なので、率先してまで手出しはして来ないのだが。

それでも攻めて敗れた残存勢力だけで防衛しきって今も国がある辺り、優秀な人材を多く雇える好運に恵まれてきたとも言える。

ともかく、依頼を受けた（と、思い込んでいる）若者は城門から急いで飛び出し、街道を北上した。

城壁から5つの畑がぐるっと囲むように広がり、その外側を草の背の低い草原が広く取り囲んでいる。

この草原は魔物が潜みながら接近できないように低く草を刈り、罠なども多数設置されている。

そうしないと、農民が安心して畑仕事を出来ないためだ。

その手入れをしてある草原の更に外側を柵で囲ってあるのだが、その外は手入れをされていない草原が広がっている。

こうやって畑との間に距離を置く事によって、作物と人の安全を図っているのだ。

城壁からは常に騎士が見張りをしており、魔物の姿を見つければ警鐘を鳴らす。

そこまで安全を図るなんて立派な国王だなと思わなくもないが、いざ戦争となれば農民は立派な歩兵隊になる。

ようは捨て駒の壁なのだが、農民を守る事で兵士を確保出来て常日頃は食料を確保できる。

更に、攻め込まれた際には罠で少しでも数を減らせ、騎馬隊の機動力を殺せる。

まさに一石二鳥、いや三鳥なのである。

暖かな日差しの元、元気に、それでいてのんびりと畑を耕す光景を眺めつつ、若者は足早に外柵の門を出、森を目指した。

一步柵の外へ出てしまえば、もう自分の身は自分で守るしかない。

若者はキリツと表情を引き締め、魔物の出現を警戒しつつ先を急いだ。

町の近くと言っても手付かずな背の高い草々は十分に魔物の姿を隠すし、魔物が出ないとも限らない。

つい先日、柵を出て5歩進んだ途端、オークの一団が横合いから現れて、若い娘を攫って消えたという笑えない事実もある。

外柵の門には当然騎士もいるのだが、騎士の仕事は門から魔物の侵入を防ぐ事。

入って来なければ、よっぽど邪魔ではない限り騎士は無関与だ。

そして、門の外に出ると言う事はそれだけの危険を覚悟しなければならぬと言う事だ。

騎士はなんて無責任だと思うかもしれないが、なまじ助けに行つて手薄になった外柵を突破された方が被害が大きいのだから、理に適つてるとは言える。

そのために、下手に手助けするために持ち場を離れると、その騎士が処刑されるという厳格さだ。

ライヒの国王は、そこまで厳格に規則を定めつつ、野心を温めていくのである。

そんなお国の事情は置いといて、何はともあれ若者は道を急いだ。

一刻も早くゴブリンを退治して、町と街道の安全を確保し、更に有名になりたかったのだ。

金も欲しかったが。

草原は結構な距離があり、そこを抜ければすぐ森になる。

そして草原をあと少し進めば森に出るといふ辺りで、若者はふと疑問を感じた。

先に書いた様に、草原は結構な距離がある。

その間、誰ともすれ違わなかったのだ。

ご時世がご時世だけにそんなもんだと言われれば納得するしかないが、それにしても人気が無さ過ぎる気がしてならない。

ライヒは霊峰ファレーズの恵みがあるとは言っても、生活物資全てが生産できて賄えるわけではない。

足りない物資は、当然商人の物流が必要不可欠なのだが・・・。

「あ、そうか。ゴ布林出るんだっけ。」

思わず声に出して確認し、納得する。

ついでに自分が何しに来たのかも再確認。

普通の冒険者達のように仲間がいたら、即座に突っ込みが入ったであろうが、彼は仲間を募るという大前提が抜けていた。

まあ、冒険者に成り立てで即座に跳び出す辺り、正義感だけは強いかもしれないが。

そんな彼が草原を抜けた瞬間、魔物が出るから通行人がいないわけではない事を知った。

街道を塞ぐように大木が倒れていたのである。

「ありやゝ。こりや町に知らせに行った方がいいかな・・・？」

いやいや、先に魔物を退治しよう。誰か通れば当然知らせに行くだろうし、危険の排除が最優先だ。」

若者は一人でいる時間が長かったのかもしれない。

独り言が多いのはそのせいだろうと思われる。

若者はともかく、森に入るために大木を乗り越えようとして・・・その直前に倒れた馬と、停車している馬車に気が付いた。

馬の首筋には矢が突き立っており、馬車の傍には御者らしき男が血塗れで倒れていた。

そして、停車している馬車の戸は、両方こじ開けられて、そよ風を受けて無音で少しだけ、開閉を繰り返していた。

若者は即座に抜剣しつつ大木を乗り越え飛び降りると、身を低くしながら周囲を警戒した。

身構える姿は、とても成り立てとは思えないほど堂々としたものだ。

雰囲気だけは歴戦の戦士のもようである。

そして若者は、警戒しつつ状況を分析する。

馬と御者はピクリとも動かないから既に息絶えているに違いない。馬車の中に誰かいるかも知れないが、今いる場所からは確認できない。

御者を見る限り、切り傷が致命傷のもようであるが、それだけで相手が何かまでは特定できない。

魔物にもゴブリンなどのような、人から奪った刀剣類を扱える物もいるし、山賊は当然、武器を使う。

辺りを警戒しつつ、空いている左手で馬を触り、襲撃があつてからどれだけ経過しているか知ろうとした時、馬車内からゴソゴソという物音と声が聞こえて来た。

「ギャヒ、ブシュルヒギャハ！」

意味不明な、声。

間違いない魔物だ。

若者は警戒しながら馬車の戸口に音を立てないように近寄り、覗こうとした時。

「ギュツホ！！！」

背後からの突然の大声に、若者は元居た方向へ飛び退いて身構えた。そこには普通のゴブリンよりも一回り体が大きく、筋肉も盛り上がったゴブリンがいた。

しかも態度が偉そうだ。

「やはりゴブリンか！！ 俺が相手だ！！」

その声に反応したのか、はたまた先の体格の良いゴブリンの上げた声で動いたのか、馬車の中から3匹のゴブリンが飛び出して来て、若者と体格の良いゴブリンの間に展開する。

「数が増えても一緒だ雑魚め！！ ゴブリン如き、俺が退治してやる！！ デヤア！！」

若者はそう言つて、気合いもろとも大上段から斬りかかった。

その渾身の鋭い一撃は、見事にガギツと大地を少し切り裂いて止ま

った。

ヒョイツと避けたゴブリンは嘲るようにギャヒヒと笑い、他のゴブリンもギャヒギャヒ笑いながら指さして会話する。

『こいつ弱いゴブ！』

『人間なんてこんなもんゴブ！』

ちなみにゴブリンはゴブリン語という独特の言語を話す。

そのため、若者には会話の内容はまったく分からない。

が、馬鹿にされているのは雰囲気で分かる。

若者は怒りのままに、剣を大地から引き抜き、即座に横薙ぎに振るうが、これも軽々と避けられる。

「避けるなあ！！！」

理不尽で無茶な事を怒鳴りつつ、更に怒りを募らせながら右のゴブリン、左のゴブリンと狙いを変えて斬りかかるが、どれも華麗に避けられる。

若者の腕も、剣速と太刀筋を見る限り悪くは無いのだが、いかんせんゴブリンは最下級の魔物と言っても人間の駆け出し戦士並みの実力は持っている。

同じレベルの相手ならば数の多いゴブリンの方が余裕はある。

愚者の舞い 5

体格の良いゴブリンキングは、遠巻きに眺めつつニヤニヤ笑いながら、人間と部下の戦いぶりを見学していた。

ゴブリンキングにしてみれば、人間の振るう太刀筋は大雑把で隙がありすぎる。

それは部下も同じようなものだが、数がいる分こちらが有利と踏んでいた。

そもそもゴブリンは繁殖力が旺盛で、一回の出産で最低3匹、多くて12匹程度も産む。

しかもオークのように年中盛ってはいないが、繁殖期も特に無く年中産む。

最悪この3匹が倒されても、食いつ持が減るだけでなんら問題は無い。

ようは自分が死ななければいい、その程度の考えだった。

若者は必死に戦った。

大上段で剣を振り下ろして避けられ、それを途中で止めて踏み込みながら横薙ぎに振るう。

フェイントを交えてまで強引だろうが無茶苦茶だろうが攻め立てた。だが、当たらない。

剣は相手に当てるで斬り裂いて、初めて相手を殺傷する事が出来る。当たらなければ何の意味もないのだ。

それに体力の限界もある。

数がいる分、早く1匹1匹を倒さなければ倒されるのは自分なのだ。こんな筈はない、こんな筈は、と、呪文のように自分に言い聞かせつつ戦った。

だが、技量はそれに伴い上がる筈もなく、若者は己の弱さを自覚し始めた。

そんな時、不意に戸の開きつ放しだった馬車の中が見えた。

一瞬ではあったが、脳裏に焼き付き、全てがハッキリと見えたのだ。馬車の中には3人の人がいた。

一人は大人の戦士。

恐らく護衛のために同乗して居たのだろう。

しかし、馬車が急停止した際に、守るべき二人を庇うために身を犠牲にしたのだろう。

幼い姉弟を強く抱きしめながら倒れ伏し、首はあらぬ方向を向いていた。

推測だが、魔物から逃げる為に激しく揺られ、疾走する馬車内で幼い姉弟が怪我をせぬよう守ろうと必死に抱きしめながら、急停止した際に踏ん張りきれずに投げ出され、反対側の壁に叩きつけられたのだろう。

狭い馬車内では一瞬の出来事だったに違いない。

姉はその際、絶命した護衛に押しつぶされ、ほぼ護衛と同時に圧死したようだ。

護衛はこの場合最悪の事に、全身を覆うスーツアーマー程ではないにしても、ほぼ全身を金属で覆うプレートアーマーを着ていた。

転んだら自力で起きるのは鍛え抜かれた戦士でも一苦勞な重量があるのだ。

幼い子供では耐えられる筈も無い。

だがそんな姉がつつかえ棒代わりになり、圧死を免れた弟はなんとか生きていたのだろう。

その喉を引き裂かれて、虚ろに空を見上げる目を見る限りは。

なまじ生き延びたが、護衛の体と馬車で挟まれた体は抜け出して逃げる事も出来ず、ゴブリンに虐殺されたのがありありと分かる、痛々しい遺体。

表情は苦痛と絶望に固まり、二度と動く事は無い。

それが若者にはハッキリと見て取れた。

突如身動きを止め俯いた人間に、ゴブリン達は不思議に思っ

らも動きを止めた。

畏かと勘繰ったからだ、それは違った。

若者はあまりの怒りに、感極まって動きが止まったのだ。

「……貴様ら……こんな幼い子供まで……。」

ザワリ、と、若者から猛烈な殺氣が溢れ出し、元来の臆病さ、そして野生の本能でも感じ取り、一步ゴブリン達を後退りさせた。

「許さん！！　たとえ神が許してもなあ！！！！」

キツと若者は右端にいたゴブリン一匹を睨みつけた瞬間、即座に踏み込んで上段から剣を振り下ろした。

その氣迫に圧され、金縛りにあつたゴブリンは避ける事も出来ずに頭から股間まで真つ二つになり、それを目の当たりにしてギョツと驚いたゴブリンに構わず若者は中央にいたゴブリンに猛烈な突きを放ち、脳天を額から串刺しにする。

そのまま踏み込んで剣ごとゴブリンを持ち上げ、その体ごと叩きつけるように残った左端のゴブリンを叩き切る。

ゴブリンキングはその激昂した人間の力量に戦慄した。

怒るなりいきなり剣の速さと力が増せば驚愕もしよう。

だが、ゴブリンキングはその力量を見定めた上で、ニヤリと笑って人間と対峙した。

人間は激しい息使いと血走った目をゴブリンキングに向け、即座に斬りかかって来た。

「デヤア！！」

両手で柄を握り、大上段に振りかぶった剣を渾身の力で振り下ろし、受け流されてたたらを踏むがなんとか堪え、牽制がてら左手で横薙ぎに剣を振って時間を稼ぎ体勢を整える。

氣合いと共に再び剣を上段に構えて踏み込み振り下ろし、避けたゴブリンキング目掛けて胸の位置で力任せに剣を止めて突き込む。

その剣を剣で弾かれ、がら空きになった胸めがけて突き出された剣を、なんとか身を擦って避けるがバランスを崩し、一步後退する。

「ギヤハハハハ！　ギユツホツホウ！」

小馬鹿にしたゴブリンキングの笑い声が、一層怒りを狩り立てる。

「おのれっ!!」

大上段から振り下ろし、そのまま下段から切り上げて再び上段から切り下ろして斜めに切り上げる。

流れるような連撃はしかし、ゴブリンキングの華麗な回避で見事に空を切るばかり。

怒りに冷静さを失って、単調な攻めになっている事に若者は気が付かなかった。

時間と体力ばかり消耗し、決め手に欠けるその攻撃は、ゴブリンキングの思う壺であり、狙っていたものだった。

やがて体力を消耗しきった若者の動きは鈍くなり、遊び飽きたゴブリンキングは若者の剣を無造作に弾き飛ばした。

「ギャハハハハ! ギュルツツフホウ! ギャハハハハ!」

「ちつくしょう!!」

悔しがってももはや剣は手になく、予備の武器も若者にはない。後は肉弾戦しかないのだが、互いに武器を持っても勝てなかった相手に素手では更に勝ち目がない。

（ここで、こんな所で、俺は死ぬのか・・・?）

だがそれでも、刺し違えてでも若者はこのゴブリンキングを打ち倒す決意をした。

死ぬのは当然嫌だが、それでも死ななければならぬのなら、せめて最後の最後まであがいて、魔物を倒せる可能性がある限り無駄死にだけはしたくなかったのだ。

「ギャホホ!」

「ギャハツハア!」

新手のゴブリンの姿が見えた。

それも6匹。

（今ならまだ!）

若者は即座に覚悟を決めると、ゴブリンキング目掛けて突撃しよう

とした、まさにその時。

「光りよ。我が敵を滅ぼせ。」

まるで狙っていたかのようなタイミングで、思わず振り返った瞬間、ピカッと一条の光線が新手のゴ布林6匹を貫き、瞬時に冷凍する。何が起きたのか分からぬまま見詰めていると、凍った新手のゴ布林は何の前触れも無く、目の前で粉微塵に小さく破裂し消え去った。そして、ガギッと金属同士のぶつかり合う音で若者が振り返ると、どこから現れたのか体格の良い中背の男が持っていた小剣で、ゴ布林キングに斬りかかっていた。

中背の男は特に面白くもなさそうにフェイントを多彩に織り込み相手を翻弄すると、ゴ布林キングのから空きになった脳天を一突きし、決着がついた。

何が何だか分からないうちに戦いは終わり、途方に暮れかけたが、中背の男が自分を助けてくれた事は理解できた。

中背の男はドサッとゴ布林キングが倒れ、もう動かないのを確認すると、クルッと若者に振り向き。

「阿呆。」

愚者の舞い 6

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

（阿呆・・・今、阿呆と言ったか？ 助けてくれたのは嬉しいが、阿呆？）

何が何だか分からんと言った顔で見返す若者に、中背の男、モリオンは再び口を開いた。

「阿呆で物足りないならど阿呆だな。 お前ほどの阿呆は正直なかなか見る事ができん。」

思いつき見下した目で言われ、思わず若者は激怒した。

「なんだよいきなり！ あんたにそんな事言われる筋合いはねえ！」

「ある。」

返答は予測していたかのように即答だった。

「なんだとお！？」

「お前がろくに依頼の内容も聞かなければ理解もしないで飛び出す阿呆だから、俺がこんな苦勞をしなきゃならん。」

「あんたが何者か知らねえが、だったら俺が死のうがどうしようがほっとけばいいだろ！？」

「そうしてもいいならそうするがな。 まあ、阿呆じゃないと言うなら説明させてやろう。 着のみのまま飛び出して、これからどうするつもりだったんだ？」

「どうするって、そりゃ、森の中を搜索してゴブリンの巣を潰すだけだろ！？」

モリオンはやっぱりなあという顔で納得すると、思いつきこれ見よがしにため息を盛大についた。

「ななな、なんだよ！？ 何かおかしい事を」

「ほんつつつつつつきで阿呆だなお前。」

「なにおお！？」

「森の搜索するのにどれだけの時間がかかるんだ？」

「え？　だつて森だろ？　数時間で済むだろ普通。」

もう一回これ見よがしに盛大な溜息。

「だからっ！！」

「この森は街道で突つ切る分には1時間もかからん。だが、それは一番薄い部分を通っているからだ。言つてしまえばヒヨウタンのくびれ部分を街道は通っている。大きく膨らんでいる部分は実に広大な面積があり、しかも木々は自然に伸びた物で視界は利かないし移動も困難だ。そんな場所をたつた一人で搜索する無謀さも天然記念物に指定したいくらいだが、拳句に装備もろくに持たない無謀さは見世物小屋開ける珍しさだ。」

「・・・え？」

「つまり、お前は阿呆だと言う事だ。」

「だからっ！！！！」

「ほれ。」

そう言つて、背負っていた背負い袋の一つを足元に放り投げられ、若者は意表を突かれて言おうとした言葉を飲み込んだ。

「必要な荷物はまとめておいた。やるから自分で持て。　どうせ用意はしてないだろ？」

「うつ・・・。」

「初心者の癖に仲間とパーティも組まず、飛び出すから阿呆だと言うんだ。　いいか、冒険者に成るのは名前を宿で書けば登録できて冒険者に成れる。　だが、生き残る事が出来るかどうかはそいつ次第だ。　お前は自分の過ちで一度死んでいる事を忘れん事だな。」

普通ならさっきのゴ布林キングにやられて終わりだ。」

「ゴ布林キング????？」

何それと言わんばかりの若者に、モリオンは苦笑いを浮かべる。

「そう言つ知識は魔術師の分野なんだがな。　それも仲間を集めてパーティを組めば解消できるだろうよ。　まあ、今回は俺が教えてやろう。　生憎俺も魔術師だしな。」

「魔術師！？ あんたが！？」

「他に何に見えるって言うんだ？」

「戦士。」

「こんな弱い戦士がいるか。」

いやまて、そこまで体格が良くて剣で戦う魔術師なんて聞いた事ねえぞ。

そうは思うが、それを言ったら亡き者にされそうな予感がして沈黙する若者であった。

「ところでお前の名は？ 阿呆と呼ばばいいと言うなら聞く必要も無いが。」

「阿呆言うな！ 俺にはルーケと言う名がある！」

「・・・ルーケ？ どこかで聞いた事がある名だがまあいいか。」

ゴ布林キングと言うのはだな。」

「まあいいかって。」

「ゴ布林の中でも支配階級が存在で、力も強いし知能も普通のゴ布林より多少ある。」

「無視かよ。」

「教えてやってんだから聞け。」

ゴスツと、避ける事も出来ないような素早さで、小剣を収めたままの鞘で脳天を打ち下ろされて蹲る。

「ふぬおおお・・・。」

「普通のゴ布林は駆け出し戦士並みの力量があるが、キングとなるとベテラン並みに強い。 また、キングのいる集落には大概ゴ布林シャーマン（精霊使い）やメイジ（魔法使い）もいるから、危険度は倍増だ。 ようは、お前一人で万が一なんとか巢を見つけたとしても、勝ち目はない。」

「そ、そんなに！？ だってゴ布林だぜ！？」

「阿呆。 ゴ布林だって種類があるんだ。 さて、いつまでも油売ってるといつまで経っても解決しないな。 行くぞ。」

「え？？」

「お前が依頼を受けたんだろうが。 お前が果たさんでどうする。今回はギャラ折半で協力してやる。」

「半分……。」

「本来ならお前のような足手纏いなんか1銭も貰えねえよ。 冒険者と言う仕事を舐めるな。 ……ともかく、この木は邪魔だな。」
そう言いながら街道を塞ぐ大木に歩み寄ると、モリオンは片手で持ち上げて、邪魔にならない場所に放り投げた。

「……か弱い？」

ボソツと言うルーケを無視して、モリオンはキングの遺体に再び歩み寄ると、小剣を抜いて遺体に剣の腹を添えた。

「あくたの可能性よ。 時を戻せ……。」

「……? なにやってんだ？」

「搜索の魔法だよ。 こいつの辿って来た道を辿れば巢に辿り着くだろ？」

「そんな魔法もあるんだ。」

「あるよ。」

ちなみに搜索は黒魔法でも中級魔法に属するが、モリオンの使った魔法は喪失魔法である。

普通に伝わる搜索魔法は、先に魔法をかけておいた自分の持ち物などの場所を特定できる魔法である。

魔法の知識のないルーケにはそんな違いなど分からないが。

そもそも魔法の種類も良く分かっていないのである。

魔法には大雑把に分けて、精霊魔法・黒魔法・白魔法がある。

この他に特殊な魔法として、竜語魔法と暗黒魔法などがある。

精霊魔法とは、妖精界や身の回りにいる精霊達に、強制・協力・お願いなどをして力を借り、自らの魔力を媒体にして具現化する魔法。自然的な魔法が多く、木を生き物のように動かすトレントなどがある。

白魔法は主として回復系。

治療を主体とするが、結構複雑で困難な分野である。

怪我をした場合、病気の場合と使い分けないと、逆に負傷させたり悪化させる。

黒魔法は破壊魔法が主体であり、一番魔法使いと言うにふさわしい系統である。

火炎球や氷の矢など、魔法の媒体を通して具現化し、相手を攻撃する。

この他、各系統とも儀式魔法と呼ばれる魔法も存在する。

魔法陣を描き、長い呪文詠唱により効果を上げたり、専用の強力な魔法などを行使できる。

メテオと言う小隕石を落とすような魔法が代表例だろうか。

人間が覚えて使える魔法はこの4種類であり、竜語魔法などはそれぞれの種族専用魔法などになる。

また、複数の系統を扱える魔法使いを、魔導師と呼ぶ。

愚者の舞い 7

搜索の魔法をかけ終わるなり行動に移そうとしたモリオンを、ルーケは慌てて止めた。

「ちょ、ちよつと待てよ!」

「どうした? 探索に必要な荷物はさっきお前に渡しただろう。まだ何かあるのか?」

「荷物は正直ありがとう。でも・・・。」

そう言いながら、襲撃された馬車を見る。

そこにはまだ、幼い姉弟と護衛の遺体がある。

何とかしてやりたい、だが、ルーケには名案が無いのだ。だからこそ、引き留めたのだが。

「ほつとけ。」

答えは簡素だった。

「なっ・・・!!!!!!」

「死体は死体だ。生きてりゃ話は別だが馬も死んでるしどうにもならんだろ。それともお前、押していくか?」

「そんな事出来るなら最初からやってるよ! それが出来ないから魔法使いであるあんたにどうにか出来ないかと・・・。」

他力本願だけに、最後は声に力を失う。

自分でなんとかできるなら、それにこした事はないし出来るようになるりたい。

なんでもできる、助けられる、そんな男にルーケはなりたかったのだから。

「正直言うと方法はあるが、俺は遺体の回収など依頼されておらん。依頼以外で何かしたいなら、自分の力と責任で行動しろ。」

「・・・あんたは・・・。」

「なんだ?」

「あんたには人の心が無いのか!?」

だから、モリオンの態度は許せなかった。

「どうにもできないなら仕方がないと諦める事も出来る！　だがあんたはできるんだろ！？　なんで・・・なんでそんな事が言えるんだ！！」

モリオンは熱く食ってかかるルーケを鼻で笑うと、足元に落ちていた短い枯れ枝を拾い上げてルーケに放り投げた。

「その枝を100個に折り分けてみる。」

「な・・・！　無理に決まってるだろ！？」

受け取った枝は短く、100個に分けるには1ミリ程度で折らなければならぬ。

「それと一緒に魔法は無限じゃない。　それに、冒険者にとって一番大事なのは依頼の完遂だ。　今もし、俺が魔法で馬を生き返らせる事が出来たでしょう。　しかし、御者は死んでいない。　御者まで生き返らせる魔力も無い。　お前がその馬車を町に届けるとしよう。　その間、次に通りがかった旅人がゴブリンに襲われたらどうなる。　お前が受けた依頼はゴブリンを退治して街道の安全確保だろう。　違うか？」

「そうだ！　その通りだ！　だが、ゴブリン退治に行っている間にこの子達はどうなる！？　野生の獣に食われ、山賊に金品を奪われて、遺族には何も残らないじゃないか！　遺体だって・・・親の元へ行けないんだ！！」

「生物は死して土に返る。　人間だけだ、そんな感傷に拘るのは。」

「拘って何が悪い！？　親しい人を失えば、誰だってせめて安らかに眠れるようにしてあげたいと思うさ！！」

「ハッハッハ。　若いねえ。」

「若くて悪いか！！」

「その気持ち、いつまで持ち続ける事が出来るかね。」

「いつまでだって持ち続けるさ！　俺は俺、他の何者でもない！」

「その青臭さ、いつか足を掬う事になるかもしれん。　だが・・・嫌いじゃないな。」

「え？」

「お前の心意気に免じて、協力してやろう。」

「ほ、本当か・・・？」

「その代わり、依頼料残り半分も貰うぞ。」

「ハウッ。」

「どっちにしろお前じゃ依頼を達成できなかったんだ。文句はないだろ？」

そう言われればグウの音も出ない。

依頼は目的を達成し、生きて帰らなければならぬ。

ゴブリキングとの戦いで死んだと考えれば、確かに仕事は失敗だ。しかも、最初の段階で死んでいた筈だから、その遺体となんら変わりはない。

「ま、俺には苦勞に見合わん安賃金だが・・・冒険者とはそんなものだとしっておけ。それに依頼料無しと言っても、お前には貴重な経験だ。安い授業料とでも思え。」

「チエツ。他人事だと思つて。」

「なんならさつき渡した装備代金も請求してやろうか？ 今回の依頼料では揃わんぞ。」

「ええ！？ そんなに高いの！？」

「中身を確認してみろ。全て一流品だ。いいか、冒険者は己自身の肉体・知恵、装備と準備した物、全てをフルに活用しなければ生き延びれないし依頼も達成出来ん。そのためには高くても一流品を揃えておくことだ。安物のロープで断崖絶壁を降りる気になるか？」

「それは・・・別の意味で怖いな・・・。」

「今回は気紛れだが協力してやる。その装備一式も冒険者になったお祝いがてらくれてやる。次からはちゃんと仲間を募つて、パーティーを組んでから依頼を受けるんだな。さて、いい加減日も暮れてくる頃だ。チャッチャとやってしまつか。」

「で、どうすんだ？」

「黙って見てろ。異界の力、異界の方程式。グレス・ブケラ・ムルへ・・・」

モリオンは腰の小剣を抜き、胸の高さで構えると、歌うように呪文を唱え始めた。

それはやがて踊るような身振り手振りも加え、やがて魔法は完成した。

「あるべき姿、過去の鏡、我が真の名において、汝ら在りし姿を取り戻せ！」

ボウッ！ と、馬車全体を包み込むような巨大な魔法陣が突如淡く輝きながら出現し、4人の遺体と馬の遺体が淡い光に包まれ輝きだす。

「おおおお！？ すすす、すげえ・・・！！！」

驚嘆するルーケの目の前で、やがて光と魔法陣は消え去り。

「ブヒヒン！？」

と、矢を抜け落としつつ馬が突如起き上がった。

「おお！？ い、生き返った！？」

そんなルーケに構わず、モリオンは馬車に歩み寄ると、乱暴に護衛の体を引き摺り下ろした。

「ぐあー！！」

その衝撃で護衛も苦痛の呻きを漏らし。

「ひい！？」

男の子が引きつった悲鳴を上げてモリオンから逃れようとし、背後の姉にぶつかって転がり、慌てて這いずりながら馬車の奥へ引き籠って身を縮める。

「・・・ここは・・・？」

何が起きたのかわけも分からないまま死んでしまった幼い少女は、キョトンとモリオンを見上げる。

「な、なんだお前は！？」

痛みに顔をしかめつつ、護衛が慌てて起き上がるうとして・・・鎧の重さで失敗し、転げてモリオンを見上げつつそう怒鳴る。

護衛にしてみれば、意識が戻るなり馬車から引き摺り下ろされたのだから普通の反応ではある。

「ゴブリンの襲撃にあったのです。ですが、我々が退治しました。もはや安全ではありませんが、日暮も近いので急いで町に向かった方がいいでしょう。」

そう言いながら、まだ足元で意識の戻らない御者を蹴り起こす。

「あ、あの、お名前を……。」

姉の方は幼いながらもなかなか聡明なようだ。

どこかの貴族なのかもしれない。

「名乗るほどの者では」

「俺はルー　ゴゲツ！」

自分から身を乗り出し、名乗りを上げようとしたルーケの顎を素早くアッパーで突き上げて黙らせ、モリオンはサッサと森の中へと足を向けた。

愚者の舞い
8[illegible]

搜索開始が遅かったため、すぐに夕方になってしまった。そのために野営をする事にしたのだが。

[illegible]

聞えよがしに大きくため息をつく。モリオンは懷に隠し持っていた小石をルーケに投げ付けた。

小石は見事にルーケの側頭部を強打し、木の枝から落ちそうになつて慌ててしがみ付く。

「だだだだだじっすずずず！」

「前物の音でゴブリンが寄ってきたらどうすんだ。」

「だだだだっでででぶぶぶぶぶぶ」

鬱蒼と生い茂った森の中は、夜が訪れるのは早く、朝は遅い。

そして夜になれば、急激に冷え込む。

薄い毛布一枚では凍えるほどに。

カチカチ煩いのは、ルーケがガタガタ震えて歯を鳴らしている音だ。

「そんな事も知らんで依頼を引き受けたお前が悪い。そもそも俺が駆けつけなければ、着のみのまま、食料も無く、真つ暗闇の中で過ごす事になったんだ。感謝しろよ。」

確かにモリオンの渡した装備の中に、携帯用の乾燥肉に野菜など、食料が５日分は入っていたし、寝具として毛布などもしっかり入っていた。

「だから文句を言わずに耐えているんだろうが!？」

そう声に出して言いたいが、ゴブリンの巣が近いので怒鳴るわけにもいれない。

「今日はこの辺で野営をしよう。」

薄暗くなってくるなり、モリオンはそう言って宿営場所を探して見回した。

「え？ まだ・・・」

「阿呆。森や山は暗くなるのが早いんだ。それにゴブリンは元来夜行性。暗視能力もある。まさかお前、明かりを煌々と点けながら搜索する気だったのか？ 弓矢の標的として最高だな。」

前述したが、ゴブリンは道具も使う。

暗闇に浮かぶ明かりに灯されたルーケは、さぞや目立つ事であろう。

「だがそれも一つの方法だな。おびき寄せるのに。」

「じよ、冗談はやめてくれ！」

「じゃあ大人しく準備しろ。」

そう言われても、ルーケは何をどのように準備したらいいか分からない。

とりあえず背負い袋の中身をチェックしてみる。

そして、疑問に思っていた事を聞きたくなった。

「なあ、聞いていいか？」

「なんだ？」

「なんで名前を聞かれて名乗らなかったんだ？ それにあの護衛。引き摺り下ろす必要は無かったんじゃない？」

「確かに、どこかの貴族の子みたいだから、金鶴としても知り合いになっただけで損はないかもな。」

「だろ？ なのに・・・」

「だが、俺は金に困っていないし、貴族どころか王家の知り合いもいる。無理に増やす必要も無い。また、護衛を引き摺り下ろしでもしないと、速やかにあの女の子がまた潰れるだろうが。ちゃんと持ち上げて負担がかからないように配慮してやったし、護衛など体を鍛えているからあの程度どってことないだろ。鎧も着ているしな。」

そう言えば、片腕で大木をどかすモリオンが両手使ってたなと思い

出す。

もつとも兜を被っていない頭から落としていた気がするが。

「・・・じゃあなんで、俺が名乗るの邪魔したんだ？」

「お前は働いて無いだろうが。我々と言って含めてやっただけでも感謝しろ。世の中そんなに甘くねえ。」

「むう。」

「今晚はお前、あそこにしろ。」

そう言いつつ、モリオンが指差したのは、高さ3メートルはある立派な枝。

「・・・ええ!？」

「俺はこっちに寝る。落ちるなよ。死ぬぞ。」

「ちょ　ゴエツ!」

「煩い。」

スパーンツ! と、大声を上げ始めたルーケを殴って黙らせる。

「言っておくが、ゴブリンの巢はここからそんなに遠くない。ここで野営するのは明日の襲撃に備えてでもある。ここで大声あげたら深夜に取り囲まれて、逃げ場も無いまま弓矢の標的にされてゴブリンの餌だ。静かにしろ。」

「近い?　だったら・・・」

「夜行性の魔物の巢に夜襲かける馬鹿はお前だけだ。魔法にしろタイマツにしろ、明かりと言うのはそんなに明るく照らし出すものじゃない。それに反し、光はかなりの距離でも暗闇では見える。」

タバコを暗闇の中でふかしてみろ。丘一つ先でも見えるぞ。」

「そんなに?　でも、どうやって・・・」

木登りは子供の頃よくやったが・・・流石に寝た事はない。

「木の幹に体を預けて寝るんだ。鎧は脱ぐなよ。万が一襲撃されたら困る。それに樹上でも安全とは限らん。」

そういう理由で、当然、火を焚き暖をとる事も出来ず、震えて耐える事になったのである。

なんだかんだ言いながら、モリオンはこの真っ直ぐな性格の戦士が

嫌いではなかった。

そうでなければゴブリンキングから助けなかったし、そもそも追いかけてこなかった。

正直、本当に気紛れで助けようと思ったただけなのだが。

（これも命運と言うやつかもな。しかし、この物音は闇に響く。

ゴブリンの巢にも聞こえるだろうな。なら、利用するか。）

モリオンは無言で指先を動かすと、魔法をかけた。

少し時間が過ぎた頃、ゴブリンの巢は大混乱に陥っていた。

ゴブリンは夜行性であるため、日中は洞窟などの暗い所に引っ込み、寝ている。

しかし、日中に獲物の通る街道を放置する気になれず、キング自ら指揮して襲撃を繰り返し、夜間は闇に紛れて、なおかつ人間は寝る時間なので襲撃が容易いため、部下に任せると言う、ゴブリンにしては知能的な連中であつた。

だが、起きてみたら、その昼間襲撃隊である指導者のキング達が帰つて来ず、右往左往していたのである。

そこへ聞こえて来た不気味な力チ力チと言う物音。

人間どもの襲撃かと、女子供を最奥に、男連中は辺りの警戒と撃退に向かった。

だが、物音の根源は見つからず、襲撃者の姿も無い。

ただでも指導者の未帰還という不安と混乱の最中であつたため、効果は抜群であつた。

いつものように出かけて獲物を盗つて来る事も出来ず、根源の排除も出来ず、子供は泣き叫び男連中はイライラして暴れまくる。

阿鼻叫喚と化していた。

震えながらもいつの間にか寝てしまったようだ。

いつの間に来たのか、モリオンに揺すられて目が覚め、寝ぼけて落ちそうになって自分の位置を思い出す。

「行くぞ。」

そう言われても、辺りはまだ、真っ暗である。

「お前な。 明るくなってからゆったり移動する気だったのか？」
そう言われても、体の芯まで冷え切った体は思うように動かない。
返事をするのも億劫なほどだ。

モリオンはため息を一つつくと、無造作にルーケを蹴り落とした。
「うおおおお！？」

猛烈な落下感と地面が急速に迫って来るのが見え、ルーケは本気で
死ぬかと思った。

が、激突する瞬間にピタッと停止して、ゆっくりと落ちる。

その横にモリオンは平然と飛び降りて来た。

「目が覚めたる？」

愚者の舞い 9

確かに目は良く覚めたが、同時に人生も終わる直前だったため、素直に礼を言う気も起きない。

無然としながらルーケは、モリオンが持つて降りて来た自分の荷物を背負うと歩き始めようとして、襟首掴まれて止められる。

「グエツ。」

首が締まってカエルが潰れたような声が出る。

「そっちは街道だ。方向音痴かお前？」

「あれ？」

慌てて辺りを見回すと、確かに昨日来た・・・と、そこで気が付いた。

暗闇なのに良く見えるのだ。

そう言えば暗い地面に落とされたのに、シツカリと地面が見えていた。

（暗闇に目が慣れたため・・・か？）

それにしても昼間のように良く見えるのが気がかりで不思議なのだが。

「なにトンビが油揚げ攫われたような顔してんだ？」

「それ、が じゃなく に だよな？」

「そんだけひょうきんな顔してんだよ。」

「むう。」

「さて、行く前にお前の装備を点検しよう。」

そう言いつつ、モリオンは丹念にルーケの鎧などを点検し始める。

「え？ どうかおかしいかな？」

「鎧を着ているのは見りゃわかる。だが、これから襲撃するため静かに前進し、配置に付かなければならん。どうせ消音処置してないだろ？ お前。」

「そんなに煩いかな。」

「静まり返った闇の中では、僅かな物音も響き渡るものさ。」

ドーン！

「な？」

「本当だ。よくきこ・・・ええ！？これってゴブリンの巣の方
向じゃあ！？」

「そのようだな。」

「そのようだって落ち着いてる場合か！？急がなきゃ！！」

「急いで行つてどうする？」

「だって誰かが襲撃しているって事だろ！？」

「そうだな。どっちの魔法の音が分からんが。よし、これでい
いか。もはや意味はないが。」

「ほらモリオン急いで！！」

「だから、急いで行つてどうすんだ。いいか、ゴブリンは一か所
だけに被害を及ぼすわけじゃない。それこそ巢を中心にして広範
囲になる。他に被害のあった人や国が他の冒険者雇つててもおか
しくないだろ。」

「だったらなおさら急がなきゃ！」

「んで、その場合早い者勝ちになるんだ。今から急いで駆け付け
て協力しても、無駄骨だ。それに襲撃しているんならそれなりに
準備してから攻めているだろうから、罠なんか張ってるかもしれん。
それに引つ掛かったりして邪魔するのも信義に反する。それに
お前がノコノコ突っ込んで行つても足手纏いにしかならんのだろ。」

「じゃあどうすれば！？」

「落ち着いてゆっくり行けばいいさ。他の誰かが退治しても、依
頼成功には違いないしな。ゴブリンキングは倒しているわけだし。」

「

「・・・そういうもんか？？」

「そういうもんだ。暗視の魔法をかけてあるからめくらになる事
はないだろう。ゴブリンが襲撃者が罠を張ってるかもしれんから、
それに注意して進むぞ。お前は罠の知識無いだろうから、俺の後

に付いて来い。」

「暗視の魔法！？ 道理で……。 って、いつの間に？？」

「お前が寝ている間に。 行くぞ。 万が一負けてるようなら手助けしてやらんとな。」

（それで良く見えるのか。）

納得できたルーケである。

ゴブリンの巢まで、結局罾は無かった。

だがどうやら、襲撃者の方には罾が張ってあったらしく、不意を衝いての襲撃に失敗したようだ。

魔法の明かりで煌々と照らし出された洞窟入り口付近で、ワラワラ湧いて出て来るゴブリンと4人の冒険者らしき人々は激戦を繰り広げていた。

「これは……。助けよう！」

「いや、その必要がある様には見えんが。 良く見ろ。 有利に戦いが進んでいるだろ？」

「……。でも、何があるか分からないじゃないか。」

「その通り。 ま、不利になるまで見学だな。」

モリオンの言う通り、ゴブリンは数が多いが冒険者達に次々倒されて逝った。

「中々の手足れのようなな。 連携が見事だ。」

言われて意識して見てみれば、確かに見事に息が合っていた。

戦士と盗賊が壁になってゴブリンを押しとどめ、黒魔法使いは後ろから魔法でゴブリンを攻撃し、白魔法使いは負傷した仲間を手際よく治していく。

ゴブリンは魔物の中でも最低レベルと言われるが、この戦いを見れば納得もできる。

もっとも、そのゴブリンに後れをとった自分はなんなのか、ルーケは空しくもなったが。

そんな事を考えている時、突然洞窟の闇の中から光り輝く矢がゴブ

リン達の頭上を飛んで来て、黒魔法使いの胸に突き刺さり打ち倒す。
「ぐあ！」

「チムニー！！ 今治すわ！」

だが、白魔法使いが魔法を唱えるより早く、もう1本光る矢と、光る球体が飛んで来た。

黒魔法の光の矢と精霊魔法の光の精霊だ。

共に初級攻撃魔法だが、体力の少ない魔法使いでは耐えきれるかどうかがギリギリであろう。

それも抵抗に成功しての話である。

攻撃魔法は打ち消す事が出来ないため、自分の魔力で抵抗してダメージを半減、またはもつと相殺する事が出来る。

しかし、先にダメージが入っているため、意識が無かったりしたらモロにくらう事になる。

これはやばいのでは、と、ルーケがモリオンを見た瞬間にはすでに行動に移していた。

「打ち消せ！」

モリオンが強く声を発しながら小剣を突き出した瞬間、ろうそくの火が吹き消されるように光の矢と光の精霊は消滅した。

「……！！！？……」

あまりに非常識な結果に、ゴブリンも冒険者達も動きが止まり、モリオンとルーケを振り返って初めて彼らの存在に気が付いた。

洞窟からは信じられないと言わんばかりに、3匹の異質なゴブリンが姿を見せた。

「ヘルファイヤー！」

モリオンの声と同時に、異質なゴブリン三匹の足元に淡く輝く1つの魔法陣が現れた。

「キヨヒ！？」

3匹はそれに気が付いて逃げようとした時、魔法陣がギガツと軋むような音を立てて内輪が回り、火炎が魔法陣から噴き出してその身を蒸発させる。

暫し呆然とする冒険者達とルーケ、そしてゴブリン達。

いち早く行動に移ったのはゴブリン達だった。

敵う相手ではないと悟るなり、洞窟に戻らず、個々に四方に逃げ出したのだ。

「いかん！ 逃がすな！！」

戦士の男がそう叫び、追討しようとしたが。

「光りの矢！」

モリオンの突き出した左手の先に光り輝く球が現れ、そこから数十もの光り輝く矢が放たれて、全てのゴブリン達を複数本ずつ射抜き消える。

あまりの結果に、冒険者達もルーケも呆然と見ているしかなかった。「お邪魔してすいません。同じ依頼を受けたようですね。ところで、そちらの方。先ほど負傷したようですが大丈夫ですか？」

にこやかにそう言われ、ハッと白魔法使いは気が付き、慌てて倒れている仲間に回復魔法を唱え始めたのだった。

「助けてくれてありがたい。だが、先に手を出したのはこちらだ。そちらは手を引いてもらおうか。」

リーダーであるう、全身金属鎧であるプレートメールアーマーを着込んだ戦士が、堂々とモリオンにそう告げた。

それを聞いて、怪我の治った黒魔法使いと、介護していた白魔法使いはオロオロと動揺し、シーフはニヤニヤ笑って推移を見守る。

同じ魔法を使う二人には、このオーガーのような肉体を持った男の凄さを良く分かっていたためだ。

だが、リーダーであるこの戦士は、パーティ内の絶対的な権力を握っているらしく、口出できないでいるようだ。

「それは冒険者の信義に則って、お譲りします。私は何が何でもゴブリンを倒したいわけではありませんし。それと、この巢のキングは既に倒しました。後は雑魚しか残っていないと思います。が、ご用心を。」

「左様か。ご苦労だったな。」

なんとなく、横柄な態度の戦士にルーケはムカついた。

モリオンが手助けしなければ、全滅していたかもしれないのだ。

それをこの態度はどうだ？ と。

「ですが、こちらと同じような依頼を受けている以上、中に入らねばなりません。露払いがてら、離れて着いて行かせて貰いますよ。」

「

いいだろう。邪魔はするなよ。行くぞ！」

仲間にその声をかけ、戦士は指揮を取り始める。

「ポルタ、先頭に立ち畏の警戒を頼む。チムニ、明かりを。ベ

ラと共に後ろだ。行くぞ。」

そう指示すると、シーフを先頭に、少し離れて戦士が、その少し後を二人の魔法使いがペコペコとモリオンに頭を下げながら洞窟に入

って行った。

「いいのか？ あんな好き放題言わせておいて。」

「クツクツクツク。可愛いものじゃないか、ヒヨッコの囀りなんか。一々気にしてたらこの稼業はやっていけんよ。実力が無ければ死ぬだけだしな。」

事実、死にかけたルーケとしては何も言えないわけだが。

「昨日小細工しておいたから魔物は分散していないと思うが、一応付近は警戒しておけ。万が一と言う事もあるからな。ところでお前、なんで冒険者に成ろうと思ったんだ？ 親は反対しなかったのか。」

前を進む冒険者達はシーフが罾を警戒し、探しながらの前進なのでそんなに早くはない。

そのため二人は、まだ洞窟内に踏み込んでさえいなかった。

「親？ そんなものいねえよ。」

「いない？ 孤児か。」

「俺も詳しくは知らないんだ。ただ、幼い頃に魔物に襲われて死んだらしいけど。」

（ふむ。どうやら誰も教えていないようだな。）

実は、モリオンはルーケの生い立ちを知っていた。

ルーケの母親は勇者アレスの血を引く唯一の存在であり、剣の腕も確かで、勇者の子孫として恥ずかしくない器量を持ってもいた。

だがルーケが2歳の時、第二子の臨月を迎えていたためろくに抵抗できず、また、父親も奮戦したが力及ばず帰らぬ人となった。

唯一生き残ったのは、その時屋敷に残っていたルーケだけだった。

その日、いつもは物分かりの良いルーケがぐずって行かないと駄々をこねたため、両親は仕方なく執事に任せて王城へ向かったのだが、その帰り道、襲撃されたのだ。

問題はその後。

アレスの血筋はルーケ以外には残っていなかったが、旦那の方の血筋は大勢いた。

そして、人としては、最低の輩が多かったのだ。
幼いルーケから財産だけ奪い取り、一文無しにして恥ずかしいとも
思わない連中。

多少まともな連中もいたが、その手の連中に邪魔されて手出し出来
なかった。

あまりの酷さに同情した執事がルーケを引き取り、育てる事にした
のだが、その執事もたった5日で殺害された。
奪った財産が取り返されるのを警戒した者の手によって。

幼いルーケは運良く難を逃れたが町に放り出され、スラム街で育つ
事になる。

18年間、盗賊などの下働きとしてこき使われ、それに嫌気がさし
て自立する決心をし、冒険者になったのだ。

なけなしの、自分で蓄えた金を剣や鎧という装備に変えて。

モリオンはそれに同情してルーケを助けようと思ったわけではな
かったが、何となく惹かれるものがあつたのか、こうしてわざわざ手
助けをしている。

（アレスの奴、今のルーケ見たら嘆いて自殺しそうだな。）

そんな事を考えつつ、モリオンはルーケを促して洞窟に踏み行つた。
先行する冒険者はかなり奥まで進んでいた。

ただ一本道のため、遙か彼方に魔法の光に照らし出された彼らの姿
が浮かんで見えている。

（本当に暗闇の中って遠くまで行っても目立つものなんだな。）

ルーケは先ほど教えられた知識を確認し、事後気を付けようと思っ
た。

そんな彼らの陣形が乱れ、剣戟が響き渡る。

洞窟内だけに物音が良く響くなど、ルーケは思った。

ルーケは駆け付けけるべきか迷い、モリオンを見る。

暗視魔法のおかげで、モリオンの様子は良く見えた。

モリオンは意にも介していないのか、平然としたものであつたが。

「ほっとけ。 雑魚に後れはとるまいよ。 大口叩く実力はあるし

な。 雑魚の相手だけならさつき見て分かっているだろう？ 掃除は任せてやるさ。 ククク。」

ルーケは肩を竦めると、モリオンと並んである程度まで進み、邪魔にならない程度で止まって見物する。

気楽に見ていたためか、ある程度慣れて来たためか、彼らの実力を見定める事が出来た。

大口叩くだけあって、戦士の技量は中々のものだ。

それに対して魔法使い達は少々レベルが足りないようで、初級魔法しか使っていない。

また、シーフも鎧が薄い皮鎧のせいか、戦士に比べて動きがぎこちない様に見える。

どうやら、実力者である戦士に三人が着いて来ているといった感じだ。

「戦士一人では剣で対抗できる相手しか戦えない。 どんなに腕を磨いてもな。 魔法使いも同じ事。 魔法を構成するための呪文を

唱えている間無防備になる。 シーフは手先が重要で、本来は壁になるべきではないが、構成上そうなるしかないのだろうな。 出来

ればあと一人戦士が欲しいといったところか。 本来の冒険者は、こうやって互いに至らない、または足りない部分を補うためにパー

ティを組む。 お前もちゃんと帰ったらそうしろよ。」

「・・・そういうあんたはどうなんだ？」

「俺は一人で何でも出来るからな。」

ある意味傲慢ではあるが、確かにそれだけの力がありそうだとルーケは思った。

いや、事実あるのだろう。

あの魔法使い二人だってそれなりに力がある筈だ。

なのにあれだけ恐れていたのだから。

ルーケは魔法の事は良く知らないため、先ほどのモリオンの魔法がどれだけ凄いのか分かっていなかった。

ヘルファイヤーは上級黒魔法であり、広大なグラン大陸だが3人も

使い手がいるかどうか。

魔法は魔術書を読んで覚えるか、誰かに教わらなければならない。しかし、上級魔法はそれ自体使い手が僅かで、魔術書だってそんなにはない。

初級の光の矢だって、普通1本しか作りだせない。

これはそういう異界の方程式による魔法だからだ。

つまり、魔法の理を^{いんわん}理解し改良している証拠なのである。

現代で例えるなら、動かし方を知っていれば、自動車を走らせる事ができる。

しかし、その構造と原理を細部まで理解して運転している者は皆無に近いであろう。

つまり、魔法使いと呼ばれる者は車の運転手にすぎないのだ。

運転の仕方を習って、動かしているだけにすぎない。

また、非常識な攻撃魔法の無効化。

黒魔法使いチムニと白魔法使いベラには、伝説の一族の名前が浮かんでいたに違いない。

ファレーズのどこかに住むと言われる賢者の一族、アラム族を。

通路の所々に転がっている大きな石や、壁の凹凸の影に隠れていたであろう。

直線の穴だけに、襲撃に来たゴブリンは僅かな数しかいなかった。その程度に後れを取る事は流石に無く、冒険者達は程なく片付け、更に奥へと向かう。

やがて洞窟は90度左に折れ曲がり、しばらく行くと多少大きな空間になっていた。

よくこんな場所にあれだけのゴブリンが住んでいたなと思うほどの狭さだ。

そこには剥き出しの乳房の大きい、いかにもメスといったゴブリンが5匹、子供のゴブリンが20匹、奥にまとまって身を寄せ合い固まっていた。

ルーケは自分が依頼を受けたとは言っても、ああいう無抵抗な相手を殺すのは気が引けた。

同じ事を考えているのだろうか、冒険者達もその空間の入り口付近で戦闘隊形に展開したまま攻撃する様子が無い。

「この巢はゴブリンの展示場みたいだなあ。」

ポツリと、呆れたように呟きに、ルーケは思わず問う。

「・・・？ なにそれ？」

前方にいる冒険者達の邪魔にならないように、二人は小声だ。

だが、静まり返っているため、異常に響くのだが。

「見えないか？ 無暗やたらと装飾品を付けてる変なゴブリンが。」

ルーケは立ち位置をあちこち変え、なんとか前を見通そうと頑張った。

そしてその成果があり、なんとか見る事が出来た。

先頭の戦士とシーフの前に、確かにいた。

指輪だのネックレスだのピアスだのゴテゴテ付けたゴブリンが。

そして同時に、ルーケは見た。

その変なゴブリンが、縛りあげられ身動きできない4歳くらいの子供を抱え、その首に錆び付いたナイフを突き付けているのを。

「あれはゴブリンプリースト。キングより珍しい、ゴブリンの司祭だ。」

そして、見えた。

そのゴブリンの後ろに転がる、人だったであろう、残骸が。

「ゴブリンプリーストは暗黒神に貢物を捧げる事を喜びとする。

もう少し遅かったらあの子も死んでいたな。それと、人間の言葉を喋る珍しい頭脳も持っているのが特徴だな。」

その説明を待っていたかのように、ゴブリンプリーストは叫んだ。

「キエロ！ ニンゲンドモ！ コイツヲコロサレタイカ！」

魔法使い二人は顔を見合わせてから、戦士の判断に任せる事にしたらしく、その返答を待つ事にした。

シーフは指示次第で、いつでも襲い掛かれる様に身構えたままだ。

注目された戦士は、不意にプリーストを無視して、子供やメスのいる方へ歩み寄り、おもむろに1匹のメスの胸に剣を突き刺した。

「ナニヲスル！！！！！」

「殺せばいいだろ。」

「ナニ！？」

「その子を殺したいんだろ？ 殺せよ。俺達はお前らゴブリンを始末する依頼を受けた。だが、捕らわれた奴の救出は依頼されてねえ。知った事じゃねえな。」

「ヤ、ヤメロ！！！！！！！」

そう言いつつ、戦士は次々子供もメスも関係なく殺害していく。

「待てよお前ら！！！！！」

全ての非戦闘員であったゴブリンを始末してから、戦士はルーケに振り向いた。

「なんだ小童^{こわっぱ}。何か文句でもあるのか？」

「ある！ 依頼されてないから人質などどうでもいいだと！？ そ

れでも人間か貴様！」

「これでも人間様だ。 文句を言われる筋合いも無い。 あんたも同じ意見か？」

そう答えて問いかける戦士、どう返事を返すのか、ルーケはモリオンを見た。

「正直、若さゆえの潔癖感に私も苦笑いしか出ないのですが。」

「・・・モリオン・・・。」

「モリオン！？」「

呆然と呟いたルーケに、以外にも反応したのは魔法使い二人だった。
「やばい！ やばすぎだアルカ！！ 相手はあのモリオンだ！！」
チム二が顔を引きつらせ、動揺も露わにそう戦士に告げる。

「モリオン？ あの高レベルと噂の魔法使いか。 で、どうなんだ。 お前も人質を助けるとかいうあまちゃんなのか？」

「おい！？」

「黙ってる！！ どうなんだ？」

チム二を一喝して黙らせ、アルカはモリオンを睨み据える。

「もちろん、私なら助けますな。 余裕で。」

「モリオン！？」

ニヤリと挑発的に笑って答えるモリオンに、ルーケは背筋がゾクツとした。

そんな人間のやり取りを聞きつつ、ゴブリンプリーストは対応に困っていた。

人質の人間を殺せば確実に殺される。

しかし、人質を取っていても殺されそうな情勢だ。

活路がどこかに無いか、身動きもままならず、震えながら必死に探していた。

進退極まるとはこの事である。

「ポルタ。」

「なんだい？」

「先に邪魔を排除しよう。」

「あいよ。」

そう答えるなり、シーフは素早くゴブリンプリーストの首を持っていたダガーで切り裂いてから戦士の横に並んだ。

ゴブリンプリーストは子供の喉を切る事も忘れてナイフを落とし、治癒魔法を唱えようとともがいて声が出ない事に愕然とし・・・バツタリと倒れた。

「や、やめるんだアルカ！ 相手はあのアラム族と噂のモリオンだぞ！？」

「そそそそうよ！ 勝てっこないわ！！」

「黙れチムニ、ベラ。俺はな、邪魔は排除して生きて来た。俺に意見するな。黙って従え。出来ないなら消えろ。」

その返答に、魔法使い二人は沈黙するしかなかった。

「クツクツクツク。たいした自信家だな。お前、師匠はいないのか？」

「いない。俺は自分で全てを考え、鍛え、習得して生きて来た。

邪魔は排除して来た。俺こそ最強の戦士だ。高レベルの魔法使い？ それがどうした。呪文を唱えている間無防備になる魔法使いが俺に勝てる筈がないだろう。」

（呪文・・・？ そういえば、唱えてたか？）

アルカの言い分に、ふと疑問が湧く。

「そうか、それは残念だったな。」

「残念・・・だった？」

「そうだ。師匠がいれば、きっと教えてくれただろうさ。上には上がいるってな。」

「ハハハハハ！ 面白い、お前が俺より強いと言うのか。ならば証明してもらおうか！」

そう言うなり、アルカとポルタは同時にダッシュした。

「やめろお！！」

チムニは咄嗟にそう叫んだが、二人は止まらない。

すぐ横にいたルーケが介入する余裕がないほどの素早さで、二人は

ほぼ同時にモリオンに肉薄すると、アル力は上段から剣を振り下ろし、ポルタはモリオンの胴をめがけて横薙ぎにダガーを振るった。そして、ピタリと二人の動きが止まる。

右手で胴を薙ごうとしていたポルタのダガーを、左手でアル力の剣を。

それぞれ人差し指と中指だけで挟んで止めていたのだ。

「おいおい、大口叩いて手加減とは恐れ入る。そんな遅い剣で俺を倒せると思っているなら考え直せ。欠伸がでるぜ。」

「ってかあんた、魔法使いつて自分で言ってたじゃんか。」

思わず突っ込むルーケである。

「魔法使いだよ。本職はな。ただ。」

「ただ？」

「拳闘志けんとうしの技術も多少、心得ているがな。」

多少かよ。そう思うルーケである。

愚者の舞い 12

けんとうし
拳闘志とは。

己の肉体を鍛え上げ、己の肉体を武器に戦う技術であり、使い手の事でもある。

しかし、太古から伝わり磨かれて来たこの技術も、武器の普及に伴い廃れて行き、いまでは伝える者も、扱える者もないと言われている。

膨大な時間をかけて鋼のように肉体を鍛えても、フルプレートメー
ルを貫く事は難しい。

また、剣を掻い潜って間合いに接近するのも難しいからだ。

金で解決できる武器に依存するのは、仕方がない事であろう。

ルーケは傍観者だからそんな突っ込みが出来るが、アルカとポルタにそんな余裕はない。

相手を殺害するため、手加減などしてはいなかった。

それをあっさりと、しかも指2本で止められて押そうが引こうがビクともしない。

「まだ証明には足りないかな？ 坊や。」

ニヤツと笑ってそう言われ、アルカはその馬鹿にした言い方に激怒した。

「貴様！！」

怒りに身を焦がし、グツと力を入れて引いた瞬間パツと放され、思わずトトトと、数歩後退するも、なんとか踏み止まる。

ポルタは素直に尻餅をついたが。

「次はちゃんと全力で攻めて来い。いつまでも遊んでいる気も無いのでな、こつちも今度は反撃させて貰おう。命懸けで来な。」
そう言いつつも、まったくやる気なさそうに、身構える事もしないモリオンである。

「アルカ！ やめろ！ 今ので相手がいかに化け物か分かっただろ

！？」

「ふざけるな！！ このままおめおめと引き下がるかあ！！！！」
アル力はチムニをそう一蹴し、剣を大上段に構えて突進した。
それに合わせてポルタも跳ね起き、影のように合わせて突っ込んで来る。

どちらか一方に対処しても、どちらか一方が相手を討てる、必殺のコンビネーションだ。

この二人は余程気が合うらしく、普通なら多少のズレが生じるものなのに、ピタリと息が合っていた。

モリオンはそんな二人の突進を見つめつつ、一つため息をつきながら腕を胸でクロスさせると、間合いに入る寸前にジャンプして渾身の一撃を振り下ろして来たアル力に憐みの眼差しを向け。

パアンツ！ と、ポルタの頭部が弾け飛んで残った体も左にぶつ飛んで壁に叩きつけられ、アル力は右側に弾け飛んで壁に激突した。
何が起きたのか、その場にいた誰にも分らなかった。

ただ、大きく腕を開いた姿勢で止まったモリオン以外には。

その腕をスツと下ろすと、アル力を一瞥し。

「剣だけではなく、人としての生き方も学ぶべきだったな。」

モリオンは冷たくそう言い捨てると、怯える魔法使い達に構わず、ゴブリンに囚われていた子供の所に歩み寄り、優しく声をかけた。

「大丈夫ですか？ もう大丈夫ですよ。」

子供は衰弱しきっており、しかも今までの戦い全てを見ていたので怯えてもいた。

そんな子供を戒めている縄を解こうと手を伸ばすと、その子供はいきなりモリオンの指に噛み付き睨みつけてた。

「安心しなさい。私は助けに来た者です。とにかく、怪我を治しましょうか。」

そう言つと、噛み付かれていない右手を軽く振った。

その途端、子供の体は淡い光に包まれ、あちこちにあった擦り傷などが、全て消え去る。

「傷は癒えたでしょう？　これから縄を解きます。　放してもらえますか？」

子供はそれでも疑っているのか、恐る恐る口を放すが目はモリオンから放さない。

「良い子ですね、お嬢さん。」

（お嬢さん??）

背後でアルカの治療を行う呪文を聞きつつモリオンの傍まで来て見てみれば、確かに囚われていたのは女の子のようだ。

モリオンは手慣れた様子で縄を解くと、女の子を抱き上げた。

「もう大丈夫。　町に連れて行ってあげよう。」

女の子は一回、ギョツとモリオンに抱きついたが、すぐに後ろを振り返る。

そこには、人であつた残骸。

ゴブリンにいたぶり切り刻まれて殺された、恐らくこの子の両親。

「分かった。　彼らも連れて行こう。」

そう言うのと、まず女の子をルーケに預け、二人の遺体を探り、いくつかの遺品を回収すると、懐から大きな一枚布を3枚取り出した。

「おお!??　どこに収まつてたんだその布!!」

「見ていた通り、懐だ。」

「・・・物理的に無理だろ、その大きさ・・・。」

そんなルーケに構わず、モリオンは布をまず1枚広げ、その上に2枚を重ねないように広げてから、丁寧に、出来るだけ両親の遺体を拾い上げて布の上に別けて並べると、それぞれを包んでから、さらに2個を1枚で包んだ。

「これで、埋葬する時にごちゃごちゃになる事は無いでしょう。」

「絶対後悔させてやる!　覚えてろよモリオン!!」

回復したのであろう、ベツコリ凹んだ胸当てを外した姿のアルカはそう叫ぶと、ポルタの遺体を担いで、仲間の魔法使い二人と共に逃げるように・・・実際逃げるわけだが・・・駆け去って行った。

そんな冒険者達に構わず、モリオンは更に懐から一体の、拳2つ程

度の大きさの人形を取り出して地面に立たせて置いた。

「何でも出て来そうな懐だな……。」

「サーバントよ。起きて我が命に従え。　ウツポポポケケペイ。」

「ウツポポポケケペイツて。」

思わずそう言った瞬間、ギンツと人形の目が光り、ムクムクと大きくなり始め、ルーケと女の子は思わずビクツとする。

が、すぐに縮んで元の人形に戻る。

「お前なあ。　コマンドワードを復唱するなよ。　起動しないじゃないか。」

呆れ果てたと言わんばかりにモリオンはため息をついた。

「コマンドワードって……。あれが!？」

「当たり前だ。　常日頃出て来るようなコマンドにしたら、年中起動してしまうじゃないか。　ウツポポポケケペイ。」

「……。でも、もうちょっとセンスあるのにしようよ……。」

「無いからいいんだよ。」

ともかく人形はモリオン程の大きさに成り、若者っぽい姿になった。その姿を最初に見たら、とても元は人形だったとは思えないだろうほど良く出来ていた。

「その袋を丁寧に背負って俺に着いて来い。」

サーバントはモリオンの命に忠実に従い、丁寧に遺体の入った包みを背負うと佇んだ。

「よし、行こう。　その子を早く休ませてあげないとな。」

「……。あんだ、女の子には優しいな。」

「俺は基本的に、老若男女問わず優しいよ。　阿呆以外には。」

「ハイハイ。」

そんな会話を交わしつつ、もう少し進んだら曲がり角という所まで来た時。

グウウウウ。　と、腹の虫が鳴いた。

「……。お前なあ。」

「そう言えば、朝飯食べてないじゃん?」

ルーケは照れ笑いを浮かべつつそう弁解すると。

クウウウウ。 と、女の子も腹の虫が鳴いた。

「洞窟から出たら、まずは腹ごしらえだな。」

「その反応の違いが問題だろ??」

「阿呆は論外だと明言しただろ。 それにだ。 これから冒険者に成ろうと言う輩が一食抜いた程度でガタガタぬかすな。」

「いやもう成ってるし！ ってか阿呆って言うなよ！」

「阿呆は阿呆だ。 いや、お前の場合は」

「ハイハイどは付けなくていいですハイ。」

ドーンッ！ モリオンの言い分を遮ってそう言った途端、洞窟内に轟音が地鳴りと共に響き渡った。

愚者の舞い 13

スピリットウォール

「精霊壁！！」

モリオンが左手を突き出し轟音に負けないほどの大声でそう言った瞬間、通路を塞ぐように輝く半透明な壁が出現し、その壁の向こうを土煙が塞いだ。

「ななななにが！？」

動揺するルーケに構わず、彼の抱いている少女に、

「大丈夫。 すぐに出られるからね。」

「・・・本気でロリコグッ。」

しっかりと左手指先で胸元を摘まんで後ろに倒れないようにしてから、スパンと正拳突きを叩き込む。

「フヌオオ・・・。」

少女を抱えながら器用に悶絶するルーケを無視して、精霊の壁を構築したちよと手前の壁面に右手を着くと、

「大地の精霊よ、我が道を作り出せ。」

ズズズ・・・と、その途端、ポツカリと空洞が開く。

「・・・あんた、黒魔法使い・・・だよな？」

「いや？ 白も精霊も使えるよ。」

「それ、魔法使いじゃなくて魔導師・・・。」

「系統がなんであれ、魔法使う事に違いはないんだからいいだろ。男が細かい事気にしてんじゃない。」

「細かいか！？」

「魔法使うから魔法使い。間違いないだろ？」

「・・・それもそうか。」

「さて、距離的にあと2回か。 おい阿呆。」

「あゝのゝなゝ。」

「いいか、次に穴を空けた行き止まり。 そこでその子と待機している。 いいな？」

「いいけど・・・なにすんだ？」

「これ以上その子に悲惨な物を見せたくない。それだけだ。」
思わずルーケは、アルカに同情した。

完全に崩れてしまった洞窟の入口を見つめ、チムニとベラは何とも言いようのない表情で佇むしかなかった。

アルカの暴走を止められなかった後悔もある。

そもそも、爆薬を持って行くように進言したのはチムニだった。

ゴ布林退治は、一番初級の冒険クエストに分類されるほど簡単な部類ではある。

しかし、今回のようにキングやシャーマンなどいる場合、中級となる。

また、同じ中級でもオーガーが家畜としてゴ布林を飼っていて、発見されたのはゴ布林だったのでゴ布林退治を依頼されたが、巢に乗り込んだらオーガーが出て来ちゃいました、なんて事もある。その場合、手に負えないから逃げ帰っても冒険者の落ち度にはならない。

そもそも依頼が間違っていたと言う事になるからだ。

だが、ただ逃げ帰りましたでは信用を失うので、次の冒険者を雇う期間などを考慮し、それなりに時間稼ぎか防衛手段を施して来なければならぬ。

そういった場合に備え、チムニは万が一手に負えない物がいた場合は洞窟の閉鎖を提案し、そのために爆薬を持参する事を進言したのだ。

まあ、確かに彼らの手に負えない化け物は洞窟内に閉じ込めたが・・・。

「なんて面してんだ？ チムニ、ベラ。依頼は完遂した。帰るぞ。」

「しかしこれは・・・やりすぎだろう・・・。」

「そうよ・・・。」

「なにがだ？　ゴブリンの巣を殲滅し、万が一生き残っている奴がいてもこれで出て来れまい？　それに次の魔物が巣にする予防にもなる。　完璧じゃないか。」

「しかし人を・・・ヒツ。」

チムニは思わず息をのみ、言葉を失う。

喉元に突き付けられた剣と、アルカの眼光によって。

「ここには、ゴブリンしか、いなかったんだ。　哀れな親子の犠牲者は遺体でいたがな。　いいな？　ゴブリンしかこの洞窟にはいなかったんだ。」

狂気を含んだアルカの眼差しに、チムニもベラも、何も言えなかった。

「言い訳はそれで終わりかい。　坊や。」

「なに！？」

アルカが慌てて振り返ると、埋もれた洞窟のすぐ脇に穴がポツカリと開き、静かな眼差しでモリオンが立っていた。

「ば・・・馬鹿な・・・！！」

「ちよいとおいたが過ぎたな坊や。　それに喧嘩を売った相手も悪すぎだ。」

「おい・・・おいチムニ！　黒魔法にこんな・・・こんな魔法があったか！？」

「いや・・・あれは・・・。」

「喧嘩を売る相手を見定める事も出来ん坊やだから一回は見逃してやった。　だが、悪ふざけが過ぎたな。」

「ふざけ」

「てるのはお前だ。」

スツとアルカとの距離を一瞬で詰めてその口を右手でガツシリと握って塞ぎ、剣を持っていた肩口を左手で無造作に掴み。

「ゴギヤアアア！！！！」

解放すると同時に激痛にのた打ち回るアルカの傍に、もぎ取ったばかりの右腕を放り捨て。

「お前は過ちを犯しすぎた。」

ズンツと、地響きしそうな勢いで、モリオンはアルカの左太ももを踏み千切る。

「すでに更生も不可能なほど」

更に、右足も。

「道を踏み外した。」

「ガアアアア！！！！」

そして、左腕も。

「獣に堕ちた奴には、それなりの死がお似合いだ。」

四肢を失いもがくアルカに背を向けると、モリオンはチム二とベラを睨み据えた。

「お前達はどうする。 まだ抵抗するか？」

「とととんでもない！」

ベラに至つては恐怖のあまり、声も出ずに首と手をガクガクと振るだけだ。

「では、冒険者心得第7条により処分した。 依存が無ければ、そうお前達の宿に帰って伝えるがいい。 いいな？」

そう言つた瞬間、アルカを魔法陣が取り囲み、火炎が吹き出し蒸発させる。

金属製の鎧でさえ、跡形も残らなかった。

へたり込む二人を後に残し、モリオンはルーケ達の元へ戻ると、

「さて、町に帰ろう。 ちゃんとその子を抱いているよ。」

ルーケが疑問符を浮かべんばかりの顔をするのも構わず、モリオンはルーケの肩に手を置いた。

次の瞬間には視界が変わり、そこはライヒの外柵門前だった。

「……！？」「……」

門を守っていた騎士達は咄嗟に槍を構え、ルーケと少女は目をパチクリとさせる。

「お疲れ様です。 冒険者のモリオンです。」

そう言われて年配の騎士が、モリオンの顔をマジマジと見て、

「お？ おお、モリオン殿か。 あんな事があつたばかりだから魔物かと思つたよ。」

「あんな事？」

「いや、昨晚らしいが、森を出てすぐの所で馬車が魔物に襲われてな。 幼い子供二人と御者、護衛が一人、遺体で見つかったんだよ。」

「！？」

愕然としたルーケが思わず少女を取り落としそうになり、いち早く気が付いたモリオンが素早く抱きとめる。

「どうかしたかい？？」

「いえ、ちよつと若者には刺激の強いお話だったようです。 ほら、行くぞ。」

モリオンは有無を言わず、ルーケを引いて街へと向かった。

ルーケはモリオンと向かい合うように座って、酒を飲んでいた。一応依頼達成のお祝いで、今回ルーケは無報酬だったためモリオンのおごりだ。

だが、ルーケはとても祝って喜ぶ気になれなかった。

あの後、モリオンは冒険者の宿に任務達成とアルカの処分、そして少女を保護した事を伝え、報酬を貰った。

その後、プレシャス商会が経営している孤児院に少女を預け、両親の遺体を埋葬しようと手筈を整えてから、平然とした顔であの洞窟に遺体を取りに戻った。

後で考えれば、完璧に見えるモリオンも激怒していたためうつかり忘れていたのだろう。

そうでなければ、いくら布で覆っていたとは言っても、嗅覚の鋭い獣に遺体が食べられる可能性がある事を忘れる筈がないからだ。

つまり、アルカの非道に対し、それだけ怒っていたと言う事だ。

幸い、サーバント共々無事に回収し帰って来たが。

埋葬後、ルーケはどうしても気になったので、襲撃されたという馬車を見に行った。

既に馬車は騎士が町中に運んで来ており、遺体は埋葬されていたが遺体を見なくても、あの日襲撃された馬車であった事は間違いがなかった。

モリオンに頼んで生き返らせたのは間違いだったのか？

あのまま死なせておけば、二度も魔物に襲われる恐怖と死の苦痛を味わう事は無かった。

後悔と無念の中、ルーケは依頼達成を祝えないでいたのだ。

「そんなに落ち込むな。酒がまずくなる。」

眉根を寄せたモリオンに言われ、一旦顔を上げるが・・・また項垂れる。

「・・・だけど・・・俺のした事は・・・。」

「お前がした事ではないがな。人には、いや、生きる物全てには命運と言うものがある。これは運命とも言われるが、ちよつと違う。」

「・・・？ どう違うんだ？」

「運命は不安定な、その時々を選択肢が存在する、生まれ持つてきた歩むべき道みたいなものだ。たとえばあのゴブリンキングと戦う事をお前は選んだが、あの時引き返して冒険者の宿に報告すると言う選択肢もあった。その場合、報酬は得られないが依頼ミスでお前の非にはならん。しかしその場合、俺と共にゴブリンの巣へ行く事も無かつたし、赤の他人で終わっていただろう。命運とは言わば寿命みたいなものでな。どうやっても変えられない。あの馬車に乗っていた連中は、あの日、あの時が命運の尽きる時だったんだろう。一見お前の選択は無駄なように見えるが、俺としては褒めてやるよ。」

「そんな・・・。」

「命運はどんな存在にも必ず存在する。神と呼ばれる連中にもな。永遠に寿命があると言っても自然死が無いと言うだけで、首を切れば死ぬし、自殺だってできる。死なないのは不死の存在だけだ。」

お前の選択は正直、無鉄砲ではあったがその結果が今の状態だ。俺と共に依頼を完遂し、アルカのような無法者冒険者の存在も知る事が出来た。また、仲間の重要性と己の力量など、あのまま逃げ帰っていては得られなかった経験と知識を得る事も出来た。それで良しとしな。」

「でも・・・俺は何も出来なかつたじゃないか。ただ、あんたの足手纏いになって、あの子を抱いて連れて来ただけだ。俺は・・・無力だ。」

「それが理解できただけでも最大の成果だろ。いいか、誰でも最初は初心者なんだ。最初からベテランなんて奴は存在しない。現在の己を知り、強く成ろうと努力して力を身に付けて行くんだ。」

ま、今日は好きだけ飲んで寝ちまいな。勘定は俺が持つてやる。明日からは仲間を集い、ちゃんとした冒険者を目指しな。じゃあな。」

「え？ どこへ??」

「家へ帰る。」

そう言つと戸惑うルーケを残して、モリオンは冒険者の宿を出て行つてしまった。

残されたルーケは、暫し酒の満たされた杯を見つめていたが、思い切つて飲み干すとダンとテーブルに叩きつけ、決意を新たにした。

（俺は強くなる。モリオンのように、自分の信念を貫けるように、強く!）

「こら若造!」

「はい??」

振り返ると、マスターが物凄い形相でルーケを睨んでいた。

「杯が壊れる。」

「すすすすいません!」

翌朝、二日酔いの頭痛を切り捨てるように、ルーケは宿の裏庭で剣を振つていた。

昨晩は誰も冒険者は泊まっていなかったのか、はたまた素振りなんてするのは駆け出しくらいなのか、裏庭にいるのはルーケだけだった。

いつもの日課分をこなしつつ、ルーケの心は剣に宿る事は無く、ただ、本当に振つてるだけのお粗末なもの。

それと言つのも、強くなりたいと言う願望が今まで以上に湧き上がつては来たが、どうすれば強くなれるのか、具体的に思い浮かばないからであった。

日課である素振りを毎日冒険者に成ろうと決意して以降、欠かした事はない。

それでもゴブリンと対等程度にしか成れていなかった。

アルカ程ではないが、自分はもっと強いと思っていたのだ。
それがあの様である。

素振りだけでは限界があり、もっと強くなるにはもっと別の方法を
考えなければならぬ。

しかし、一人で出来る事など……。

「へったくそだなあ、お前。なんだ、その剣の振り方は。」

なにっとムカついて振り返ると、宿の親父がゴミを出しに出て来た
ところだった。

「なんだその眼は？ 俺だって昔は冒険者だったんだ。そのくら
い見りゃわかる。心が剣に宿ってないくらいの事はな。何を悩
んでいるんだ？」

「冒険者だったって……マスターが？」

「そうだよ。もつとも、仲間内で結婚する奴が出て、引退しま
ったからな。俺達も一緒に引退して、俺はこうやって後方支援に
回る事にしたのさ。」

なるほど、と、ルーケは納得した。

やけに鍛え抜かれたような体格をしていると思っていたのだ。

「冒険者は男女関係なく、仲間になれば一緒に行動する。相手の
性別を意識したりすると、信頼関係が揺らいだりしてチームワーク
がガタガタになり、時にそれは致命的になる。仲間は仲間、男女
の性別として気を使わなければならぬ時もあるが、そう言う時以外
は意識してたら話にならんからな。ましてや、駆け出しの頃なん
て一緒に部屋に泊まったりするんだ。経費節約のためにな。」

「へえ……。そんな事、考えた事も無かったなあ。」

「まだまだヒョッコのお前が、そこまで気をまわしてたらそれこそ
八方塞だろう。まずはお前の出来る役割を磨き上げる事だな。

戦士はパーティにおいて、何を成す？」

「戦士の役割……。敵に直接攻撃する事？」

「そりゃそうだ。剣持ってたんだから。だがそれ以上に、後方で
魔法を唱えるサポートが安全に魔法を行使できるように壁になる必

要もある。だから戦士は分厚く重い鎧を着るんだ。魔法使いは重い鎧を着れんからな。魔法を唱えるのに邪魔になるから。」

「へえ？　そういやモリオン・・・鎧着てたのかな。」

昨日見たモリオンは普通の短衣しか着ていなかったように思えるが、中に何か鎧を着ていたのかも知れない。

「あの人は特別だから参考にしない方がいいぞ。」

「え？　どうして？？」

「どうしてって、一緒に行動しててその特異さに気が付かんかったのか？　呪文も唱えないで上級魔法を使ったりするし、魔導師なのに接近戦も得意だ。何百年生きりゃあの領域に至れるのか、俺は想像もつかん。」

「そうなんだけど・・・上達すればあの領域に成れるもんだと思ってた。」

「馬鹿言つな。噂じゃ賢者の一族であるアラム族の一人と言う話も聞くが、俺は案外本当の事なんじゃないかと思うよ。」

「アラム一族？」

「ああそつだ。ファレーズのどこかに住むと言われる賢者の一族だ。人間でありながら神に教えを請い、独自に魔法を発展させた一族と言う噂だ。モリオンと言う冒険者は何百年も前から名前を聞くから、何代目モリオンとか本当は言うのかも知れんし、たった一人の、それこそ不老不死になった人間なのかもしれん。所詮噂だが、火の無い所に煙は立たないからな。案外本当の事なのかも知れんぞ。」

不老不死って、そんなゾンビみたいな。

そうは思うが、チム二のような魔法使いを標準として考えると、確かに遥かな化け物ではあった。

ルーケの知る魔物は先日のゴブリンしかいないが、人間のベテラン戦士に匹敵するとモリオン自身が説明したゴブリンキングでさえ、モリオンは容易く倒していた。

そもそも魔法の事は良く知らないが、呪文も唱えないで行使出来るものなのだろうか。

考えれば考えるほど、不可思議で理解不能な存在である。

そんな自分自身の考えに没頭し始めたルーケを、マスターは好ましげにしばし眺めてから宿に戻ろうと戸をあけた瞬間。

「あ、マスター！　そこにいたのか！！」

と、誰かの声が聞こえ、ルーケも現実に取り戻された。

「慌ててどうした？　まるでアイマイミイミンが出たみたいじゃ」

「そうだよ！」

マスターが冗談半分で言った言葉を遮つての答えはそれだった。

マスターは驚愕に一瞬動きが止まり、ルーケはキョトンとする。

「どこにだ！？」

「幸い隣町だが、かなりの被害らしい。　一応情報として伝えておくぜ。」

ルーケは何が何だか分からぬまま、その男を見ようとしてマスターに阻まれる。

「？　誰かいるのか？」

「ああ、若造がな。　情報ありがとう。　ギルドマスターにそう伝えてくれ。」

「わかった。」

声はそう答えると、それっきり気配を感じなくなり、呆れた顔でマ

スターはルーケを振り返って、問答無用で厨房に引つ張り込んで戸を閉めてから。

「危なかったなあ前。」

「え?? 何が??」

「今はシーフギルドの連絡員だ。それも秘密裏に行動する・・・な。不用意に顔を見ていたら、お前、アサツシンに数日以内に消されていたぞ。」

ルーケは最初こそキョトンとしていたが、その言葉の意味を理解するにつれて青ざめる。

「・・・マ・・・マジ?」

「いいか、アイマイミイマインってのは国の命運を左右するような魔物だ。詳しい話は言うだけ無駄だから、あとで仲間を持った時に魔術師にでも聞け。とにかく、そういう重要な情報だから、それだけ重要な伝令を任せられるような人物が来る。顔を見られてはまずいような、な。」

「ちよちよちよ、ちよつと待ってくれ。なんでそんな重要な情報を一介の宿屋の主人に伝えに来るんだ??」

「ここが冒険者の宿だからだよ。隣町が大損害を受ければ、冒険者には仕事口が溢れると言う事だ。町の警護に復興に、物資運搬などもある。だから人数をかき集めなければならん。隣国に支援を求めれば恩を売られて外交上不利になるが、冒険者をかき集めて雇う分には自国の政策範囲だからな。まあ、こっちに話が来ると言う事は、余程の被害が出たと見て間違いあるまい。」

「へえ・・・。なんか、他人の不幸に付け込むみたいでやだなあ。」

「あんな、魔物と言う泣きっ面に蜂状態がなけりゃ、冒険者なんて本当に雑用しかない何でも屋だぞ。それに冒険者や商人に話を持つていけば、復興も助かるというもんだ。」

「なんで?」

「王家より先に話を知る事が出来れば、それだけ商品や物資を運び

込んで儲ける事が出来るから、商人は我先に出発するし、その護衛を雇いにも来るだろう。だが、王家が知ってしまえば物資の搬出自体を制限されるからな。勝手な事をされると、相手に恩を売れなくなるから。国同士の関係は常にドライさ。困った相手にはトコトン弱みを攻めるのがなんでも基本でもあるしな。さて、俺も忙しくなるわ。」

そう言うと、マスターはいそいそと宿を出て行った。後に残されたルーケは複雑な顔をしながら、再び素振りを再開するべく外へ出て行った。

素振りもやるだけやって暇になったルーケは、2階に借りた自分の部屋でゴロゴロしていたが、それにも飽きて1階に下りて来た。ついさっきまで護衛を雇いに来ていた商人風の男やそれを受けようとする冒険者など、大賑わいだったのが嘘のように静かであり、マスターも含めて誰もいない。

話し相手もいなければ食事などの注文相手もいないので、外をふらつく事にした。

町の中はいつもと何も変わりが無く、あの話が嘘だったようにも感じる。

だが良く見れば、町中にチラホラ見かける筈の皮鎧などを着た冒険者風の人影がまったくいない。

ルーケはため息をつきつつ、昨日少女を預けた孤児院へ足に向けた。本当はルーケも護衛として雇われ、行きたかった。

だが、仲間もいない、未熟な新米戦士を雇いたがる者好きはいない。どこかに入れて貰って行きたくとも、パーティは熟練になればなるほど他の力を必要としないし、逆に邪魔になる。

今の構成で連携が取れているのに、不安定な要素を入れたがる筈も無い。

下手すれば、新たに加えた新人のために足を引っ張られて全滅と言う可能性も少なからずあるため、普通はある程度実力を見て役割を

定めるのだが、この緊急事態にそんな余裕がある筈もない。

町の外は魔物の跋扈する天外魔境なのだ。

町の外に出ると言う事は命がけの行為であり、それを新米の戦士に託し任せるなんて死に行くのと同義語で、金を払う価値も無い。

そんな情勢下のためかパーティを組めるような人が集まって来る事も無く、こうしてルーケは取り残されたのである。

孤児院へ足を向けたのはただの暇潰しであり、一応助けた少女が気になったからだ。

それに、昨晚聞いた話も気になっていた。

「プレシヤス商事？ ああ、あの胡散臭いところか。」

一人残って酒を飲んでいたルーケの下に、旅の商人と名乗った中年の男はルーケに同席を求め、話の最中なんとなくて名前を出した瞬間そう言い切ったのだ。

「胡散臭い??」

「ああ。鍋から武器から子供まで、金さえあればなんでも仕入れると噂だよ。」

一応ライヒは人身売買も奴隷の存在も認めてはいないが、特に強く取り締まっているわけでもない。

金持ちの家には普通に奴隷が働いており、年齢が上がれば上がるほど安く売り買いされているのが現状だ。

また、王家も多額の税金を納めている金持ちを強く取り締まる気も無いので見て見ぬ振りなのだ。

もつとも、まともな商人はそもそも人身売買に手を染める事は無く、その手の事を統括しているのはシーフギルドだ。

そしてこの時代、商店と言う物売り専門の店自体が存在していない。普通は買い物をする時、王家に指定された特定の場所、市場で買うのだが、野菜は農家が、鍋などの金物は鍛冶屋が、と、言うように、持ち寄つての青空市場が普通だし、商人は家こそ町中に特定の屋敷を構えているが、普段は他の街へ買い出しに行き、持ち帰って売る行商人である。

遠くの特産品を安く仕入れて持ち帰り売れば、当然手に入り難い物なので高値になる。

命がけだからこそ儲かり金持ちになれる。

この辺は冒険者とあまり変わらないかもしれない。

また、特定の地域限定での販売なので、王家が税金の徴収をしやすく、また、取り締まりもしやすい。

また、武器は反乱防止のために許可が必要で、普通は仕入れる事自体違法だ。

そんな胡散臭い噂の立つ商會が経営している孤兒院に入れられた少女であつたため、なんとなく気になったのだが・・・来て見て驚いた。

モリオンが例の少女と仲良く遊んでいたからだ。

ルーケは声を掛けようかどうしようか暫し迷つたが、結局やめた。掛けるべき言葉を思い浮かばなかつたからだ。

少女を助けたのは自分ではなく、ただ抱き抱えて運んだだけだし、そもそも会話さえろくにしていない。

そんなわけで、物陰に何となく隠れて見ていたが。

（これじゃ俺って怪しい奴だよな・・・。）

軽く通報されてもおかしくは無い事に思い至った。

実際、子供を攫って売る専門の業者もあるくらいだし、間違えられて捕らえられたら拷問は確実である。

相手が知りたい人攫いの仲間の情報を持ち合わせていないのだから、回避のしようも無いというものだ。

ルーケはそこまで考え、恐ろしい結果になる前に立ち去ろうと思った時、いつの間にか正門にモリオンと他数人が現れていて見送られていた。

「ではまた後日に。 元気でな。」

一緒に連れられて来ていた昨日の少女は、懸命に涙を堪えながらモリオンに頭を撫でられている。

少女にとって、もはや頼れる存在はモリオンだけなのだろう。

そう考えると、立場が無いルーケではある。

ずっと抱っこして運んで来たのはルーケなのだから。

なんとなく釈然としないまま、ルーケはこれまた何とはなしに、モリオンの後を付ける事にした。

モリオンは気が付いた風も無く、見送りに手を振りつつ孤児院を後にし、町中へと向かう。

何とはなしにいたずら心が湧き、驚かしてやろうと全力で尾行を開始するルーケ。

昨日の今日だが、飯でもおごってもらおうとも考えた。

現在のルーケは所持金ゼロ。

鎧と剣を買うのに、全財産を注ぎ込んだためだ。

冒険者の宿はそういう駆け出しや文無しでも、ある程度後払いで泊

めてくれる。

何故なら、さっきのように急に人手が必要になる事があるため、寛容なのである。

仲間と言う意識もあるし、マスターはそういう駆け出しに向いていて、なおかつ金に困っている者に仕事の便宜を図ってくれたりもする。

持ちつ持たれつなのだ。

だが、後払いの文無しでは飢えない程度の食事にはかりつけず、まともに飲み食いたいなら稼がなければならない。

モリオンのようなベテランなら金持ちだし、おすそ分けをねだっても問題あるまいと、軽く思っていた・・・のだが。

一介の冒険者にしては、ちょっと信じがたい方向へ向かっているようで、ルーケは心配になって来た。

モリオンが進む先には、高級住宅街というか、金持ちや貴族、上級騎士が住むような地域しかない筈だからだ。

（そう言えば、貴族とか王族に知り合いがいるとか言ってたよなあ。）

もしそんな連中に呼ばれて夕食、なんて話になったら、くっ付いて行くわけにもいかない。

（ええい、どうせだからどこへ行くのか突き止めてやる。）

ルーケは人気の無くなって来た住宅街を必死に尾行し、ついにモリオンの目的地まで離れずに付いて行く事に成功した。

そこは、かのプレシヤス商会の屋敷だった。

モリオンが門の前に来ると守衛は話を聞いていたらしく、すぐに開門してモリオンを通し、

「お帰りなさいませ、ご主人様。」
と、言った。

（・・・ご・・・ご・・・ご主人さまあ！？ え！？ なんで！？）
混乱の極みにあるルーケなど当然知った事ではなく、守衛は慣れた様子で報告をする。

「レジャンド様がおいでになられております。」

「レジャンドが？　そうか、わかった。」

そう言うのと、モリオンは平然と広い庭を通り抜け、屋敷へと入って行った。

「モリオンがプレシヤス商会のご主人？？　どういう事だ？？　そんな金持ちが、なんで冒険者なんて・・・。」

冒険者の中にも危険な冒険を成功させ、金持ちに成る者は多少だがいる。

だがそう言った連中は普通、屋敷を構えてしまえば冒険者を辞めて、残った人生を謳歌おづかするものだ。

金持ちになっても続ける者は、者好きと言われるし冒険者仲間に嫌われる。

基本的に冒険者に成る者は、まっとうな仕事で働けない・働きたくない、または一攫千金を狙う者である。

金持ちになるような実力と幸運を持ち合わせる者が居座れば、金持ちに成れるチャンスである危険な仕事を持って行かれてしまう。

妬みと嫌悪が入り混じり、嫌われるのだ。

「だから、いつも一人なのか・・・？」

ブツブツと独り言を言いつつ悩んでいると、屋敷から一人の少女が出て来た。

少女はメイドの服装をしており、買い出しが何かを頼まれたのだろう、手には一抱え程度の籠を持っていた。

「買い物かい？」

「そうです。　レジャンド様が来られたので、ちょっと足りない物が出たんですの。」

「そうか、気を付けてな。　もっとも、プリンには無駄な忠告だとは俺も思っけどな。」

「気持は嬉しいですよ。」

少女はにこやかにそう答えると、テコテコと市場の方へ向かった。ルーケは色々聞きたくて、少女の後を追いかけて声を掛けようとし

た瞬間、少女がピタツと止まって振り返った。

その少女・・・と、見えたが、十分大人だった。

16歳くらいだろうか、小柄な体ではあるが、出る所はしっかりと出ている、童顔と言っているような可愛らしい顔とは裏腹に自己主張が激しい。

ちなみにこの世界での人間は、成人は15歳、平均寿命は70程度である。

そんな少女の容姿を掌握した瞬間、クルツと少女が回転した。ではなく、自分が回転しているのだと気が付くと同時に、背中に激痛が走る。

頭一つ背の高いルーケを、少女は華麗に投げ飛ばしたのだ。

「何用ですか？ 後を付けて来て。 お金なら必要最小限しか無いのです。」

「あだだだ・・・。 ち、違うんだ・・・。」

「何が違うんですの？」

「ちょ・・・ちょっと聞きたい事があったんだ・・・。」

「あら、物取りと勘違いしたのです。 でも、レディーの背後から追いかけて来るあなたが悪いんですの。」

（な、なるほど・・・強いからか・・・。）

見かけも裏腹に、相当な実力者だったからあの守衛も、無駄な忠告と言っていたのだと納得する。

ルーケは痛む腰を摩りつつ立ち上がり、

「えーっと、プリン・・・さん？ で、いいのかな？」

「そうですの。」

「お使いの途中なんだよね？ 遅くなると困るだろうし、行きながらでもいいから教えて欲しいんだ。 荷物運ぶの手伝うからさ。」

「それは助かるのです。 で、聞きたい事ってなんですか？」

ルーケは宿のベッドに横たわったまま、プリンに聞いた事を思い返していた。

モリオンはプレシヤス商会の主人で、本名をプレシヤス・パウ、冒険者としてモリオンと名乗っていると言う事。

各地を巡って珍しい物を仕入れて来ては売ると言う、言わば貿易商人であり、噂どおりなんでも仕入れて来る凄腕だそうだ。

もつともシーフギルドとの兼ね合いもあり、その国々での非合法な分野は手を出していないそうだが。

そう、その国々、である。

ルーケは生まれ育ったライヒしか国も町も知らないが、プレシヤス商会はほぼ全国各地の町に存在するそうな。

また、冒険者ギルドを立ち上げた、立役者の一人でもある。

（どこまで凄いんだ、あの人は。）

ルーケは呆れつつ感心し、そして、決心した。

愚者の舞い 17

ルーケは翌朝、改めてプレシヤス商会の門の前に来ると、守衛に声をかけた。

「すいません、俺はルーケと言います。プレシヤスさんにお会いしたいのですが。」

守衛は、明らかに冒険者風のルーケの全身を舐めるように確認してから、

「約束でもおありで？」

俺はそんなの聞いてないぞ、と、全身でそんな雰囲気醸し出しつつそう答えた。

「約束はしていません。ですが、先日一緒に行動した者です。取り次いでいただけませんか？」

昨日は特に気にしていなかったが、この守衛、物凄く腕が立ちそうだった。

年齢こそ初老に達したくらいだろうが、達人レベルではないだろうか。

物腰や雰囲気、ルーケはそう感じた。

守衛は胡散臭そうにルーケを見返すと、

「生憎、シーフ上取りを取り次ぐ気はねえなあ。帰んな。」

「なっ！？何を根拠にそんな！それに勝手過ぎないか！？」

守衛はルーケの足元を指差すと、

「シーフってな、訓練を積むと自然に足取りに癖が出るんだよ、坊主。出来るだけ足音を立てないようにな。見たところ技術的に

そんなでもなさそうだから、食いつぱぐれたガキが拾われて手伝いしてたつてところか？一念発起して冒険者になりましたって感じ

だろ。違つかい？」

「う。」

門に近づく足取りを見ただけでズバリ言い当てられ、ルーケは二の

句が継げない。

「今はシーフではないかも知れんが、冒険者でも同じ事だ。襲撃の下準備に下見に来たとも考えられる。そんな胡散臭い人物を取り次ぐ馬鹿がどこにいる？」

「しゅ、襲撃つて！ そんな事俺がするわけがないだろう！？」

「お前の事情などこつちは知らん。シーフは金の有りそうな所を襲つて奪い、冒険者は依頼次第で何でもやる。胡散臭い事に変わりはあるまい。さあ、帰った帰った。」

守衛に言い負かされてぐうの音も出ないルーケである。

「・・・それでも、俺にはあの人しか頼れる人がいないんだ！ 頼む、取り次いでくれ！」

「ご主人様に会いたがる人はみんなそう言うぞ。たとえそれが、アサツシンでもな。」

「何を騒いでるんですの？ 朝っぱらから。」

いつの間にかルーケの背後に立っていたプリンが、不思議そうにルーケを見上げていた。

その腕には十本の長いパンが入った籠が抱えられている。

「おはようプリン。実はな・・・。」

「プリンさん！ 実はカクカクシカジカこう言う事で、プレシャスさんに会いたいんだ！」

「そんなの門前払いで当然ですの。」

プレシャスに会いたいが会わせてくれないと早口でまくし立てたルーケを、プリンは一刀両断。

最後の希望も打ち砕かれ、ルーケはガツクリと頂垂れた。

「でも、悪い人ではないですよ。私からお伺いしてみますの。」

「ええ！？ 本当に！？」

ピヨーンと顔を元気良く上げる。

「おい、プリン。勝手な事をするなよ。」

「先日、志だけは立派な駆け出しのヘボ戦士と一緒に行動したって聞いてますの。」

「へ・・・へボ・・・。」

ガツクリと頂垂れる。

「聞くだけは聞いてみますの。 期待はしないでね。」

「おい、プリン。」

「ご主人様の性格は、ガードさんも良く知ってる筈ですの。」
そう言われると、守衛のガードも沈黙せざるを得ない。

「何が目的かは存じませんが、ご主人様に害をなそうとしても瞬殺されるだけですの。」

アッサリとそう断言し、プリンは通用門から入って屋敷に向かう。

「・・・可愛いけど・・・きつついなあ・・・。」

シヨボーンと立ち尽くすルーケを、憐みの眼差しで見詰めるガードであった。

しかし、そんなに待つ事も無く。

プリンが屋敷に入ってから数分で、プリンを伴ってモリオンが出て来た。

「モリオン・・・。」

「何の用だ？ 物乞いなら余所へ行け。」

ルーケはおもむろに正坐をする。

「今の世は乱れ、疲れ果てています！！ お願いします！ 僕を・

・僕を弟子にしてください！！！！」

「やだ。」

モリオンは即答すると、クルツと踵を返して歩き出した。

「お願いします！ 俺は世界を平和にしたい！ でも、力不足で何も出来ない！ お願いします！！ どうか弟子にして、教えて下さい！！」

それはルーケの心からの願い、叫びだった。

そのためモリオンも、一旦足を止めた。

魔王討伐から、はや120年もの月日が流れた。

しかし、魔物の脅威は取り除かれる事は無く、少し平和になれば人々は戦争を繰り返し、領土拡大を始める。

そんな混沌とした世のために、人々は平和と言う安息を完全に忘れてしまっているようだ。

笑顔もある、喜びもある、だがそれは、悲劇に慣れ過ぎて感覚が麻痺しているにすぎない。

ルーケは自分の生い立ちを知らないが、シーフギルドで育ち、そのやりようを見て来た。

「盗むのが悪いのではない。盗まれるような警備しかしていないのが悪いんだ。」

ある金持ち宅を襲撃し、一家皆殺しにしたそいつは、そうルーケに平然と答えたものだ。

その男は最初から殺害目的で同行し、やってのけた。

ルーケは荷物運びで同行してただけだったが、そのやりように頭に来て食ってかかったその返答。

腹が減ったから焼いたパンを食べる、その程度の当たり前な事、と言わんばかりの平然とした眼差しは今でも忘れられない。

世の中を平和にしたらしたで悲劇はあるだろう。

しかし、現状でいいわけがない。

ルーケは誰よりも強くなり、そして世の中を平和にしたかった。

だからこそ冒険者になり、その足掛かりにしたかったのだ。

だが、結果は先日のとおり、低レベルなゴブリンでさえ手こずる始末。

今はとにかく強くなりたい、アルカをも簡単に粉碎したモリオンのように、強く成りたかったのだ。

「・・・お前の気持ちは理解した。だが、俺が教えるにはお前は未熟すぎる。もっと強くなってから来な。」

「その強くなるためにこそ、師になって教えて欲しい！！ お願いします！！！」

「やだ。面倒臭い。俺は忙しいんだ。」

そんな主人の返答を、プリンとガードは、おや？ という眼差しで見る。

「お願いしますー!!」

「ガード、こいつは絶対に敷地内に入れるな。」

「モリオーン!!!!!!」

「プリン、食事にしよう。レジャンドを起こして来てくれ。」

「モリオーン!!!!!!」

「いや、俺が行こう。あいつは寝起きが悪いからな。プリンは食事の支度を手伝ってくれ。」

「モリオーン!! 弟子にしてくれるまで、ここを絶対に動かないからな!!!!!!」

だが、そんなルーケを一顧だにせず、モリオンはプリンと共に屋敷に入ってしまった。

ガードは首を傾げながらも、主人の厳命であるため門を開ける事は無かった。

「あの、聞いてもいいのですの?」

「なんだい?」

プリンは何度かルーケを振り返って見ながら屋敷に入り、疑問に思っていた事を尋ねた。

「どうして断ったんですの? いつものご主人様らしくないのですの。」

「モリオンは苦笑いを浮かべると、ポンとプリンの頭に手を置いてから撫でつつ、

「才能の無い者に、今は関わってる余裕がないんだよ。」

ルーケはその後、商談に来た馬車に轆かれそうになって（しつかりと門のまん前に座り込んだので）移動した以外、屋敷の見える門脇に陣取って、睨みつけながら座り続けた。

ガードにとって非常に迷惑な存在ではあるが、その志と行動を好ましく思っではいた。

「坊主。諦めたらどうだ？ ご主人様がああ言った以上、意思を曲げる事はないぞ？」

「それでも俺は、諦めません。」

頑固だなとは思うが、気が済むまでやらせよう、そうすれば納得するだろう。

ガードはそう考えていた。

そして、時間になり交代する時ルーケの事を伝えてくれたために、問題なくいる事が出来たのである。

それは幸であつたのか、不幸であつたのか、7日が過ぎた。

昼の交代時間に成り、ガードが引き継ぎをし守衛に上番し、いつものように座り込み続けるルーケを見やり、ふと異変に気が付いた。雨の日も頑固に居座り続けたルーケに生気が感じられない。

「おい、ちょといいか？」

引き継ぎが完了し、帰り仕度を始めていた仲間に、ガードは慌てて声をかけた。

「なんだ？？」

「つかぬ事を聞くが、こいつ、お前が上番してる間、どこかへ行ったり、何か飲み食いしているのを見たか？」

「いや？ 特に注意はしていなかったが、そんな様子は見た事が無いな。」

ガードはそれを聞くと、慌てて待機小屋に駆け込み伝声管に叫んだ。「誰か！ ご主人様を呼んでくれ！！ ルーケって若い奴が！！！」

！
」

フワフワと浮いている感覚の中、ルーケはなんだか幸せな気分だった。

なんだか思い出せないが、非常に困難な事をやり遂げた、そんな満たされた気分だ。

そして、辛かった過去を色々思い出す。

シーフギルドに所属していた時は、本当に人としての生き方とは无缘だった。

シーフとして生きるには、ルーケは不器用だった。

男娼の道もあったが、そういう優男でもない。

何事にも中途半端すぎて、ギルドでも持て余し、かと言って放り捨てるには微妙な能力であつたのだ。

器用貧乏なのである。

全ての面で平均より多少上の成績を残すが、特筆すべき点が無い。そのため強盗などの下働きや手伝いなど、無難な仕事しか無かった。それは大人になってからも同じだったため、ルーケが冒険者に成りたいからギルドを抜けたいと言った時、ギルドマスターはすんなりと認めた。

当然、ギルドの事は他言無用と釘を刺されたが。

それでも、ルーケは日の当たる生活に踏み出せた。

それまでルーケは、家とかの住み家などにも困るほど貧乏であつた。シーフギルドは実力主義であり、たとえ誰かの稼ぎを奪い取つても功績を上げた者を評価する。

しかし、ルーケはそもそも誰かの手伝いとかしか仕事を貰えなかったため、稼ぎなど微々たるもの。

なんとか飢え死にだけは免れる、その程度の収入しかなかった。

物乞いもやっただしスリもやっただ。

生きるためなら殺し以外なんでもやっただと言えるほど、色々な事に手を染めた。

そんな生活の中、同じように子供の頃ギルドに拾われた者が、冒険者としてそれなりの収入を得てギルドに上納金を収めた。

そこでルーケは冒険者に憧れた。

そして、知れば知るほど冒険者は魅力的に見えたのだ。

そして冒険者に憧れれば憧れるほど、強くなつてのし上がりたいと考えた。

元々正義感の強かったルーケは、その性格もあつてシーフには向かないでいた。

しかし、たとえシーフでのし上がつても所詮は闇の生活であつても変えられはしない。

だが、冒険者なら、うまくの上がれば一国の主にもなれるし、そうなれば大陸を征服して真の平和ももたらせられるかもしれない。平和になれば街道を整備して人々は行き来しやすくなり、物流も盛んになり豊かになる。

闇の生活をして来たルーケには、人々の生きる苦しみを、余す事無く見て来た。

それゆえ至つた結論であつた。

だからこそ、力が欲しいのだ。

モリオンのように揺るぎ無い、圧倒的な力が。

なのに・・・、なのに・・・なぜ・・・？

そんな疑問が脳裏を満たしていた時、ルーケは自分が天井を見ている事に気が付いた。

見た事も無い、天井。

明らかに自分が借りている、冒険者の宿の部屋ではない。

（ここはどこだ??）

ルーケは寝ていた硬い寝台の上でムクリ、と、起き上がり。

まるで美味そうな御馳走が目の前にあるのを我慢している、そんな表情で、寝台の横に陣取り自分の股間を見つめるプリンに気が付いた。

同時に、自分が全裸である事にも。

「ぬおおお！？ プププリンさん！？」

「あ、気が付いたですの。」

慌てて飛び起き股間を隠すルーケを、非常に残念そうに見てから部屋を出て行った。

その態度が非常に気掛かりではあるが、そもそも自分の一番恥ずかしい部分を寝ている間丹念に見られていたかと思うと赤面どころの騒ぎではない。

そもそもなんで素っ裸でいるのかさえ分からなかった。

そもそもここはどこだ！？

と、辺りを見回しても・・・寝台以外、何もない殺風景な部屋だった。

解決のヒントさえありはしなかった。

（いや、殺風景だからこそヒントになるかもしれないな。つまりここは牢屋の中と言う事だ。 いやまで、牢屋だったら鍵かかっているだろ、今平然とプリンさんが・・・ってなんであの子は俺の！？）

と、支離滅裂で、考えれば考えるほど混乱していく。そんな時、微かに声が聞こえて来る事に気が付いた。

「しか・・・う。・・・に、す・・・。」

「じゃあ、・・・だ？」

（なんだ？ 誰が話しているんだ？）

シーフだった習慣が蘇ったか、ルーケは声の元を探り当てると、密かに歩み寄って聞き耳を立てた。

そこは隣の部屋へ繋がる壁であつたが、微かに穴が開いていた。

「何とかするさ。 ドールもあるしな。」

（この声はモリオンだな。）

「頼むぜ爺。 今更他の魔導師なんて探してる暇は無いんだからよ。」

（この声は・・・聞いた事が無いな。 誰だろ？）

「しかし豪華メンバーだな。 クラスイーヴィにプリに・・・。
親子に孫か。」

「正直言って、俺はそれでも厳しい戦いになると思ってる。あんなの見解は？」

「俺だけでやるなら始末できるが・・・それじゃ本末転倒だしな。お前に任せるよ。」

「まったく、そう言うならあんたがやれよ爺さん。それかお前が協力すつか？」

「わわわ私がですよ!？」

「冗談だ。本気にすんなよプリン。とにかく、例の毒薬はあんなしか作れないんだから頼むぜ。」

「ハイハイ。孫にこき使われるとは夢にも思ってたがな。それに、俺がパーティに入るとクラスイーヴィには伝えているのか？ あいつは俺を嫌っているからな。」

「そりゃ自殺の手伝いさせられたと知りや、普通は怒るけどな。まだ言っていないが、納得させるさ。じゃないと、この世が滅びるし。」

「それを望んでいないのはあいつも一緒か。」

「いざとなったらあんたが二人分働いてくれ。できんだろ？」

「お前なあ。年寄りをこき使うなよ。」

「その自覚があるなら、世界の管理者なんてやめりゃいいだろ。」

愚者の舞い 19

モリオンの話し相手が誰だか分らないが、盗み聞きしてルーケはさらに混乱した。

（孫？ それに世界の管理者？ 自殺？？ 厳しい戦い？？？）
何が何だかサッパリではあるが、その後は他愛無い話になったのでルーケは聞くのをやめて寝台に戻って腰かけた。

とにかく現状で分かったのは、ここはプレシヤス商会の屋敷の中だろうと言う事だ。

なんでここにいいのか分からないが、落ち着いて思い返せば空腹で気を失ったために担ぎ込まれたのだらうと推測できる。

つまり、弟子入りは微妙。

ここまでやって駄目なら、もう自殺でもするしか意思を伝える方法はない。

しかし、本当に死んでは元も子もない。

なにやら立て込んでいるようだし、本当に自分を弟子にする余裕がないのかもしれない。

ルーケは半ば諦めていた。

なら、強くなるために何をすればいい？

そんな事を考えている時、ガチャツと戸が開きプリンが入って来た。
「ぬおっ！」

さっきの事を思い出し、咄嗟に股間を抑えて壁際に下がるルーケである。

「何をやってるんですの？ 服を持って来ましたの。 サイズは合うと思うので着て下さいですの。」

「え！？ あ、ありがとう？？」

「早く着て下さいですの。 ご主人様が待っているんですの。」

「いや、その・・・あっち、向いててもらえないかな？」

「私は気にしないですの？」

「俺が気になるの！」

不可思議な顔をしてプリンが服を寝台に置いて後ろを向くと、ルーケは慌ててプリンが寝台に置いた服を着た。

「もういいよ。で、どこで待ってるの？」

「隣の部屋ですよ。」

そういう話声が聞こえていたなと思い出すが、それを言ったら何かがやばそうな気もするので黙って先導するプリンに着いて行き、隣室へ入る。

「よう、やっと起きたか。」

部屋の中にはモリオンと、小柄な少年がいた。

（この子が、モリオンの・・・孫？）

とてもそうは見えないが、会話を聞く限りはそうなのだろう。モリオン自体は三十路程度にしか見えないのだが、少年は成人に成ったかならないかくらいにしか見えない。

案外、冒険者の宿のマスターが言っていた、アラム族と言うのは本当なのかもしれない。

「こいつが、か。名前はチンケだっけ？」

「ルーケだ。」

見るからに年下の少年にそう言われて、ルーケはムツとする。

「フウ・・・ン。成程な。」

「・・・なにがだよ？」

「なんでもねえよ。爺さん、約束、違えんようにな。」

「分かった。お前もな。」

「あいよ。」

そう答えると、少年はもはやルーケなど眼中にないと言わんばかりに部屋を出て行った。

（なんなんだ、あいつは。）

そうは思うが、事を荒立てても仕方がないと自分を押しとどめる。

「おい阿呆。」

少年を見送った直後にそう言われ、ルーケは返答に困った。

はいと答えれば阿呆と認めた事になるし、かと言って怒っても仕方がない。

「今日はゆっくり休んでおけ。明日から死んだ方がましだってくらいしごいてやる。」

「・・・は？」

「だが俺は物凄く忙しい。あまり構ってられんからそう思え。」
「えっ・・・と？」

「本気で阿呆だなお前。弟子にしてやるって言ってた。プリン、客間を一つ用意してこいつを突っ込んでおいてくれ。それから、あの部屋の準備も頼む。」

「はいですの。こっちです。」

おもむろに好転した事態に戸惑いつつ、ルーケは大人しくプリンに着いて行った。

客間は恐ろしいほど質素でありながら豪華だった。

必要最小限の家具しか無いが、それらはすべて最高級品。

配置もしっかり考えつくされ、普通の生活をするのに不自由がない。
「部屋はここを使って下さいですの。何か用事があれば机に置いてある呼び鈴を鳴らせば誰か来ますの。何か質問はあるのですの？」
「うん・・・圧倒的に凄過ぎて、何を質問したらいいのか質問したいくらい。」

「じゃあごゆっくりですの。」

パタンと、アツサリとプリンは出て行った。

その後、部屋の中を一通り物色したルーケは、特にする事も無くぼけっとしていた。

さつき盗み聞きした内容なども含め、色々考えるが答えなど出る筈も無く、ふと疑問に思っと呼び鈴を鳴らした。

いつの間にか外は暗く、夜になっている事に驚いたが。

「なんですの？」

音も無く現れたプリンに心臓が飛び出すほど驚き振り返る。

「あ、いや、その……。」

何か言い淀んでいる様子を見て、プリンはいきなり首を傾げつつ、こう言った。

「……？ 娼婦が入用でしたら私がお相手をしますの。」

「えええ！？ 君が！？」

別に驚くほどの事でもないのだが、この手の世界に無縁だったルーケは心底驚く。

特にプリンはそっちこそ天職であり、生きるために必要な行為でもあるのだが、そんなことこそ知る筈も無い。

貴族もそうだが、屋敷を構えるレベルになると、当然暗殺の危険がある。

そんな人でも、いや、そういう世界に住むからこそ、恋愛結婚などできず、政略結婚などになる。

当然夫婦間に愛情など皆無な場合が多く、性的関係は子を産むだけとなり、寝室も夫婦別室など当たり前。

しかし、心を癒す存在はやはり欲しいため、愛人などを囲う訳だが、他人の屋敷に泊まっている場合はそんな者を連れてくるわけにもいかない。

それこそ自らの弱点を晒しているようなものだ。

そのため、相手方の屋敷の従業員が望まれれば相手をする事になるのが常識となっている。

当然ながら、そういう屋敷の従業員はそうそう簡単に成れる筈も無く、信頼できる相手の紹介などでやっと務める事が出来るほど厳選されるため、安心して頼めるという方式だ。

金持ちや貴族にとっては、目下の従業員も奴隷も大差は無い感覚なのだ。

現代人の感覚には合わないであろうが、今で言う人権など認められているのは金持ちだけの特権であり、それ以外は塵芥に等しい。

「い、いや、そういうのじゃなくて、その……水浴びとかできるかな？」

「浴室なら準備は出来ていますの。　好きな時にどうぞですの。」

「いいの？」

「なにがですの??」

「いや、俺が使っているのかな、と。」

ルーケは言わば、招かれざる客である事は自覚していたため、そう聞いたのだが。

「・・・今入りますの？」

プリンにはそんな気持など伝わらない。

「うゝん・・・そうしようかな？」

金持ちの水浴びするような浴室には、二度と入る事は無いだろうし興味はあった。

だからこそ呼び鈴を鳴らしたのだが、見るだけではなく入れるならそれに勝るものは無い。

「では、ご案内しますの。」

ルーケは興味津々で後を付いて行った。

プリンに案内されて入ると、そこは脱衣所だった。

冒険者の宿にも水浴び場はあるが、普通は脱いだ服を入れる籠が傍らに置いてあるだけで一緒になっている。

水も、カメに汲んである水を洗面器に取り、手ぬぐいなどを浸して体を拭うだけ。

だから、脱衣所があると言うだけで驚くのだ。

「ここで服を脱いで下さいですの。こちらが浴室ですの。」

そう言いながら、入って来た入口とは別の戸をプリン是指差し、そのまま待機する。

「・・・えゝつと・・・。脱ぎたいから出てくれるかな？」

「どうしてですの？」

（いかん、常識が違い過ぎる。）

ルーケは説明する事を諦めて、服を脱いで浴室に入り・・・さらにビックリして立ち竦む。

なんと、広い浴室の半分以上を床に埋め込まれた浴槽が占め、しかも温かいお湯が満たしているらしく、湯気が薄らと立ち上っていた。
「・・・なんじゃこりゃあ!？」

あまりに想像を絶する風景に、思わず声が出た。

「煩い。風呂場では静かにするもんだぜ。」

声に驚いて見れば、静かにモリオンが湯の中に入っていた。

「そんな事言っただって・・・これは・・・?」

「風呂つてやつだ。西の王国の文化でな、こうやって水やお湯を満たして浸かるんだ。おっと、湯船に入る前にそこで体を洗えよ。」

それが礼儀だ。」

そう言っ指差された先には、見慣れたカメが置いてあったが・・・それさえも湯気が。

贅沢なんてレベルではない。

よっぽどの裕福な大国の王族でも、こんな贅沢しているかどうかである。

「ってか、プリンがいるのか。教えてやれや。」

「はいですの。こちらに座って下さいですの。」

そう言いながらルーケより先に浴室に入り、洗い場の椅子を指差す。ルーケは呆然としながらも言われたとおりに座り、プリンは手慣れた様子でその背中を洗い始める。

やがて胸・腹と洗って行き、股間にきた瞬間、思わずその手を掴んで止める。

「こここ、こっちは自分ですから!」

「そうですの?」

そんな様子を見て、堪え切れなくなったモリオンは爆笑した。

「金持ちは服の脱ぎ着から用便後の尻拭きまで他人任せだからな。」

もったいぜプリン。後は俺が教えるよ。若い女の子がいると、

そいつも照れるってよ。」

「照れる・・・ですの?」

「そいつは生まれてこの方、自分の事は自分でやって来たんだ。」

その辺のボンクラと違ってな。こっちはいいから食事の準備に回ってくれ。」

「分かりましたですの。」

少し戸惑いながらプリンが浴室から出て行くと、ルーケはホツとし、すぐにガチャツと戸が開いて、ビクンと背筋が伸びる。

「着替えは用意しておくので、それを着て欲しいですの。」

「ははははいっ!」

その様子に、モリオンが更に爆笑したのは言うまでも無い。

ルーケが体を洗い終わって浴槽につかると、やっと心底ホツとした。

（水浴びと違って、風呂ってこんなゆったりした気分になるんだな。）

と、不思議な気持ちになる。

「さて、まずお前に確認したいが。」

改めて何だろうと、ルーケはモリオンを向く。

「お前、戦士はやめる。」

「ええ！？ いきなり何を！？」

「お前は戦士としては人並みの才能しかない。しかし、吟遊詩人や知識を生かした職なら向いている。そっちに進め。それなら思う存分俺も教えがいがある。」

「そんな！俺は剣に生きたいんだ！才能のあるなしなんて、そんな簡単に分かるわけないだろう！？」

「分かるよ。あれだけ一緒にいればな。俺は先に言ったように忙しい。才能の無い奴に物を教えている時間は無い。」

「そんな・・・！吟遊詩人では世界を平和になんて出来ない！俺は」

「うるせえ！」

「なん！？」

モリオン以外の声に怒鳴られて、思わずそっちを見る。

浴室の入り口に立つ腰に手を当てた少年に気が付き、ルーケは怒鳴り返そうとしてその裸体を見・・・驚きのあまり言葉を失った。

「なんだ、お前まで来たのかレジャンド。」

「なんだか知らんが大賑わいだな。」

そう言いながら、レジャンドはズカズカと歩いて来てジャブンと入って来た。

「体を先に洗えって何回も言ってるだろ、このケダモノ娘が。」

「いいじゃねえか、減るもんで無し。」

「水の精霊が嫌がるつつうの。」

そんな肉親同士の話などどうでもよく、ルーケは啞然としていた。

「・・・お・・・おんなあ・・・！？」

「あん？お前もかよ。」

「ブアッハッハッハッハ！お前の場合、脱がないと女だってわか

んねえからなあ！」

「うつせえ爺い！」

胸はまったく膨らみが無く、常日頃男物の服を着る娘、レジャンド。分かる筈も無い。

「さて、こいつの性別なんざどうでもいい。」

ひとしきり笑った後、モリオンは真顔になり、ルーケに改めて顔を向けると、レジャンドは不満そうにしつつも押し黙った。

「何度も言うが戦士はやめろ。それがお前のためだ。」

「でも、それじゃあ！」

「知識だつて生かせば軍師として活躍できる。政治で世の中平和にだつて出来る。なんでも争いで片付ける事はないだろう？」

「他人任せで平和なんて作れる筈がないじゃないか！ そんな、誰かがやってくれるってみんな他人任せだから、100年以上も魔物の跋扈する世界が終らないんだろう！？」

「そいつは少し違うな。」

「どう違うと言うんだ！？」

「守るべきものがあるから、人は強く成れる。だが同時に、守るべきものがあるから大胆には動けない。失う事を恐れてな。」

「だから失わないために戦つて守るんだろう！？」

「そう言う時もある。だが、常日頃は違うな。たとえば軍師だが、戦いの場で活躍するだけが軍師ではない。戦わずに勝つ事がまず最善だ。」

「そんな事、出来る筈がないだろう？」

「出来るさ。それが計略というものだ。今もしライヒの領土を拡大しようと思えば、まず隣国のプエルラを併呑する。」

「プエルラって・・・なんか、魔物に襲われたって・・・。」

「そうだ。そんな事知りませんでしたという態度で、過去にあった事柄を理由に上げて攻め込めばいい。でっち上げでも構わん。城門の一つが破壊されているそうだから、あつという間に占領できる。」

「そんな卑怯な！」

「平和を築く上で統一国家を作るのであれば、そう言った強引な事も必要だ。また、それに対し非難する国があれば、次はそこが相手だろうな。軍師として軍勢を使い、攻めて占領するだけではだめだ。しっかり法を整備し、治安を回復し、平等に政治を行えば国民はついて来る。そう言った事も剣意外に必要なものだ。」

「・・・それって結局、まず剣が必要じゃないか？」

「それ以外の場合、剣で何が出来るんだ？ 剣で出来るのは破壊だけだ。その後の再建こそ平和には必要なんだよ。」

なにか違うような気がしてならないのだが、どこがおかしいと指定もできない。

「ようは、剣も知識も必要って事だろ爺さん。」

「お、流石俺の孫。物分かりがいいな。」

「つまり、俺が剣でこいつが知識。いいコンビなりそうだと。

狙いはそこか？」

「生憎そこまで狙ってはいない。・・・ってかお前、国を治める気なのか？」

「・・・がらじゃねえなあ。」

心底そう言うレジャンドだが、まさか将来自分の夫が一国の王に成るとは夢にも思わなかったし、この場の誰も予想しなかった。

いや、正確にはここでルーケに会っていたからこそ、将来レジャンドはそこに行きついたとも言える。

レジャンドは元々、平和を求めて戦っている訳ではないのだから。

「なにはともあれ、一晚良く考えな。どうしても剣の道に進みたいと言うならもう止めないが、人並み程度にしか強く成れない事は明言しておくぜ。」

モリオンはそう言うのと、ルーケの返事も待たずに風呂から上がって消えてしまった。

ルーケは正直、剣以外の道など考えた事も無かった。

だから、突然のモリオンの提案には困惑しかできなかった。

しかしながら、モリオンがあそこまで言う以上、本当に強くは成れないのかと思い、剣に拘るのとはばかられ、迷った。

「なあお前。」

そんな悩みに没頭している時、不意にレジャンドが声をかけて来た。

「お前って。ルーケと呼んでくれていいよ。」

「今年いくつだい？」

「二十歳の筈だけど・・・？」

「なんだ、同じ年か。」

「・・・ええ！？ もっと君、若いのかと思った。」

「正確にはわかんねえけどな。」

「わからない？」

「ああ。俺が記憶も残ってないようなガキの頃、親とはぐれてな。正確な年は知らねえんだわ。爺さん曰く、今年二十歳らしいが。」

「・・・俺も似たようなもんだな。もっとも、肉親が誰か生き残っているのかも知らないけど。」

「なあ、それでなんで平和なんて求めてんだ？ 誰か愛する人がいて、守りたいってわけでもないんだろ？ 戦いに身を置きたがるにしては、理由が足りないと思うんだがなあ。」

「理由・・・か。考えた事も無かったな。」

「考えた事が無い？」

「ああ。君はなんで戦うのか知らないが、俺はシーフギルドに拾われて育てられた。人を殺す事を、何とも思わない人を何人も見て来た。だからかな。世の中を平和にして、結婚して平和に暮らしたい。そのために冒険者に成って強くなり、平和を築き上げて、その子が平和な世界に生きられるようにしたい、なんとなく、そう思ってたさ。」

「なんだ、十分考えてるじゃんか。俺なんて戦う事で飯食う以外興味ねえし。なんかすげえ魔族がいるみたいだが、倒さないと飯食えなくなるから戦っただけでな。他人の事なんて知ったこっちゃない。」

「・・・魔族？」

「ああ。とりあえず今、そいつを倒せる可能性があるのは俺らだけらしいからな。仕方ねえから行ってくらあ。爺さんも手助けするって言っしな。」

「・・・可能性って・・・正直、君がそんなに強い様に見えないん

だけだな。腕だつて細いし。」

「まあ、見た目じゃわかんねえさ。人の強さなんてな。それに俺は特別だし。」

「自分で言うかあ?? 特別なんて。」

「だつて特別だもんよ。」

そう言いながらレジャンドは立ち上がり、背中の翼を広げて見せた。真黒い、コウモリのような被膜状の翼を。

完全な暗闇の中、モリオンはベットに横たわりながら、明日からの事を考えていた。

時刻は既に深夜になろうという頃だ。

「ご主人さま? なにか悩みごとですか?」

肩まで被っていた布団から、ヒヨコツとプリンが顔を出す。

「ちつとな。それと、二人しかいないんだからそんな言い方しなくていいぜ。食事は終わったのか?」

「はいですの。」

そう言いながら全裸のままベットから抜けだしたプリンは、背中の翼を大きく伸ばしつつ、体も同時に伸びをした。

レジャンドよりも鮮やかで艶やかな黒色をした被膜状の翼。

淫魔サキュバス、それがプリンの正体であった。

「大魔王様、ありがとうございましたの。」

「いい加減、その内気な性格直して、自分で餌を確保出来ないもんかね。それと、その言い方やめろつて。今の俺は魔王でも魔界王でもねえんだぞ。」

「私にとっては命の恩人の大魔王様ですの。他の呼び方は出来ないですの。それに……。」

「それに?」

「大魔王様の精気を頂いた後では、普通の人間の精気は不味いのですの。」

「その割にはルーケの……。」

「そそそそれはっ・・・つい、可愛らしくて・・・。」

「それ、あいつに言ったら傷つくだろうな。」

思わず苦笑いを浮かべるモリオンである。

「まあ、生き返った直後だし、お前に精気吸われてたらまた死んでたなあいつ。よく我慢したじゃないか。」

「それはその・・・おねえ様方は、よくこんなもの好きだなあと・・・。」

「それはお前の存在理由を全力否定してるようなもんだが。まあいいか。」

そう言っと、モリオンも布団をどけて起き上がり、服を着る。

もつともモリオンの場合、指先一つ振るだけで服を着ているのだが。「お前も服を着たらゆっくり休みな。俺はメガロスの所へ行ってくる。」

「はいですの。」

淫魔サキュバス。

魅力的な女性の姿をした魔族で、基本的にナイスバディーな種族であり、顔も美人である。

男の姿をしている種族もいるが、そちらはインキュバスと言う。

純粋な魔族で、中級に位置する強力な魔族だ。

特徴としては、双方とも非力ではあるが、異性の精気を糧に生きているのが共通点である。

プリンは魔界にいた頃、餓死する寸前にモリオンに拾われた。

普通サキュバスは異性を誘惑し、憑依して、精気が枯渇して死ぬまで徐々に吸い取る。

それは性的行為が主体であるが、密着して吸い取るだけでも問題は無い。

ただ、普通のサキュバス・インキュバスは、性行為そのものが大好きであるため、淫魔と呼ばれるのだ。

プリンはそれを可哀相と思ってしまふ性格であつたため、どうして

も異性に憑依する事が出来なかった。

そのため餓死しそうになっていたのである。

同じような理由で、ガードなどもモリオンに拾われたクチだ。

もつともガード達は魔族ではない、普通の人間ではあるが。

だからこそ、ルーケを拒否するモリオンに違和感を覚えたのである。

ちなみに精気とは、物体的な物ではなく、性欲みたいなものだ。

生気に近いが少し違う。

そんなわけで、プリンは世にも珍しい、淫魔の癖にまだ男を知らないという変わり種であり、かと言って、特に同性が好きなのではないため、食事に困っていたのである。

ちなみに、基本的に異性の精気を糧に生きる淫魔であるが、同性のものでも問題は無い。

ようは好みの問題であり、自称通などになると、初ものを好んだりと趣向も色々ある。

また、魔族の精気は不味いらしいが、それを好む者もいたりする。

朝食の時間になり呼ばれて行くと、食堂にはドレスを着た美しい少女しかいなかった。

その少女は純白の白いドレスを着て、長い髪を結い上げて、高級そうな綺麗な髪留めで止め、楚々と座っていた。

そのため最初、この令嬢かと思ったほどである。

その少女がレジャンドだと気が付くまで、ゆうに数分は必要とした。しかも胸元が大きく開いたドレスであり、その胸元は見事なほど盛り上がって谷間を形成していたのだから、分かる筈も無い。

「・・・ど・・・どうしたの・・・？」

「あら、どこおかしいでしょうか？」

「・・・い・・・いや、あまりにも・・・その・・・綺麗で・・・。」

「私も一応王族の女性ですから、この程度の事はできてよ？」

「あ、そうな・・・なんとお！？ 王族！？」

「ええ。祖母が王族ですので。こんな感じでどうよ？」

コロツと態度を変えたレジャンドに、さらにルーケは度肝を抜かれた。

「流石ですのゝ でも、ドレスですので椅子に胡坐で座るのはやめた方がいいですよ。ちゃんと足を降ろして揃えて置くですよ。」

「けつたりいなあ。 いいじゃねえかよパンツぐれえ見えたって。」

「たかが布だぜ？」

「淫魔みたいな事言わないで下さいですよ。」

自分の事を棚に上げて平然と言うプリンである。

「魔って言やあ・・・こいつの方が幽霊みたいな顔してんだけど。」

そう言ってルーケを指差すが、確かにボヘツとしていた。

昨日レジャンドの翼を見て以降、そのままレジャンドが風呂から上がってしまったため、その正体はほとんど聞いていない。

気になって気になって寝れなかったのだ。

決して年頃だから、女性の裸が脳裏に焼き付いて、というわけではない。

多少はあったが。

「いや、ちよつと考えごととしてたら寝不足で……。」

流石に昨日の事を言うのは憚られる。

被膜状の翼は魔族の特徴であり、天使など天に属する聖属性の者は羽毛の翼である。

色は色々あるのだが、例外はほぼ無い。

ルーケはプリンの正体を知らないし、魔属性なら普通は隠しているものだ。

それをこの場でばらすのは……と、思ったからだ。

ちなみに女性と混浴したのが憚られてという常識はない。

温泉などもそうだし川で水浴びもそうだが、男女を分けている場所も国も無い。

「あら、それはいけませんわ。プリンさん、床の用意を。」

「はいですの。」

そういう仕草は本当に貴族のようで、ルーケはドギマギしてしまう。

「いやいやいやいや、今日から師事受けるし寝てられないよ。」

「わたくしが添い寝してさしあげましてよ?」

「え!? いやその……。」

「プリンもしますの。」

美しい&可愛い女性二人に真摯な顔でそう言われ。

「えええ!? ……正直、寝込みたいかも。」

思わず本音が出る。

「そんな元気がありや問題ねえな。」

「ですの。」

そして盛大に笑われてガツクリと頂垂れる。

「えゝつと、ところでモリオンは?」

「用事があって先に食べましたの。ルーケさんは食事が終わった

ら、準備してくださいですの。」

「さ、めしめしっ!」

「レジャンドさん!? ドレス・・・」

「ん? うおっ! つけ胸してんの忘れてた!!!」

「と、言うか、がつつかないで下さいですの。せめて、ナイフとフォークは使って欲しいですの。」

「いいじゃねえか。飯なんて腹に入ればみな同じだし。」

と言う主張の下、平然と素手で食べ漁るレジャンドである。

「ワ・・・ワイルド・・・だなあ。」

「野生生活が長かったですの、レジャンドさん。」

「や・・・野生って。」

「おいそれ食わねえなら食べちまうぞ?」

「あ。」

返事をする暇さえ無く、レジャンドはドレスの裾を持ち上げてダダとテーブル上を走って来たと思うと、かつさらって戻って行った。

鎧を身に着け、腰に剣を下げると、ルーケはプリンに指示された場所まで行った。

戸を開けると、そこは比較的小さな部屋で、中にはメイド姿のプリンが待っていた。

「あれ? モリオンは?」

「ご主人様の待つ場所へこれから行きますの。私の服を握って下さいですの。」

そう言われても・・・プリンのメイド服はミニスカートであり、スカートを掴むとものに下着が見えそうだ。

腰をキュツと縛っているリボンは、端を握れば解けるし、輪っかを握れば絞れそう。

背中が掴めそうな場所は無く、肩などにレースのヒラヒラは付いているが、小さすぎて掴む事しかできそうにない。

それにそもそも、服を握ってどこへ行くと言うのか。

この部屋は、ルーケが入って来た入口しかなく、隠し通路でもあるのなら話は別だが、それ以外に行きようがないし、そもそも時刻は朝食の時間を過ぎて少ししか経っていない。

外に出たって服を握って先導されるような暗い場所は見当たらないだろう。

「早くですよ。」

「いやそう言われても・・・どこへ行くの？」

「説明するのは大変ですよ。早くして下さいですよ。」

そう急かされて、とりあえずルーケは一番無難な、肩口にあるレーズを摘まむ。

「着くまで離さないで下さいですよ。」

「わかった。」

ルーケがそう答えると、プリンは背を向けて奥の壁の方を向き俯きながら、何か小声で喋り始めた。

なんだろう？ と、顔を近づけると、フワリと香る、若い娘の甘い体臭。

思わず鼻の下が伸びた瞬間。

「時の門よ！ 開け！」

プリンが叫び、目にうつる世界が一変した。

「着きましたの。」

クルツとプリンが振り向いて見上げて来るが・・・ルーケはそれどころではない。

さっきまでプレシヤス邸にいたのに、一瞬で山の中。

左手には綺麗な小川が、右手には小さな掘立小屋、それ以外はとにかく木。

呆然とするルーケに構わず、プリンは小屋の戸を叩く。

「ご主人様、連れて来ましたの。」

中で返事があったのかどうかは知らないが、プリンがガチャツと戸を開けると、中からモリオンが出て来た。

「お疲れさん。 プリンは帰っていいぞ。」

「はいですの。」

そう言うと、プリンは再び呟き始め、そして叫ぶなり消えた。

「ききき消えた!？」

「たかがテレポートの魔法で驚くなよ。ゴブリンの巢から帰って来る時も俺が使っただろ？ もう忘れたのか？」

「・・・だって、あの時は・・・。」

「だってもへちまもねえ。とにかく入れ。」

そういうと、モリオンはサッサと小屋に入ってしまった。

小屋に入って、ルーケは更に驚いた。

外観からは想像も出来ないような、ながい通路が霞むほど奥まで続いていたのだ。

「さて、最初に確認しておく。戦士はやめろ。どうしても戦士になりたいなら他で習いな。俺は忙しい。」

そう言いながら、モリオンは手近にあったボロイ椅子に座った。

良く見れば、入口付近の食堂らしき場所だけは、外観どおりだった。古い家に、後から突き当りの壁を壊して新しい家を建てて繋げましたと言う感じだ。

もつとも、さつき見た限り、そんな場所も建物も存在はしていなかったが。

「おい、ぼけっつとしてんじゃない。」

そう言われてやっとモリオンに振り向き、そして・・・迷う。

「まだ迷ってんのか？」

「・・・その前に、聞いていいかな？」

「なんだ？」

「昨日、あの子・・・レジャンドの背中に翼があつたんだ。」

「なんだ、あいつお前に見せたのか。気に入ったようだな、お前の事。」

「なぜだ？ あの翼は魔族のものじゃないか！ それなのに・・・！ 王族とか、本当なのか！？」

「あゝ・・・どこから説明したもんかな。話が長くなるから待ち合わせに間に合わん。先に断わって来るから、一番手前の右側の部屋に荷物を置いて待つてろ。とりあえず鎧と剣は外しておけ。

何を始めるにしても暫く使わないからな。」

「え？ なが」

そう言くと、モリオンはルーケなど気にせず姿を消した。

「・・・本当に何者なんだ？ 絶対今、呪文唱えてなかったよな。」
物凄く疑問には思うが、とりあえず部屋に入って、指示ど通りに鎧と剣を外して置く。

部屋は小さいながらも必要な物は一通り揃っていた。
流石に昨日寝た寝室ほど一流品揃いではなかったが。

その後、何もする事がないので、とりあえず外に出て見る。

やっぱり山の中であり、空気が清々しく寒い。

建物の裏に回ってみると、さっきいた食堂で建物は終わっており、
手を出してみても何も触らず、確実に部屋とか存在していなかった。
なんだか狐に包まれたような気がしてならないが、とにかく寒いので小屋に戻る。

そして手近な椅子に座り、ふとある事を思いついた。

レジャンドの背にあったのは魔族の翼。

と、言う事は、両親のどちらかが魔族と言う可能性がある。

いや、それ以前の親、つまり祖父母・・・。

鎧と剣を外しておけと言うのはまさか、殺す気で・・・！？

と、思い至った時、モリオンの姿が忽然とあった。

「ぬおああ！？」

ドガンツと驚きのあまり椅子ごとひっくり返る。

「さて、ここで話す事、見た事、全てを他言無用の秘密にしてみら
おう。 たとえ俺に師事を受け無くともな。 でないと、俺は全力

でお前を抹殺しなけりやならん。」

「や、やっぱり俺を殺す気なのか！？」

「お前の態度次第だな。 で、いつまで寝転んでんだ。」

そう言いながら差し出された手を、ルーケは掴むべきか迷う。

迷っているうちに、モリオンの胸元掴まれて椅子ごと起こされた。

「さて、レジャンドの事だが、あいつはとりあえず普通の人間だ。」

「いや普通じゃないだろ！？」

「正確には普通だよ。 ただ、ちょっと血の力を使うとああなるが。」

「ああなるって・・・やつぱり、あの子の親は・・・。」

「ま、見た方が速かるう。」

そう言いながら、モリオンが立ち上がると・・・いつの間にか、ずっと見続けていたのにその変化が分からなかったほど自然に、まったく姿が変わっていた。

会って別れた直後に、思い出そうとしても思い出せないような平凡な顔立ち、中背ながらオーガーのようなごつい体だった。

それが、男女問わずに100人いたら100人振り向くような美貌を持った青年へ、体はスマートに成り、そしてその背には闇よりも鮮やかな黒色の羽毛に覆われた、12対の翼。

「俺の名はアラム。始原の双子神の一人で混沌の悪魔だ。 12

0年ほど前、魔王として降臨した魔界王でもある。 で、何が聞きたい？」

そう言われても、ルーケは声も出ない。

驚きのあまりではなく、圧倒的な闇の気配に恐怖で心がかんじがためにされていたためだ。

息をただけで死ぬ、そんな逃れようも無いほどの確実な死を突き付けられたような恐怖。

「おっと、いかん。 久しぶりにこの姿になったからな。」

そう言いながら、再び姿が変わった。

今度は容姿は変わらないが、背の翼は1対のみ、闇の気配は皆無に等しい。

「簡単に話そうか。 俺は魔王としてこの世に来たが、一人の人間の娘に惚れたから魔王を辞めた。」

「・・・そんな簡単に辞められるの？」

「簡単さ。 文句言いに来た奴は追い返し、襲ってくる奴は返り討ちにすればいいだけだ。」

サクッと酷いとは思ったが、そもそも相手は悪魔である。

「生まれた息子は結婚したが、嫁は人間の争いに巻き込まれた拳句、魔物に食い殺され、娘のレジャンドは行方不明になった。 怒りと

空しさに、あいつは魔界へ行った。レジャンドは野生の獣のようになりながら、一人で生き抜いていたのを俺が拾い、鍛えて冒険者として世に送り出した。んだが。」

「んだが・・・？」

「俺の血が覚醒しちゃってな。ああやって時折魔族になっちまうんだよ。ま、普段は問題ねえんだけどな。」

「いやありすぎだろ。とは思うが、言ったところで何か変わるとも思えず。」

「ってわけだ。何か他に聞きたい事はあるか？」

「えーっと、確か魔王って倒されたって聞いたけど？」

「ああ、一回死んだ。」

「え？ だって・・・まさかゾンビ？」

「俺は始原の神の片割れだぜ。不死なんだよ。魔王としてこの世界に来た時、俺は魔界王として魔属性だった。しかし、それでは不都合だったんで、勇者達に倒されてやって生まれ変わったんだ。中立属性にな。」

そう言った時には、いつの間にか背中の翼は左が黒、右が白の羽毛に変色していた。

「そんで、ついでに天界に属する軍将、つまり、天軍の將軍になった。そう言う事だ。この世界に不関与な天軍なのに、なんでこの世界にいるのかと言われりゃ、世界の管理者として任されているからだ。」

なるほど、と、ルーケは納得した。

盗み聞きした自殺の手伝いとは、魔王として倒される必要があったため。

これでは確かに自殺の手伝いだ。

そして世界の管理者の事も。

と、そこで疑問に思ったため、深く考えずに質問した。

「あれ？ 息子って今魔界に？」

「そうだ。」

「じゃあ孫はレジャンドで、子供は？ 他にいるの？」

「いっぱいいる。 が、なんでそんな事聞く？」

「だって親子にま・・・。」

アラムのジト目に気が付き、言葉が止まる。

「お前、盗み聞きしてたな？ 油断も隙も無い奴だな。」

「す・・・すいません。」

「まあいい。 今回倒さねばならない相手は魔界から掟破りに出て来る魔物だ。 正直、ほつとくとこの世界は滅びる。 また、任せて倒せる人間なども今はいない。 だから、現状で一番力があるレジャンドにてつとり早く依頼したんだ。」

「掟って？」

「魔界とは色々あるんだ。 全ては説明しきれん。 とにかく、突発的に強大な奴が出現しちまってな。 そいつがこの世界を滅ぼしに来るから撃退するのさ。」

なんだかとてもなさ過ぎな人に師事を求めてしまった。

そんな後悔を覚えなくもないが、知ってしまった以上、また、師事を受けてくれる以上、これ以上も無い相手ではないだろうか。

相手は世界創造した人物であり、圧倒的な力で世界を滅ぼしかけた人物でもある。

ハッキリ言つて、全世界最強と言つても過言ではないだろう。

そんな相手に師事を受けてもらえ、教えてもらえれば、自分も強く成れる。

ルーケはなんだか命がけかもしれないが、嬉しくなつて来た。

「今、この自然界にいる子はブリつて娘だけだ。他は魔界と天界に散っている。他に聞きたい事はあるか？」

「えーっと・・・奥さんは？」

「とうに死んだよ。120年前に成人してるんだぞ？ 普通の人間はそんなに長生きしないだろ。」

そりゃそうだ、と、納得すると、他に聞きたい事もとりあえず浮かばない。

「とりあえず質問は終わつたみてえだな。で、どうすんだ？」

「うーん・・・。」

とりあえず、戦士としては教えて貰えない。

でも、ルーケは世界を平和に導けるような戦士、または騎士、または王に成りたいのだ。

最低限、王に登り詰められる他の職は・・・。

「・・・ねえモリ・・・なんて呼べばいい？ それに質問。アラム族って？」

「俺の名はアラムとさつき教えたが、最初この世界に来て人間達に物を教えていた時、普通にアラムと名乗っていたんだが、何回か知恵や技術を悪用したりする奴が出て来てな。戦争の道具になつた

りもしたから教えるのをやめたんだ。そのうち魔界の面倒見るのが忙しくなつて100年ほど来なくなつたんだが、そしたらいつの間にか伝説にされてたんだわ。」

とれだけ昔に来ていたのか分らないが、100年も姿を見ない知恵者が姿を消せば、伝説にもなるだろうなあと、思わなくもない。「んで、今更物を教えるのもかつたるいからやめて、普通の人間のように暮らしていたんだ。普通の人間は50年程度で死ぬから、いつまでも同じ姿・名前だと怪しまれるんでな。一族つて事にして、色々姿を変えたり名前を変えたりして誤魔化していたんだ。」

「・・・あれ？ 年数が合わないような??」

「なにがだ?」

「伝説になつたのつて何年前?」

「軽く300年以上前じゃないか? 魔王の時は名乗つてないからな。俺の正体知つていたのはクラスイーヴィとプリだけだし、プリは俺の戦い方で意図を察していたからな。クラスイーヴィは倒したけど不審げだったから、まだ生きていると不審がつてるだろう。それに俺の正体なんぞ言い振らしたらどうなるか、あの二人こそ一番良く知つてるし。」

「・・・? どうなるの?」

「世界が恐慌するよ。この世を作り出した神が滅ぼしに来てたんだぜ? 倒したら世界が消滅するんじゃないかって普通思うさ。」

なんせ人間達は、俺と兄貴の魔力でこの世界は維持されていると思つてるからな。」

「え!? じゃあ、神話とか世界創造の話は全部嘘!??」

「一部本当だが、ほとんどは嘘だな。まあ、そのように仕向けたのは俺だけだ。」

「なんでまた・・・?」

「知つてどうする。真実なんて自分で探して知るもんだ。なんでも知つてたら面白くないだろ、人生が。」
自分で探して・・・。

その言葉で、ルーケは目指すべきものが今、具体的に頭に浮かんだ。
「なあ、モリオン。」

「ん？」

「ただの戦士じゃ教えてくれないんだろ？」

「ああ。お前が俺に追いつくほどの才能持ってれば話は別だが、生憎お前の才能は人並みだ。まあ、知恵を使う仕事なら人並み以上に成れる才能はあるから、お前の根性と頑固さに応えてそっちなら教えてやる。」

「じゃあ魔法戦士にしてくれ。」

「それも無理だ。」

「あれ。」

折角閃いたのにと、ガツクリ頂垂れる。

「お前は魔力、ほとんど無いんだよな。そっちの分野に関しては人並みにもならん。」

「でも、俺は王になりたい。英雄になりたい。そして、世界を平和にしたい。剣は人並みでも、技を覚えれば強くは成れるだろう？ だから・・・そうか、じゃあ！」

「技に頼る気持ちは分からんでもないが、お前じゃ俺の技、ほとんど扱えないぞ。」

「いや、技に頼るんじゃ無く、知識を教えてくれモリオン！」

「それなら構わんが、学者にでもなるのか？ もしそうなら」

「違うんだ！」

「何がだ？」

「知識を武器に戦う戦士にしてくれ。軍師では王には成れない。

でも、知識を生かして世界中を巡り、戦えれば、英雄になれる。

俺は誰かの下で平和を実現したいんじゃない。自分の手で成し遂げたいんだ。頼む、モリオン！！」

「・・・勝手にしろ。だがそれなら、俺が懇切丁寧に教える必要も無い。自分で学べ。着いて来い。」

そう言うともリオンは立ち上がって通路の奥へと歩き出し、ルーケ

も訝しげに着いて行く。

「そう言えば、この通路ってどうなってるの？」

「ああ、壁を境目に、異次元に通じているんだ。」

「い・・・いじ!？」

「現状でこの力を使えるのは俺だけなんだけどな。残念な事に。

まあそんな事はどうでもいい。ここだ。」

そう言つて、ガチャツと開けたのは、ルーケに与えられた部屋から3つ先。

どこまであるの・・・の・・・の・・・。

と、入り口で叫んだらエコーがかかりそうなほど、広い部屋に所狭しと何列もズラ～ツとギッシリ本の詰まった本棚が、遙か彼方まで続いていた。

「世界の始まりから現在までの歴史、現在ある全ての魔法と、過去に失われた魔法などを完全に網羅した魔術書、罨の知識や狩りの仕方などなど、まあ、ここにある書物で分からない事は何もないな。

好きに調べな。魔術書は読めないだろうが、もし読めても声に出すなよ。下手すりゃ死ぬぞ。」

「・・・マジ？」

「他にも、魔術書の中には禁断の呪いが掛かった物があるからな。

触っただけで力を吸い取られるような感じがしたり、冷たすぎたり、ゾクツとしたら手に取るのはやめておけ。持ち主を選ぶ魔術

書もあるしな。知識を得るだけならそっちは関係ないし、知っていた事は好きに調べな。で、次だ。」

モリオンはそう言つと、更に二つ奥の扉を開けた。

今度は中央に一体の人形があるだけで、他には何もない広い部屋だった。

その人形も人型というだけで、顔も無ければ腕や足もまともに作られていない。

言ってしまうと、人型に作っただけのヌイグルミを、そのまま木製にした感じだ。

その人形に歩み寄ると、モリオンはポンポンと頭を叩いた。

「こいつは通称ドール。コマンドワード次第でいろんなものに変化する。」

「ドール？ 変化??」

「そうだ。サーバントはこないだ使って見せたが、あれの上級版と言ったところか。サーバントは人間の姿に成って、従順に命令に従うだけだからな。こいつは知能も兼ね添える。ま、使ってみるか。アンポ。」

ボウンツと、ドールの足もとから突然煙が吹き出し、一瞬だけ全身が包まれ。

煙が消えた後に現れたのは半裸の物凄く美しく、物凄く色っぽい美女だった。

「おおお!？」

美女はルーケに向かってニコリと微笑むと、ウインクした。

「夜、一人で寝るのが寂しかったら添い寝でも頼みな。本来の使い方じゃないけどな。アンポ。」

ボウンツとまた煙に包まれ、再び人形に戻る。

「で、だ。こいつを使って、勝手に剣の稽古もしたければしな。」

モリオンの提案に、思わずルーケは目を丸くする。

「何度も言うが、正直言ってお前の戦士としての才能は人並みだ。

だが、実戦を積みれば積むほど当然強くは成れる。 限度はあるが

な。 気が済むように好きなだけ自分の技量を磨きな。 まず、コ

スタ。 こいつが一番技術を磨きやすい。 コマンドワードを唱え

た本人の技能よりちよつと上の技能を持った戦士になる。」

「ちよつとつて・・・どのくらい？」

「10回やり合つて、4回勝てる程度だな。 次いで、技を磨きた

い時にはマキヨ。 全く同じ技能レベルでしかもお前の癖や剣筋な

どもトレーニングしてくる。 自分の技の欠点を見つけたりするのに役

立つ。 最後に女性とやり合いたい場合、コスタをメスタ、マキヨ

をタキヨに変えれば異性になる。 忘れるなよ。」

「えゝつと、コスタ・メスタ・・・。」

そう言つた途端、ボウンツ、ボウンツと変化し、若い女性の戦士が現れた。

「うお！？ メスタ！」

襲い掛かつて来ようとしたので慌てて叫ぶと、また人形に戻る。

「なんで！？ モリオンが言つた時は変化しなかつたのに！」

「細かい事は気にすんな。 後で紙にでも書き留めておけ。 じゃ、

俺は魔物退治に行つて来る。 暫く留守にするから、好きなように

今教えた部屋を使つて頑張んな。 他の部屋は開けない方がお前の

ためだし。」

「・・・いったい何が・・・？」

「色々だな。 下手に開けると命にかかわるから気をつけな。 そ

れと食事だが・・・。 どうすつか。 やっぱプリンに頼むか。

あいつに持つてこさせるから。」

「あ、はい。・・・モリオン。」

「ん？」

「色々ありがとう。俺、頑張るよ。」

モリオンはクスツと笑うと、姿を消した。

天界は常に過ごしやすい気温・湿度に保たれ、楽園のようなものである。しかしそれは見た目の事。

住むとなったらその規制の多さに目を丸くする事だろう。

始原の双子神の兄バーセは、法こそ全てと主張し、厳正なる規則や法を定めた。

モラルや常識に沿って生きていれば、決めなくてもいいだろうと言いたくなるほどだ。

もちろん、それを破る者がいるから定められるのだが、時にはやはり、聞くと笑ってしまふような法もある。

例えば、神王の住む宮殿の前に広がる中央公園にはランニングコースがあるのだが、右回りと法律で定めていたりする。

今や規則にがんじがらめの感が拭えないほどだ。

そんな天界の一番端の方に、広大な花園がある。

天界では住む場所が中央であればある程地位が高いので、地位が低い事が良く分かる。

しかし、その巨大な所有地が持ち主の力の強さを物語っていた。

その花園の主の名はボニート。

慈愛の女神、娼婦の女神、冠婚葬祭の女神などなど、色々な呼び方をされる女神である。

ボニートは成人になればなるほど、強力な誘惑の魔法を勝手に発散する体質であったため、神々に嫌われる事は無かったのだが……。その日、ボニートは花園の中央に設置してある広場のベンチに腰掛け、使用人とお茶を楽しんでいた。

使用人と言っても現在は一人しかおらず、たった二人でこの花園を維持・管理しているのだが、天界は元々害虫や病気などに無縁の世界なので特に問題は無く維持できている。

「ボニート様、一つお聞きしてもよろしいですか？」

「なんですか？」

「なぜ自然界に関わられるのですか？」

使用人の娘は、真顔でそう聞いてきた。

この娘は過去に自然界から、生贄として神官・巫女として送られてきた人間の子孫である。

その娘が自然界に關与する事に疑問を感じるのは、当然理由がある。自然界に限らず、魔界以外は天界が支配・管理している。

しかし、妖精界に住む妖精や精霊達以外、どこの世界でも神々を熱心に信仰してはいないのだ。

それもその筈、神々は他の世界と関わりを持たなくなって久しい。

特に自然界は、自然に人間達の成長を促すため、一部の知能者である黄金竜と銀竜、そして混沌の悪魔以外、ほぼ関与していないのだ。そのため神々を崇める必要性が無く、また、生贄を野蛮とする風習が広まったため、尚更天界に關心が無くなった。

異世界では、回復魔法を神官・巫女が崇める神に頼み、神々が回復するという方式を取っている事もあるが、このクオーレでは白魔法として確立しているためそれもない。

結果、神って偉そうに踏ん返り返って天界にいただけでしょ？ 俺には関係ない存在だね、状態である。

使用人の娘は同じ人間だけに、神の偉大さを知らず、信仰もしない自然界の人間などに関わる気が知れないのだ。

しかも天界では、無断での自然界関与を認めていない。

もつとも、天王はボニートに特別な許可を与えてはいいる。

ボニートが自然界に災いを成す事が無い事を理解しているためだ。

「それは、父上と同じ理由ではないかしら。」

「お父上様・・・？ 始原の悪魔様と同じ、ですか？」

使用人の娘にとってはとても信じられない理由ではある。

かつて、魔界王であった始原の悪魔は、平和に暮らしていた天界に魔界の軍勢を率いて攻めて来た。

その理由は、平和なだけではつまらんだろうから刺激を与えてやる、と言う、ただそれだけであつた。

真の狙いは他にあつたのだが、天界の住人がそんな事を知る筈も無く、ただ、肉親や親しい人などを失つた悲しみと恨みだけが残つた。そして、始原の双子神は数多の巫女と子をなしたが、現在天界に主として住むのは兄バーセの子達である。

混沌の悪魔と自ら名乗るアラムの子は少数で、ほとんど魔界へ移つてしまった。

そして、ボニートが強大な力を持ち、天界にいながら端に追いやられてるのは、その戦争が原因でもあつた。

「ええ、そうよ。伯父上は世界を崩壊から守るために、去り際父上に後の事を任されたけど、平和であつても争いであつても悲しみは必ずあるもの。良き人を守り、導く事で、より良い方向へ導く事が出来る。わたくしはそう考えています。それに、悲しみに明け暮れている人を見たら、放つておけないではありませんか。」

そう言われると、使用人の娘は何も言えない。たとえ相手が犬でも、困っているものがいると助けずにはいられない性格なのだから。

だからこそ慈愛の女神と呼ばれるのだが・・・同時に、相手を癒すためには性的行為も拒まないため、娼婦の女神とも言われてしまうのだ。

使用人の娘は、この若く美しい女神が、いつも幸せにいられればいいな、と、見詰めた。

ちなみに今は誘惑魔法を抑えるヘアバンドをしているため、そんなに放出はされていない。

全開にすれば同性でもメロメロである。

それは神々でさえ例外ではなく、トラブルを避けるために普段公式の場に出る時には幼女の姿になって抑えているのだ。

そのためボニートの容姿は自然界では色々伝わっており、どれが本当だか分からなくなっている。

ともかく、家族同然に暮らしている使用人の娘とお茶も飲み終わり、花園の手入れを再開しようかと言う時。

ムニヨ。 と、ボニートの脇から忽然と腕が現れ、その胸を揉み始めた。

ギョツとする使用人の娘は動きが固まるが、ボニートは平然とお茶を飲み終えたカップを皿に戻し、

「新しいお茶の準備をしていただけますか？ 父上もお望みでしょうから。」

「ちち父上!？」

使用人の娘が驚きの余りそう叫ぶと、ヒョコツとボニートの背後からアラムが顔を出した。

「ちったあ動揺するなり、慌てるなりしろよな。」

「あら、それを期待しているのが分かつていて私がするとでも？」

「こやかにボニートがそう返すと、アラムは諦めて手を引つ込めた。
「可愛くねえなあ。これだから年食った娘はよ。」

ボリボリと頭をかきつつベンチを回って来る男に、使用人の娘は反応に困った。

始原の悪魔は先ほども書いた通り、自ら悪魔と名乗る強大な人物である。

下手に機嫌を損ねれば、自分のみならず、敬愛する主人にも危害が及ぶ。

「あれ？ 使用人変えたのか。」

そんな緊張している時に話を向けられ、更に硬直する使用人の娘。

「父上、いつの話をしていますの？ 前にここに来られた時は、軍将に成った時ではありませんか。」

「もうそんなになるか。俺も歳をとるわけだ。」

「ところで、先に天王様にご挨拶はなされました？」

「まさか。公用じゃねえもん。」

そう言いながら、勝手にテーブルと椅子を出現させ、ドカツと座り込む。

「で、茶はくれんのか？」

「あ！ はい！ ただいまっ！」

使用人の娘は即座に立ち上がると、ダッシュで館へ向かった。

「そんなに急がんでもいいぞ。」

「父上、そう言う事は本人に聞こえるように言って下さいませ。

小声では聞こえませんか？」

「聞こえないように言ってたもんよ。」

ボニートがクスツと笑いながらそう言うと、アラムは平然とそう返

した。

「あの娘、俺の悪い話しか聞いて無いようだな。あの様子じゃ。」

「あら、父上の良い話ってなにかございましたか？」

「本人に聞くなよ。」

「ご本人が知らないのに、そんな話を聞ける筈がないではありませんか。」

「それを聞くのが娘の仕事だろ。」

「嘘は嫌いですから。」

傍から見れば、表情はにこやかで仲の良い親子、と言うより兄弟に見える二人だが、会話はこんなものである。

「で、何をお悩みですの？」

「・・・分かるか？」

「もちろん、親子ですもの。それに、父上が私の所に来る時は、大概悩んでいる時が癒されたい時ですし。例の魔族の事ですか？」

「あんな雑魚、最悪、俺が直接かかれば何でもねえさ。問題は弟子だ。」

「弟子？ 父上が？ 人間でも弟子になさったのですか？」

「そうだ。」

「あら珍しい。よほど期待できる人物なのですね。シェーンさんのような方ですか？」

「逆だ、逆。あまりに才能無さ過ぎて断ったんだが、頑固でな。」

「あら。でも、それで何をお悩みなのですか？」

「・・・そいつは戦士の才能が人並みしかないんだが、戦士に拘ってな。世界を平和に導けるような英雄に成りたいと。」

「良い事ではありませんか？」

「ところが、星を見たら・・・無いんだ。」

「星が・・・無い？」

「ああ。あいつの運命がどうやら俺の教え方一つで決まっちゃうみたいでな。こんな事、今まで無かつたんだが・・・。」

「本人に任せるしかないのでは・・・？」

「そう思つて倉庫に突っ込んで来たんだが、どうにも胸騒ぎがしてな。」

「胸騒ぎ……ですか？」

「ああ。俺が教えれば、人並みの才能でも人並み以上に成る。なんせ全てを知っているからな。だがそのために、世界が動くかも知れん。それが良い方向なら問題は無いんだが、破滅とまではいかなくても多くの悲劇を生みそうだな。それが悩める。」

「しかし事態は既に動いているのですから、それこそ運命に身を委ねるしかないのでは？」

「それもそうだな。いざとなりやあ、俺があいつを始末すりや済むか。」

ボニートは苦笑いするしかなかった。

それが出来る性格ならば、こんな事で悩む事などある筈がない。

人間の創造に最後まで反対しながら、結局強行してまで作りたがつた兄よりも自然界に積極的に関わり、人間と交わつて来たのだから。「さて、そろそろお湯も沸く頃だろう。ちょっとからかつて来るか。」

そう言うなり姿が消え、屋敷から悲鳴が聞こえて来た。

「……あの性格だけは、直してほしいところよねえ……。」

パチパチと音を立てながら、焚火の火が仲間達の顔を照らし出す。みな緊張していた。

明日は世界を滅ぼせるような強大な魔物との戦いなのだから、緊張するなと言う方が無理というものだろう。

その魔物の出現する場所まで徒歩で約1日という離れた場所で、レジャンド達は野営をしていた。

「しっかし、あれだな。」

いかつい体格の戦士ハルトが、沈黙を破って、傍らの小人に話しかけた。

「どしたお？ おしっこならとつと行つて来るお。」

小人、と言っても、成人した人間の腰程度は身長がある。

クオーレには幾種類か小人族があり、この小人はプティ族の若者でエギーユと言う。

プティ族は弓矢と薬草学が得意で、大概が薬屋として各地を巡っている。

エギーユはそんなプティ族でも、特に弓矢が得意で、文字通り針の穴を射抜ける腕前だ。

プティに限らず、小人族は大概素早く、手先が器用で、そして、いたずらが好きだ。

他に特徴としては、自分の事を「おら」、語尾に「お」を付ける喋り方をする。

何故か人間の成人と同じ歩数で同じように歩いているのに、歩行スピードが一緒という、奇妙な特技もある。

また、年中自作したお菓子を食べており、お菓子が無いと死んでしまうとも冗談で言われている。

「アホ。 そんな事お前に申告してから行くかよ。」
「じゃあなんだお？ おら、薬の調合で忙しいお。」

確かにエギーユは、左足で器をしつかりと抱えて押さえ、右足の指で棒を挟み、器用にコネコネと掻きまわして調合していた。

もつとも左手は、常に持ち歩いているサントのような大きなお菓子袋を持ち、右手はお菓子を持つてはいるが。

ハルトはいつもの事などでそんなエギーユに構わず、リーダーのレジャンドを見る。

「孫にも衣装で、可愛いぜレジャンド。」

「それって、褒めてないよな？」

「いやいやほんとうさ。 なあ、クラス。」

いつも無表情ではあるが、エルフラしく非常に美しい顔立ちをしたクラスイーヴィが、考えごとを中断して顔を上げ、レジャンドを見る。

「美しさなら私の方が上だろうが、可愛さでは負けるな。」

「それ、褒めてるように聞こえないよクラス。」

クラスイーヴィの横に座るプリが、苦笑いを浮かべつつそう答え、着飾ったレジャンドは更に不機嫌そうになる。

「どうせ似合わねえよ。俺が女の服なんてよ。」

レジャンドは今、どこかの金持ちのお嬢様と言った感じの服を着ていた。

もつとも、その服は簡単に脱げる様に細工してあるのだが。

「いやいや、黙って座ってりゃ本当に可愛いぜ、お嬢さんみたいだな。クラスも美女だし。ただ・・・うちのパーティは本気で色気がねえなあとな。なあモレル。」

「そこで僕に話を振らないでくれないか？ 兄さん。」

「まったくだお。それにボンキュッボン担当ならプリがいるお？」

迷惑そうに答える軽装戦士と、何を今更と言った感じで答えるエギーユ。

プリは今、痩せ形で可愛い顔立ちの少女、といった姿である。ただし、スタイルは抜群である事は確かだ。

「まあ、見た目はなあ。だが、こいつ人間じゃねえしよ。」

「見た目が人間でナイスバディーだし問題ないお？ おら、プリが大好きだお。」

「ありがとう、エギーユ。」

プリがニツコリと笑って言うと、エギーユは顔を真っ赤にしながら照れた。

「私とて人間ではない。文句を言われる筋合いも無い。」

クラスィーヴィが平然と言うと、レジャンドもフンと鼻で笑いながら、

「別にお前を誘惑する気もねえから安心しろ。」

エルフは普通ほっそりとしており、身長も人間の平均より少し低めだ。

胸と尻がそんなにふくよかな者がいないため、枝とけな貶す時は呼ばれるほどだ。

ただし、顔の造形は男女とも整っていて、非常に美人だ。

しかし、あまりに整い過ぎて、彫刻などの造形品のように見えるのも確かだ。

「ひゃうっ!？」

「確かに触るならプリの方が俺もいいな。」

突然変な声を上げて立ち上がったプリ。

その背後にはいつの間に現れたのか、ほっそりとした美貌の男。

その背には、1対の左右白黒に色分けされた翼があった。

「おっせえよ爺い。」

レジャンドの非難はしかし、クラスィーヴィの抜きざま斬りかかった行為でかき消された。

ハルトもモレルも突然過ぎて、クラスイーヴィを止めるべきかどうか判断に苦しみ、エギーユは支援すべきか悩む。

温厚なプリにしては珍しく、お尻を押さえて怒りに顔を染め、それでも手出しは控えた。

「やめやめ！ クラスやめろ！」

クラスイーヴィの腕を掴み止め、レジャンドがなんとか止めるまで、男は平然と鋭く素早い攻撃を華麗に避け切っていた。

「止めるな！ まさかこいつが待っていた最後の仲間とか言うのではあるまいな！」

「その通りだクラス。」

「ふざけるな！ こいつが誰だか知らぬわけではあるまい！？」

「そりゃ俺の爺さんだもん、知ってるさ。」

「だったら私との関係も知っていよう！ 何故加えた！？」

「落ち着けてクラス。俺の話を」

「落ち着けるか！ こいつは魔王だぞ！？」

「「「なにっ！？」」」

レジャンドとクラスイーヴィのやり取りを眺めていたハルト・モレル・エギーユであつたが、それを聞くなり各々武器を手に取り身構える。

「ふむ、反応が流石に早いな。 まあ、そのくらいではないと、あの魔獣は倒せないが。」

「今ここで、今度こそこいつの息の根を止めてやる！！」

息巻くクラスイーヴィをレジャンドは何とか抑えつつ、仲間の反応を見る。

正直やり合いたくないと、その顔は全員表していた。

明日は命がけの魔物退治なのに、ここで凶悪な魔王まで相手をしては、とてもではないが勝ち目はない。

しかし、ここで魔王だけでも倒さなければ、万が一魔物と協力されてはそれこそ勝ち目が無くなる。

出来ればやり合いたくないが、最悪の場合は仕方が無い、と、そん

な感じである。

「生憎今の俺は魔王ではない。それに、お前達が倒したじゃねえかクラスイーヴィ。」

「生き延びていれば倒した意味が無いであろうが!？」

「じゃあ俺と今ここで戦うか？俺はやり合う気は無いんだが。」

あの時の俺は死ぬ必要があったからお前達に倒されてやった。手加減して誰も死なないようにも配慮した。なんなら火炎系中心で攻めても良かったんだぜ？なあプリ。」

それを一番分かっていただけにプリは何とも言えないが、クラスイーヴィは当然違った。

そもそも聖魔戦争で、銀竜と共に激戦を戦い抜いた頃から、クラスイーヴィはこの始原の悪魔が嫌いだった。

クラスイーヴィは始原の悪魔が宣戦布告をした現場にいたから、その言いたい事も分かる。

だが、かと言って戦争を仕掛けるなどと、と、納得できなかったのだ。

そして、魔王として降臨した、その残虐さ。

いくつもの町を滅ぼしたが、それに比して死者が少なかった事は知っている。

しかし、目の前で死んで行く人を守ず、助けられなかった時のあの空しさは言葉では言い表す事が出来ない。

どんな目的があろうとも、数々の悲劇を引き起こした始原の悪魔を許せなかったのだ。

「ちよい待ったクラス。レジャンド、お前、待っていた仲間と言ったね？」

「ああそつだ。最後の仲間の一人、始原の悪魔、俺の爺さんだ。」モレルが疑問に感じてそう声をかけると、レジャンドそう答えた。

「つまり、敵ではないんだろ？」

「仲間が敵かよ!」

「仲間などと認めん!」

「クラス！ 落ち着け。 まず、話を聞かせてもらえるかな？ 魔王殿？」

モレルは剣を鞘に収め、クラスィーヴィを抑える手助けしながらそう言つと、アラムは頷いた。

「お前達は俺が認めた勇者候補だ。 真実を教えてやろう。 偽りを伝えた伝説ではなくな。 この、始原の悪魔の名において。」

結界を張り、時間の流れを止めた空間で、一夜ではとても伝えきれない話を聞いた冒険者一行は、渋々ながらも納得し、眠りについた。

それらの話をほぼ知っているプリとレジャンドが夜食を作り、最後に食べてから仲間達は寝たのだが。

「さて、みんな寝たようだな。 後は頼むぜ、爺さん。」

「任せな。 お前がちゃんと役目を果たしたら、すぐに飛んでつてやるぜ。」

そう言いながら、懷から小さな筒を取り出してレジャンドに渡した。「上手くやるさ。」

レジャンドはそう言つてニヤツと笑つと、馬車に乗り込んだ。

「ハア！」

ピシッと鞭で叩かれ、馬はガラガラと馬車を曳いて行く。

その荷台には、魔族の好む味の酒樽2つが乗せられていた。

「別に、お前まで寝たふりしてなくても良かったんじゃないか？」

馬車を見送った後に、焚火に枝をくべながらそう言つと、プリがムクリと起き出した。

「やつぱり気が付いてた？」

「当然。」

プリは自分の毛布などをまとめると、アラムの横に腰を降ろした。

「ねえパパ。 なんで一人で行かせたの？」

「今回の魔獣、正確には魔族だが、警戒心が非常に強い。 と、言うのも、あいつは魔界と自然界を繋ぐ通路の中で具現化した魔族だ

からだ。親父の負の感情を豊富に含み生まれ出てしまったからなんだが、それでなんでそんな強力なのかと言うと。」

「・・・と、言うത്？」

「俺も知らん。」

おもわずつつけて火の中に頭を突っ込みそうになったところ、アラムが素早く腕を突き出し受け止める。

プリは素早く胸を抱えつつ身を起して横目で睨み。

「今、狙ったでしょ？」

「どっちの意味だ？ お前を火に突っ込むようにしたのかと言われるればノーだ。お前の場合、回復魔法でも治らんから冗談にらん。」

腕は偶然だ。」

「ホー。偶然伸ばした手が、偶然掌が私の方を向いて、偶然シツカリと胸を受け止めた拳句揉んだと。」

「そうだ。」

「どんだけ器用な偶然と手よ！？」

「受け止めようとしたからだってば。しっかり受け止めないと、万が一と言う事があるだろ？ 娘を思う親の心が分からんかねえ。」

「わ・か・り・ま・せ・ん！　そもそも揉む必要無いでしょう！？」
「親として、子の成長を確認せんとな。」

「・・・親として、それってどうなのよ。　そもそもこの姿、変身したものでしょうが。」

ジトッと、横目で睨むと、平然と。

「触り心地は良かったから問題は無い。　天然であるボニート程じゃないが。」

「・・・そう言う問題じゃないで・・・あれ？」

プリはそこまで騒いでから、不意に異変に気が付いた。

「どうした？　あんまり騒ぐと、レジャンドが一人で行った意味が無いぞ。」

「あのね・・・誰のせいよ。　そうじゃなくて、なんでみんな起きないんだろうと・・・。」

普通、これだけ騒げば大概の人が起きる。

しかも仲間達は熟練の冒険者だ。
起きない方がおかしい。

「ああ、それなら一服盛った。」

「ああ、それでっておいっ！？　寝込みを何かに襲われたらどうすんのよ！？」

そう叫びながら立ち上がり、グイグイとアラムの首を絞めるが、平然と、

「馬鹿だなープリ。　だから俺が起きているんじゃないか。　それに、みんなに睡眠薬を飲ませるよう準備して欲しいと俺に頼んで来たのはレジャンドだし、夜食に混ぜたのもレジャンドだ。　俺を責めるなよ。」

「なんだってあの子は・・・。」

アラムの首から手を放し、思わず天を仰ぎながら元通り座り込むプ

リである。

「今回の魔獣は警戒心が非常に高いと言っただろ。 エルフの行商人など非常に珍しいし、お前は人間じゃないから匂いでばれる可能性がある。 獣の姿をしているってだけでも知れんが、万が一嗅覚が獣並みだとばれるかも知れんからな。 人間の娘が一人で荷物運搬しているのもかなり変だが、護衛がいると警戒して襲わないかも知れん。 だからみなが自分の出発を知っても追いかけてこないように、ついでに疲れを出来るだけ取る様に睡眠薬を飲ませたいと、俺に言って来たんだ。」

元々彼らは、翌朝全員で出発する予定だった。 それをレジャンドは仲間を騙して先行したのだ。 たった一人で。

「その間、睡眠が必要のない俺にみなを守って欲しいともな。 まあ、あいつもお前に毒が効かない事を知らなかったみたいだが。」

「そう言えば、あの子だけ食べてないものね。」

他のメンバーは途方も無い話を聞いた直後だけに気が付いていなかったが、プリは初期の頃のアラムの子なので大概知っていたために話は聞いていなかったから気が付いていた。

プリも知らなかったのは、自然界に自分が来て以降、魔界での事と魔王として来て以降の事ぐらいだが、推測できたので興味は無かった。

「・・・ねえ、パパ。」

「なんだ？」

「夜空が綺麗ね。 見て、満天の星。」

「あん？」

見上げれば、晴天の夜空に輝く星々。

確かに吸い込まれそうな夜空だ。

アラムはしかし、楽しそうに見つめるプリとは逆に、憂鬱そうに夜空を見上げた。

「自然の美しさってさ、なんでこんなに綺麗なんだろうね。」

「そう感じるように作ったからさ。」

風情も糞も無い返答である。

「今夜は冷える。火に弱いお前も毛布にくるまって寝ておけ。」

「毛布はもう畳んじやったもの。パパ、温めて。」

そう言いながらピツタリとくっ付き、頭をその肩に寄せた。

「人間の父親なら、馬鹿な事言つてないで早く嫁に行けと言っただろうな。」

「嫁ぐ相手、探してくれるの？」

クスクス笑いながらそう聞いて見上げると、ニヤツと笑いながら、

「作ってやるよ。そんな面倒臭い事しないで。」

「いゝらない。自分で探すもん。」

「そうしな。」

二人はそのまま、無言で朝まで過ごした。

翌朝、目の覚めた仲間達へ、出現させた荷台に荷物を放り込めと指示し、魔獣が暴れ出した物音が響いてきた瞬間、アラムは問答無用で全員を荷物ごとテレポートし、激戦の渦中へ放り込んだのだった。

プリンが食事を持ってテレポートして来ると、食堂にルーケはいなかった。

とりあえずテーブルに食事を置くと、プリンは異空間へ足を踏み入れる。

その途端、鍛錬部屋から激しく戦う物音と気合いの声が聞こえて来た。

「お食事ですよ。」

そう言いつつ戸を開けると、ルーケが女戦士を組み伏せていたのだ。

「ドール相手にいやらしいですよ。」

「ええ！？ そんななブツ！」

反論しようとして油断したルーケの顎へ肘鉄をかまし、女戦士はルーケを引き剥がして立ち上がり身構える。

「メフハ！」

女戦士は顎を押えて堪えつつ立ち上がったルーケに構わず、突進して来て顔面にパンチをヒットさせる寸前、人形に戻った。

「アダダダダ・・・あ、危ねえ。」

咄嗟にコマンドワードを叫んだが、舌を嚙んでいたためにコマンドワードを正確に言えなかったのだ。

そのため、解除されずに突っ込んで来たドールであったが、咄嗟にボディーブローを突き出したのが先に当たったのでドールは人形に戻った。

ドールは便利で、魔法の武器でなければ傷が付かない。

そして、相手に致命傷を与える攻撃がヒットする寸前か、自分が致命傷を受けると人形に戻る。

勝ち負けが良く分かる仕組みになっていた。

「酷いなプリンさん。急に声をかけるなんて。」

「油断する方が悪いですよ。」

ニコツと笑って答えられて、ルーケとしては返答に窮する。

「じゃあ手本を見せてやれや、プリン。」

ヒョイツと突然背後にアラムが現れてそう言うのと、プリンはビックリして、文字通り飛び上がってから振り返った。

「ごごごご主人様！？ 驚かさないで下さいですよ！」

「油断する方が悪いんだろ？」

ニヤニヤ笑って言い返され、プリンはプー！ と頬を膨らませる。
「今の拳打はなかなかだったな。ドールが一撃で戻るとは。異性相手でも怯まず組み伏せたのもなかなかだったな。」

「あ、ありがとうございます！」

素質が無いと言っていたアラムからの高評価に、ルーケは心底嬉しかった。

が。

「女の子を押し倒す訓練ですよ？」

プリンの素朴な質問に、ドテッ。 と、ルーケは豪快に突っ伏した。

結局ルーケを放置して、数か月が経過していた。

アラムとしてはあまりルーケに関わって、運命の歯車を回したくなかったからだが、一向にルーケの運命が見えてこないため、諦めた。「お前に一つ聞きたい事がある。」

プリンとその後格闘訓練し、豪快に背負い投げされたその後、ルーケの食事中におもむろにそう切り出した。

ルーケはなんだろうと食事の手を止めるが、口の中に食べ物が入っているため返事が出来ず、そのままの姿勢でピタリと静止する。

そんなルーケを見て、アラムは一言。

「とりあえず飲み込め。」

急いで咀嚼して飲み込み、改めて姿勢を正す。

直感的に、何か大事な事を言うのだと思ったからだ。

「正直に言うが、今・・・お前の運命は消えた。」

「えええ!？」

(運命が消えたと言う事はつまり、俺・・・近々死ぬ!？ うそお！ なんてえ!？)

「あ、言い方が悪かった。だから落ち着け。」

口に出さなくても悶絶するルーケを見て、何を考えているのか推測できた。

「これが落ち着いていられますか!？ 俺、いつ死ぬんです!？
なんで死ぬんです!？」

「そんなの俺が知るか。 いいから落ち着け。 まず深呼吸しろ、
ハイ、1・2・・・」

「スゝハゝスゝハゝ・・・って誤魔化さないで下さい師匠!！」
「誤魔化してねえよ。 運命が消えたって言うのは、定まっていな
いからだ。」

「・・・定まって・・・ない？ 運命って、決まっているもんなん
じゃないんですか？ ある程度変動しても。」

「逆だ。 ある程度決まっただけ。 だが、誰かに出会ったりし
てコロツと変動する事もある不確かなものだ。 まったく変わらな
いのは以前言った命運の方だな。 だが、今のお前はまったくその
運命が見えないんだ。」

「それってどういう・・・？」

「つまり、お前がここで修行する事で、運命が急激に変化している、
またはするという事だ。 それは世界を巻き込む変化であると、俺

は推測する。」

「じゃあ・・・俺はどうすれば・・・？」

「だからお前に改めて聞く。 全てを失ってでもここで学ぶ覚悟があるか。 もしあるなら、俺も覚悟を決めてお前に指導しよう。

最悪の場合、お前をこの手で討ち取り、世を正す。 だが、その覚悟が無いなら誰か他の人を頼れ。」

全てを失う。

それはルーケ自身の命も含めての事、と、言う事だ。

死んでは何を得ても意味は無い。

しかし、現状の、多少知識と技術を習得しただけでは何も変わらない。

「答えは急がなくていい。 3日やるからジックリ考える。 己の決断を後悔しないようにな。」

そう言くと、ルーケの答えを待たずにアラムは姿を消した。

魔獣との戦いは激烈を極めた。

そのため、ファレーズの中腹に当たるなだらかな森林の中で行われたその戦いは、木々がなぎ倒されてポツカリと大きな空地が出来てしまった。

何故そんな場所に出現したのかと言えば、アラムが小細工したからに他ならない。

自然界で戦えて、尚且つ生物に極力被害を与えない場所が、たまたまここだったというだけの事。

ただ、一番の問題は、魔獣の死骸である。

「いつ・・・滅びるか・・・怯えるが・・・いい・・・。」

死に際、獣の姿をしていても純粹な魔族であつた魔獣は、止めを刺したレジャンドに強力な呪いをかけてそう言い残した。

それは、始原の悪魔であるアラムにも解けないほど強力な呪いであった。

魔獣は異界の力をふんだんに取り入れて生誕したが、異界はすなわ

ち始原の双子神の父、原始の神の魂のようなもの。

その存在は、始原の神と同類だったのである。

そのため、力と知性では劣ってはいたが、命を賭してまでかけた呪いを解く事が出来なかったのだ。

そんな存在の死骸であるため、埋めて終わりとする事は非常に不安であり、いつ復活するかも分からない。

また、レジャンドにかけられた呪いがどんなものかも分からないので、仲間ともども町などに帰る事も出来なかった。

伝染する呪いもあるためだ。

数ヶ月間、この空き地で暮らした冒険者達に変化は無かったため、伝染しない事は分かったが、それ以外まったく不明である。

その間の変化としては、戦士のハルトがパーティを抜けた事。

ハルトはレジャンド達と戦うために、敵に成ろうとしてレジャンドに斬りかかった。

その斬戟ざんげき自体はレジャンドに防がれたが、その目的を見透かされ、居場所の無くなったハルトはアラムの提案で魔界へ旅立って行った。ハルトは魔獣と戦い勝利した事で、自然界でこれ以上の強敵に出会う事は無くなったと確信した。

ハルトはあくまで強さを追い求めたため、今や自然界最強であるレジャンド一行の敵となり、さらに強く成ろうと考えたのだ。

だが、その目的を看破された挙句許されては、ハルトの望む物は何も手に入らない。

そのため、力こそが正義である魔界へ旅立たせたのだ。

そんな事件などを経て、空地を片付けた後にレジャンド達は一つの結論を得た。

この空き地に、町を作ろう、と。

幸いと言ってはなんだが、町一つ収まるほどの空地が魔獣によって作り出されているのだ。

しかもここは、丁度周りにある国々の中間地点付近にある。

旅人の中継点、休憩場所にも丁度いい。

「でも、名前はなんて付けるの？ この町に。」

プリの質問に、誰もが頭を捻る。

確かにただ、町、と呼ぶのは間が抜けている。

かと言って急に名前が思い浮かぶわけでもなかった。

「・・・そうだ！ ペイネにしよう！」

不意にレジャンドが叫び、仲間達はキョトンとする。

「ペイネ・・・櫛か。」

「そうそれだクラス！ ちょうどどこからも中間で、櫛みたいじゃないか。」

「歯抜けにならなきゃいいお。」

手に持つ弓を楽器の様に弾きつつエギーユがそう言うと、レジャンドはコケそうになる。

「そうならないように協力しようという意味も込めているんだろ？」

レジャンド。」

「そう！ そのとおりっ！ 流石俺のモレル！ よく分かってんじゃん！」

「・・・と、言う事は、僕の求婚を受けてもらえるのかな？」

「おう！ 結婚しようモレル！ バンバン子供産んで、町を繁栄させよう！」

「ちよつとレジャンド。 何人産む気なのよ。」

「産めるだけ！」

結婚に一番縁がなさそうなレジャンドは、こうしてモレルと結婚した。

皮肉な事に、そのためにレジャンドにかけられた呪いの正体が判明する事になる。

一子しかかせぬ呪い。

しかも産まれる子は女子のみ。

女性は男性に比べて筋力に劣り、ルーケの母親同様、妊娠期間中は極端に戦闘力が落ちる。

また、月に数日、生理と言うかせ枷もある。

魔獣はそれらを知っていた。

だからこそ、レジャンドにそんな呪いをかけたのだ。いつ子孫が絶えるかもしれない恐怖に怯えろと。

その事を知ったレジャンドは、結局モレルと離婚し、一市民としてペイネに住んだ。

町を指揮する者として、モレル夫婦を仲間達は国王として擁立したからだ。

しかし、女子しか産めぬ呪いに犯され、また、魔族の血を引く自分は王家にふさわしくないと、自ら身を引いた。

これにはアラムが吟遊詩人として、大陸各地で歌い広めた伝説の意図を理解したからでもある。

そしてモレルは、兄の凶行の事もあって離婚を渋々ながら承諾、新たな妃を隣国から貰い受けて、国王としてペイネを立派な一国へと民を導いて行く。

寿命の無いクラスイーヴィとプリも家をペイネに構え、支援する事にした。

また、プリは町の繁栄のためにと、宿を設計・建設したりもした。

エギーユは放浪の民族だけに、結局町起こしが終わり次第、別れて旅立って行った。

正眼に構えた剣を腰ために引き、突進して間合いに入った瞬間横薙ぎで剣を振るう。

その剣を相手は一步後退して避けた後、バランスを崩しながらも突進して来たルーケに体当たりされて共に倒れ、暫くもつれ合ってモゾモゾと動いていた。

そんなルーケを、プリンとアラムは共に眺め、ため息をつく。

「やっぱり、才能って大事なんですよ。」

「まあ、無様ではあるな。」

プリンの素直な感想に、苦笑いを浮かべつつ答える。

だが、苔の一念という言葉もある様に、弱きが必ずしも負けるとは限らない。

それこそが人間の可能性と言うものであり、期待できるところでもある。

今は確かに無様で格好悪いかもしれない。

しかし、ここ数か月の間に多少なりとも成長しているのは良く分かった。

目に見えて成長を遂げる弟子は、見ていて気持ちが良いものだ。

それに、誰でも最初は初心者なのだから、なんでも上手くこなせる筈も無い。

やがて決着が付き、勝負は結局、ルーケの敗北に終わった。

「で、今日が約束した3日目だが。結論は出たか？ 俺以外に師事を受けたいと言うなら、ペイネと言う新興の町がある。王家に伝があるから紹介してやろう。レジャンドもそこにいるしな。」

ルーケは敗北した事のため息をつく、アラムに向き直ってシツカリと目を見据えた。

「正直、俺はレジャンドがどれだけ強いかわからないんで何とも言えないんですが。 お願いします。」

「・・・そうか。俺が一応認めた勇者達の国だ。腕を磨くのに丁度いいだろう。」

「ええ。よろしく願います、師匠。俺はまだまだ色々知りたいし、強くなりたい。そのためには師とする相手は人間では駄目なんです。」

「あん？ 結局そっちかよ。」

「前にも言いましたが、俺は自分の手で世界を平和に導きたいんです。そのためには生半可な師では成し得ません。願います師匠。俺を、英雄にして下さい。」

英雄に成れるか成れないか、それは誰にも分らない。

どんなに力があっても、運が無ければ英雄どころか雑魚で終わる。

「正直、俺はお前を英雄に出来るとは断言できん。手に入れた力の使い次第で、お前の英雄に成れる可能性が増すだけだ。正直言って、今のお前でも英雄に成れる可能性はゼロでは無い。ようは何を成し得るかだからな。」

「その何かを成し得るためにも力が欲しい。俺が求めるのは世界の平和。誰もが心の底から笑って暮らせる、そんな平和な世界。

誰かから奪うのが当然なんて世界、俺は認めたくない。認めちゃいけない。そう、思っています。」

「・・・いいだろう。お前の覚悟、受け取った。プリン、お前はもう、ここに来なくていい。それと、そろそろ別の町に移れ。

館の管理人に伝えれば、資金は用意してくれるだろう。」

「はいです。」

プリンはそう答えると、ニコツと笑ってから歩いて部屋を出て行った。

異空間では、通常のレポートの魔法が使えないためだ。

「町を移るって・・・？」

「あいつにはあいつの事情があるんだよ。さて、お前を鍛えるには、ハッキリ言って常人の寿命では成し得ない。時間が足りな過ぎるからな。」

「え？　じゃあ、どうするの？　寿命を延ばすとか？」

「それじゃ、お前が望む今の世を正せないだろうが。　時間を止めるんだ。」

「じじじ時間を止めるう！？」

「そうだ。　正確にはこの異空間を通常の時間の流れから切り離し、固定する。　そうする事で、この作られた空間にいる間、お前は年を取らなくなるが、行動は自由にできる事に成る。」

「ほええ・・・。」

「お前の才能は、剣は人並み、魔力は最低、知能はちょっと高い程度だ。　人並みの才能で人並み以上にするには、短い時間に濃厚な経験を積まねばならんが、普通は乗り越えられずに死ぬ。　それより得る時間を増やした方が安全だし早いからな。」

そう言いながら通路に出て、食堂と繋がっていた場所に扉を出現させる。

「これでよしと。　言っておくが、勝手に出るなよ。　どうなるか分からんからな。　さて、早速始めよう。　まずは・・・」

ルーケはこうして、始原の悪魔という、世界最強の師を得て、修行に励む事になった。

西の王国の遙か海を渡った西側に、そこそこの規模の島国がある。その島国は独特の文明を育んでいたが、西の王国と細々とではあったが貿易をしていた。

この国は魔王の脅威に晒される事も無く、平和に過ごしていた。

そんな国に、アクティースは住んでいた。

アクティースは街々を渡り歩き、酒を飲み歩くのが趣味であった。ある時、アクティースは港にある酒場に入った途端、この国では見かけない衣装を着た男が、この国の商人風の男と話しているのが目についた。

アクティースは耳が良いので、ちょっと離れた席に座り、酒を注文してから商人達の話に耳を傾けた。

異国の男に興味が湧いたからだ。

「へえ。西の王国も面白いのがあるなあ。」

「まあ、実際見た事があると言う奴は少ないけどな。伝説の話を聞く分には、黒竜くろりゅうは暴れ者の魔竜らしいし、実際に・・・」

（黒竜？ それは本当か？）

「こつちには銀竜がいるって伝説があるけど、こつちも見たと言う者は少ない。ま、伝説は伝説って事じゃないか？」

「まあ、伝説と言えば、魔王が生きていると言う奴もいるしな。」

二人は竜と言う話のネタから、やがて神話の事へと移り変わった。

（黒竜が隣の大陸にいる・・・？）

確かに眉唾な話ではあるのだが・・・アクティースはそれでも、確認しに行きたくなった。

三人の娘が、並んで川で洗濯をしていた。

まっ白い短衣に赤い膝丈のスカートという、この島国でも独特の衣装は巫女すいじょの証。

三人は水神すいじんに仕える巫女であり、人里離れた山の中で暮らしていた。三人に共通するのは、美人でスマートなスタイルであると言う事。

20代半ばの娘メレンダ、丁度二十歳のクーナ、成人したてのルパ。年代はそれぞれ、個人の好みで別れる部分はあるが、美人と断言出来る美しさが三人にはあった。

それは神秘的な美しさと言っても過言ではあるまい。

天女巫女てんにょと、噂をする人もいるほどだ。

三人は洗濯を済ますと、干してから神殿の掃除に取り掛かった。

そんな時にアクティースが帰って来た。

「クーナ！」

「あら、アクティース様、お帰りなさいませ。どうしたのですか？ 慌てているようですが・・・？」

「ネグロがこの世界に来ておると言う噂なのじゃ！ ちょっと隣の大陸へ行つて来るゆえ、不在するぞ！」

「分かりました。お気を付け下さいませ。」

「メレンダ、ルパも後を頼むぞ！」

そう言うのと、アクティースは巨大な銀竜に成って、答えも待たずに飛んで行った。

名前のように、光線のような速さであつた。

「あゝあ、まゝたアクティース様いない。」

ルパがそう言うのと、メレンダもウンウンと頷き、

「落ち着いて居て欲しいよね。」

「二人とも、そんな事を言うものではありませんよ。さあ、掃除を続けましょう。」

「はい。」

渋々と、二人はクーナに指示されて掃除を再開する。

見た目は年齢の違う三人だが、リーダーはクーナであった。実質、最年長である故に。

愚者の舞い 31

アクティースはスタイル抜群で、腰まである長い銀髪の、絶世の美女である。

長い年月をかけて改良して来た成果であるのだが、そんな事は見るだけの者には関係の無い話である。

衣服はそのまま、長い布の真ん中に穴をあけ、腰の部分を帯で止めただけの簡素な物で、裾は前後ともに膝くらいまでである。

その下に、一般的なパンツと下着に該当する長い布で胸を巻き付けて覆うだけの、実に簡素な衣服であり、それ以外は素肌を晒している、露出度はかなり高い

住んでいる島国の、女性の一般的な衣装であるのだが、西の王国内ではその美貌も合い間違って、見事に目立っていた。

西の王国では肌の露出を極端に嫌う人が多く、短衣にズボンが一般的だ。

性的な事に奥手なのが特徴でもあり、広大な大陸の中で唯一、娼婦を認めていない大国でもある。

もっとも、西の王国とは他国が便宜上呼ぶだけで、実際には西の王国と言う国は存在しないというのは先に述べた通りで、乱立する国々で考え方も制度も違いはあるのだが。

そんな目立つ存在であるアクティースではあったが、まったく気にする事無く目に付いた酒場に入った。

夕方の早い時間だけに客はまばらで、とりあえず手近な空いている席に腰掛けながら、カウンターでコップを磨いていた酒場の主人に注文する。

「マスター、酒じゃ。」

「お、こらまたすげえ美人の外人さんだね。どれにする？」

衣装もそうだが、風貌・髪の色も違うので、外国人であると一目で分かる。

同じ大陸内でも争いが特に絶えない西の王国だけに、あまり商人も近寄らない。

ましてやどこの国にも隣接しない、最奥の港町辺りでは、一般人は一生のうちに一人異国人を見る事があるかないかといったレベルである。

特殊な産物でもあれば話は別だが、最奥にたどり着くまでいくつもの小国を通過する必要があり、その国々で通行税を取られるのである。

命がけの上に儲けが無いのでは、来る商人などいる筈も無い。

海上を回って来る手段もあるが、海には陸よりも強大な魔物が住むため、無謀の領域だ。

ともかく、アクティースはメニューにある酒の一覧を見渡し、

「全部じゃ。」

「おいおい！？ 本気かい！ 金はあるのか！？」

宿を取ってからふらりと出歩いて来ましたと言わんばかりの軽装に見えるアクティースであるため、そんな大金を持ち歩いているようにはとても見えない。

酒場の酒と言っても、当然一つ一つが安くは無いのだ。

ましてや西の王国は独特の酒を作る酒処。

独特な物は当然、物量が少ないし、安くはならない。

アクティースは面倒臭そうに腰に手をやり、金を入れる小袋を出現させるのを忘れていた事に気が付いた。

今出現させるとそれはそれで胡散臭いと思われるため、仕方なく、服の脇から手をつ込んで胸の間に手を入れ、ゴソゴソと取り出す振りをしながら見えないように拳大の宝石を出現させて主人に手渡す。

「これで足りぬか？」

店の主人は渡された宝石を見て、腰を抜かさんばかりに驚いた。

西の王国では白は神聖を現す色であり、その上産出が殆どない貴重品なのだ。

純白の宝石と言うだけで貴重品なのに、その大きさは拳大。

人目のある店内でそんな物出された際には、それこそ今晚命は無い。噂は風より早く駆け巡り、複数の強盗が入る事間違いないのである。

「ちよちよちよつとお客さん！ そんな高価な物受け取れねえよ！ せめてもつと安い宝石で揃えてくれ！！」

主人が驚いて叫ぶのも無理が無いと言うものだ。

仕方が無く、再び胸に宝石を隠すと、改めて複数の爪大の宝石を取り出した。

「これならどうじゃ？」

「ああ、それなら料理も複数頼めるよ。 何がいい？」

ホッとした顔で主人がそう提案すると、アクティースは面倒臭そうに、

「任せる。 わらわは酒が飲みたいだけじゃからな。 それより酒を持って来たら少し聞きたい事があるのじゃ。」

「分かりました。 少々お待ちを。」

そう断わってから主人は厨房に一度下がり、まず2杯の酒を持って来た。

「とりあえずこちらからどうぞ。 それで、聞きたい事とはなんですか？」

アクティースはとりあえず、手で主人に待ったをかけてから、コップに入って出て来た酒を一口飲み、次いで飲み干してから話を切り出した。

「実は黒竜の事について聞きたいのじゃ。 どこに住んでおるか、何か知らぬか？」

「黒竜……。」

主人は首を捻って暫く考え込み、

「正直、噂でしかないんですが……中央付近にある、リセと言う王国の付近に住んでいるとか聞いた憶えがあります。 なんでも守護しているとか。」

「守護？ あ奴が？ ……そうか、分かった。」

アクティースは納得がいかないと言わんばかりに不満そうな顔に成るが、そのまま無言で考え込んだため、主人は話は終わりだろうと思ひ、仕事に戻って行つた。

そして、次々にアクティースが飲み干すたびに酒が運ばれ、やがて夜になつた頃、三人の男が店に入つて来た。

腰に刀と言う独特の両手持ちの曲剣を使う、王家に仕える騎士、侍だつた。

三人は最初こそ静かに飲んでいたが、ずっとアクティースを意識していたのは気が付いていた。

まあ、この侍達だけではなく、酒場に入つて来る全ての者がそうであつたが。

アクティースはそんな視線と関心を完全に無視して飲んでいたので、三人が酔つてきた頃、不意に一人が立ち上がつてアクティースの下へ来た。

「おい、女。酒を注いでくれんか。」

アクティースはその侍を横目で一瞥すると、平然と無視した。

「おい女！ 聞こえんのか！ 俺はこの国に仕える侍頭やむひいがしうの跡取りだ！ 酒を注げる事を光榮に思うがいい！」

アクティースはため息を一つ、聞こえるようにつくと、

「失せろ。酒が不味くなるわ。」

「な、なんだとぉ！？ この国が平和なのは俺達が尽力しているからだぞ！ 感謝の一つもしたらどうだ！！」

「それがどうしたと言つものじゃ？ わらわはこの国の民ではない。筋違いも甚だしい。」

「黙れえい！ 貴様がこうして酒を飲めるのも我々が平和を堅持しておるからだ！ 俺の言う事が聞けないなら斬り伏せるぞこのクソアマア！！！」

アクティースは片眉を上げると、今度はニタリと笑いながらその侍を見上げた。

「わらわを斬り伏せる？ 面白い冗談じゃな。」

「き・・・つまあ！」

侍が刀の柄に手をかけた瞬間、周りにいた客がガタガタと逃げ出し、遠巻きにする。

「じゃが、先に忠告してやろうかの。 わらわはお前に斬りつけられるのを黙って見ておる気は全く無い。 抜くからにはそれ相応の覚悟を持つて抜く事じゃ。」

侍の仲間達は呆れ顔であったが、この目の前の侍は完全に激昂していた。

「小賢しい！」

侍はそう言つと同時に刀を抜き放ち、次の瞬間にはピタツと動きを止めた。

その顔は蒼白で、信じられぬものを見たというような、呆然とした表情で。

そして、侍は・・・口から血が垂れて来たと思うと、そのまま倒れて絶命した。

「な、なんだ!？」

「貴様! 何をした!？」

ガタンと仲間の侍が立ち上がり、倒れた仲間へ慌てて駆け寄るが、その侍は既に事切れていたためになす術も無い。

「何と言われても、わらわは酒を楽しんでいるだけじゃ。」

「ふざけるな!!」

「貴様、武士に手を出しておいてただで済むとは思っておるまいな!!」

アクティースは再びため息をつく、今度は立ち上がってギラリと二人を睨み据えた。

愚者の舞い 32

侍二人はアクティースに睨まれた瞬間、蛇に睨まれた蛙のようになつた。

あまりの恐怖に膝はガクガクと震え、立っているのもやつという有様だ。

しかしそれは、侍として戦場で戦つた経験のある二人だから耐えられたと言つべきだろう。

周りで様子を見守つていた一般市民はそれどころではない。

あまりの恐怖に腰が抜けたり、我先にと逃げ出した。

アクティースは元来、気の長い方ではなく、それどころか短い方だ。楽しみ中を邪魔され、かなり頭にきていた。

そのため、物凄い殺気が放たれていたのだ。

「よくもまあ、わらわの邪魔をしてくれる。そんなに死にたいのか。」

「ききききききさま」

「貴様らの主張などどうでもよいわ。失せるか死ぬか、とつと決めるがよい。」

「う・・・うわあ！！！！」

侍二人は、仲間の遺体を置き去りに、我先にと逃げ出した。

「マスター。」

「ははははい！！」

不機嫌さの抜けきらないアクティースに睨まれ、厨房入口に隠れて様子を見ていた店主は返事をしながらビクンと直立不動に成る。いや、ちよつとのけぞり気味か。

「この店で一番のお勧めの酒を詰めてくれぬか？ 持ち帰る。」

「ははははいだいま！！」

店主は急いで厨房に駆け込むと、人生最速記録を更新してアクティースに差し出した。

急いでいた割に、残った料金分、筒3本に詰めて寄越す辺り、生真面目な性格なのだろう。

「邪魔したな。恐らく追手が来るであろう。わらわはリセの方へ向かったと伝えるがいい。さすれば店に迷惑はかかるまい。」
そう言い置くと、アクティースは本当にリセの方角へ歩きだした。リセは西の王国内でも古い歴史があるため、大体の位置を把握していたのだ。

やがて町を出て、関所の前に来た時、追手が追いついて来た。

「待て！ 狼藉者！！」

20人余りの追手へ振り返り、アクティースはニタリと笑った。

「わらわは今、非常に不機嫌じゃ。じゃから最初で最後の忠告じや。失せろ。」

「ふざけるな！ わしの大事な跡取りを！！」

「小物には言うだけ無駄か。」

深夜、国王は侍頭達が狼藉を働いた女を召し捕りに行って帰って来ないという報告を受け、渋々出向き、焼き尽くされた関所を見て愕然とした。

リセに着くと、今日は祭りと言う事で多くの人で賑わっていた。それでもアクティースの衣装と風貌は非常に目立つのだが、祭りの時は多少薄れる。

西の王国の民は、普段は短衣にズボンと言っいでたちだが、祭りとなると違う。

色とりどりの華やかな浴衣に身を包み、娘達は素足を晒し出す。

楽しみの少ない生活の中、祭りは唯一の楽しみであり、また、人生の伴侶と巡り合う数少ないイベントなのだ。

親の決めた結婚相手に男女とも拒否権は無い時代のため、祭りでは一夜の恋も許される。

そのため、少しでもより良き相手に巡り合うべく、娘達は己を華やかに飾りつける。

そんな華やかな町の中をアクティースは進み、酒場を見つけて入り、いつものように酒を注文する。

「よう、おねえさん、一緒に飲まねえか？」

すでに顔が赤い若者が、そう言いながらアクティースの向かいに座った。

「それは構わぬが、色々教えてくれると助かるの。」

「なんだい？ 俺が知ってる事なら教えるけど？」

その美貌と容姿で目立つアクティースだけに、若者共々大いに目立つが、人の目など気にしない性格なのか、たんに酔ってるからなのか、平然と答える。

「今日は何の祭りなのじゃ？ 収穫祭にはちと早いと思うのじゃが？」

「ああ、今日は黒竜様へ貢物の日なんだ。」

「黒竜・・・さま？ 貢物？」

「ああ。この国は古い歴史のある国だけど、規模は小さい。それでも黒竜様が守ってくれているから戦争も無く平和なんだ。おかしい、と、アクティースは思うが・・・。」

「・・・それで、貢物とはなんじゃ？ 宝物かの？」

若者はニヤツと笑うと、

「神社に行けば分かるよ。これから行くかい？」

アクティースは暫し考えると、酒を持ち帰ると店主に告げてから頷いた。

神社には多くの観客がいた。

だが、観客は誰も一言も発せず、静かに進む行事を眺めていた。普段は閉ざされている戸が大きく開かれ、神主と向き合って座るのは一人の若い娘。

（ぬおお！？ もろに好みじゃー！！）

アクティースは娘を穴が開くほどマジマジと見詰めた。

目の良いアクティースには、手が届く場所にいるほど良く見えるの

だ。

「ちよいと外人のおねえさん。 飢えた犬がお預けされてるような顔になつてよ？」

ハツとしたアクティースは、若者の腕をムンズと掴むと、有無を言わずに人気のない神社の外れまで連れて来た。

「外人のおねえさんは積極的と言う噂だけだ」

「神殿はどこじゃ？」

「女が・・・え？ 神殿？」

「そうじゃ。 生贄を捧げるなら神殿があろう？ どこじゃ？」

「なんだ、相手をしてくれるんじゃないのかい。」

ちなみに祭りの最中、異性を人気のない所へ誘い込むとは、そういう意味がある習慣だ。

もちろん拒否する事も、可能ではあるが。

「どこじやと聞いておる。 答えぬなら・・・。」

「そうだな、男女の中になるなら教えてあげる。」

ニヤニヤと笑いながら若者がそう答えた瞬間、アクティースは身を翻して歩き出した。

「よい。 他の者に聞く。」

「わあまてまて！」

慌てて若者が引き留めると、アクティースは般若のような顔で振り向いた。

「なんじゃ？」

「ここここわっ！ いいから落ち着きなつて。 美人が凄むと本気でこええよ。 まったく、習慣も知らないし・・・。」

「・・・死にたいかお主。」

ギンツ。 更に物凄い形相で睨まれて、若者はちびりそうになる。

「たたた頼むから落ち着いてくれよ！ 怖いよマジで！！」

「なら、素直に答えるのじゃな。」

「わかった！ 教えるから睨むな！！」

こりやとんでもない相手と関わったもんだなと後悔しつつ、左手に

ある山を指差し、

「あそこの山に神殿がある。深夜に守られながら移動するのが習わした。黒竜が本当に住んでいるのかどうかは俺も知らない。

でも、毎年捧げられた貢物が翌朝には跡形も無く無くなっているし、実際どこかの国が攻めて来ても撃退されるから、最低限それだけの力がある何かがいるのは確かだと思うよ。」

「そうか、分かった。」

そう言うときアクティースは腰の小さい錢袋を取り、若者に手渡した。
「褒美じゃ。受け取れ。」

そう言うとき、錢袋の重みに驚嘆し硬直する若者をその場に残し、アクティースはサッサと立ち去った。

その後、恐る恐る若者が錢袋を開けてみると、1年は遊んで暮らせる金が入っていた。

深夜、神社から長い行列が出発した。

道の左右に並ぶ見物人の持つ松明で照らしたされ、深夜だと言うのに不便なく歩ける。

先頭の一団は王家の侍達。

愚者の舞い 33

それに続いて神主、数人の巫女、貢物である少女の乗った輿、そして巫女がまた数人、それから再び侍達。

神主の唱える呪文のような言葉を、見物人も巫女も、そして侍達さえも続いて唱えている。

貢物である少女は無表情に、それでいて意思をしつかりと持った眼差しで、前を見据えていた。

目的地である、松明に照らし出され、闇の中に浮かび上がる神殿を。一行はやがて神殿に辿り着き、貢物の少女を降ろすと、神殿の奥へと誘った。

そこから先は、神主と巫女、そして貢物しか入れぬ聖地。

神主達は貢物を特定の場合へ座らせると、深々と頭を下げた。

「皆の平和のため、頼むぞユキ。」

「心得ております、神主様。今までお世話になりました。」

ニコリと微笑みながらそう言う娘に、神主は涙が溢れそうになる。

まだ若干15歳の娘なのだ。

そんな生贄を差し出してまで平和を望む自分達の浅ましさを、毎年実感する。

だが、それを口に出す事は断じて出来ない。

自分の立場を守るためではなく、辛くとも娘を差し出す親、そして、そのために命を投げ出して来た娘達を貶め、汚し、そして・・・無意味にする事になるからだ。

黒竜は自国以上の軍隊でさえ撃退する、強大な力を持っている。

卑劣な保身と蔑まれようと、そんな相手を退治するなど不可能だ。神主は再び深々と頭を下げると、もう娘を見ないように退室し、巫女達が全員出てから、外から鍵を降ろした。

万が一、逃げ出す事が無いように。

そして、人々の引き上げて行く物音が遠ざかって行き、最後まで残

って警備していた忍者達の気配も消えた。

リセを侵略したがつている他国にとって、この貢物の儀式を潰せばそれだけで一国を潰す事になる。

そのため毎年、多かれ少なかれアサツシンが入り込むのだ。

だが、このリセは忍者も侍も優秀であつた。

いままで一度も、妨害を成功させた事は無い。

伝説では、忍者と侍の技術を最初に始原の神から伝授されたからと言われているが、定かではない。

ともかく、生贄に捧げられたユキは、開けた正面を見据えて大人しく待っていた。

神殿の3方は石の壁だが、1方だけは開かれているのだ。

そしてその先は切り立った崖。

黒竜は巨大であり、空も飛べるので、なんら問題は無いのだ。

同時に、生贄は逃げる事も不可能。

ふと、絶望した生贄が飛び降りたらどうなるんだろう、と、思ったが。

黒竜にとって、餌が生きているか死んでいるかなどどうでもいい事なのだろう。

となると、生きたままバクツと食べられるのと、飛び降りるのと、どっちが楽な死に方だろうか？

そう考えていると、なお疑問が湧いて来る。

1年もの間、たった人間一人の食事だけで、巨大な竜が満足するのだろうか？

地竜は一食ごとに牛一頭は食べないと満足しないとか聞くのに、もっと強く知性のある巨大な竜が人間一人で満足できるとはとても思えない。

だが、黒竜による被害と言うものも、姿を見たと言う話も、噂さえ聞かない。

山の中で、恐らく洞窟にでも住んでいるのであろうが・・・どうやって食事をしているのだろうか？

横穴式の洞窟に住んでいるとして、通りかかった野生の馬などが通りかかった瞬間バク？

なんか間抜けだな、と、想像したらおかしくなってクスクス笑った。そもそも、その餌が自分なのだ。

餌が食べる相手の食事を気にするなど、本当におかしい。

声に出すのもなんとなく憚られ、ユキは笑いを押し殺し、そのためなお、笑いが収まらなかった。

一頻り笑ってやっと収まった頃、不意に暗闇の中に真つ赤な光る点がある事に気が付いた。

神殿内は松明が灯されているが、開けた崖の向こうに当然明かりなど無い。

狩り人が焚火にあたって野営しているのかな、と思いを巡らし、そんな馬鹿なと気が付く。

この季節、この谷に入り込む馬鹿はいない。

黒竜が生贄を求めて現れるのだ。

その姿を一目見ようと入り込む人もいるかもしれないが、わざわざ自分はここにいますと焚火を焚くなど愚の骨頂だ。

自ら進んで餌になりたがっているなら話は別だが。

もしかしたら今日が儀式の日だと知らないのかもしれないし、迷い込んだのかもしれない。

ユキはそう思っ、大声で叫んだ。

「あなたたち！ 早くそこから立ち去りなさい！！ 竜が来るわよ！！」

赤い点は、聞こえないのか消える事は無い。

そして深夜だからか、猛烈に眠くなって来た。

寝ていれば楽に死ぬるかもしれないが、あの人達まで巻き添えに出れない！

ユキは必死になって叫んだ。

だが睡魔は猛烈な力を発揮し、やがて耐えきれなくなってユキは倒れて寝むってしまった。

真つ暗い洞窟の中へ、一人の男が入って来た。

その肩には、まっ白い衣装を着た娘が一人。

男はニヤニヤと笑いながら奥へと進み、やがて神殿に出る。

その歩みは、暗闇の中なのにまったく危なげなところが無い。

暗視の力があるものに違いなかった。

そこはかつて、蛮族の時代に作られた暗黒神の神殿であつた。

蛮族は神に生贄を捧げる事で、願いを叶えてもらっていた。

それは迷信でもなんでもなく、実際に生贄の腹を裂き、血の臭いが神殿に充満すると本当に神が降りて来ていたのだ。

そして、多少の知識や物を与え、生贄となつた者と共に消え失せる。神聖な儀式で、生贄に成る事は神に仕える事に成るので、熱心な神官等が選ばれた。

今でこそ邪神と呼ばれるが、実際には信奉するどの神へも同じ事をしていたので、当時は邪神などの区別は無かつた。

ともかく、男は神殿の最奥、かつて生贄の腹を裂いた部屋へ娘を運び込むと、まっ平らな石の台の上に横たえた。

そして愛おしそくにその髪を撫で、大きく口を開き。

「臭いのお。鼻が曲がりそうじゃわ。」

男は驚いて顔を上げ、そこにいる女に驚愕した。

腰まである長い銀髪、絶世の美貌、文句のつけようがないスタイル。そして、この大陸では見る事も無い衣装。

「何者だ？ お前も俺の僕になりたいか。」

「僕？ そんなもの、先に始末しておいたわ。 わらわは非常に不愉快じゃ。 とっとと消え失せるがよい、薄汚い吸血鬼が。」

「ふざけるな。ここは我が領域。出て行くのは貴様だろう。くらえ！」

男は女を睨み付けると、自信ありげにニヤリと笑った。

カッと男の目が赤く光った瞬間、女はビクンツと身を震わせ、呆然と突っ立つ。

「いや、わざわざ美しい乙女が来てくれたのだ。是非とも僕に成
つていただかねばな。」

男は女に歩み寄ると、髪を後ろに梳き流して首筋を露わにする。

「お前は危険な臭いがする。一回で僕にしてやろう・・・。」

男は犬歯の尖った口を大きく開くと、女の首筋に被りついた。

そして、驚愕に目を見開く

「吸えるのか？ お前の軟やわな牙で。」

女はガシツと男の頭を掴むと、グイツと眼前に持つて来る。

「わらわはアクティース。我が息子たばかを語り謀るとは言語道断。
死んで詫びろ。」

有無を言わせずクルツと部屋の外を向くと、地獄の業火よりも高熱
の火炎を吐き出し、一瞬にして男を蒸発させた。

愚者の舞い 34

パンパンと男の残骸である手の煤を払うと、アクティースは娘に向き直った。

（おおおおお・・・。これほどの上玉、吸血鬼のような下賤な魔物にはもつたいないわ。）

そんな事を命の恩人に思われているとは露も知らず、運ばれて来た娘、ユキは、スヤスヤと寝入っていた。

神殿で見た赤い光は、吸血鬼の魔眼であつた。

ユキは迷い人の焚火と思い込んでいたので、魔眼を見詰めていたのにかなり長い時間、必死で抵抗した。

アクティースにはあつさり焼き尽くされ、人間のユキはなかなか寝させられないなど、弱く見えたかも知れないが、実際にはこの神殿に住みついていた吸血鬼は上位に位置する魔物であつた。

吸血鬼と一言で言つても、実は下位から上位までいる。

僕吸血鬼と呼ばれる血に飢えた、獣のようにあまり意思の無い吸血鬼もいるが、これは被害者が吸血鬼にされたゾンビの一種である。

その僕吸血鬼と大差ない程度の知能と力しか持たないのが下位。

僕と下位の違いは、多少効果のある魔眼があるかないかという程度だ。

中級の吸血鬼は一般的に知られる吸血鬼で、強力な魔眼もあれば魔法も使え、人間並みの知能も有している。

上位になると、魔界王と呼ばれる最上級魔族に匹敵するほど強い。

莫大な魔力と豊富な魔法知識を有するほどだ。

それだけの力を持っていたからこそ、侵略して来る軍隊に黒竜の幻覚を見せ、魔法で撃退出来たのだ。

もつとも、共通して太陽の光などが弱点なのは変わらないが。

元々はこの神殿の祭司長を務めた男だったが、物欲が強く、その上ある時、神を侮辱したため呪いをかけられ、今まで死ぬ事も出来ず

に生きて来た。

上位吸血鬼ともなると、存続するのにそんなに生き血を必要としな
いたため、約1年かけて幽閉した犠牲者の血を少しずつ啜り、次の生
贄の時期になると僕か屍へ変えていた。

夜間に生贄の食事を狩って来るなど、何気にこまめな性格であつた
し、必要最小限の犠牲者で済ませていたために疑われる事も無かつ
たのである。

また、吸血鬼の欲は金銭などから犠牲者のコレクションに変わって
いたため、人数が欲しいとは特に思わなくなっていたのもある。

つまり、この国を餌場としながら、守る事が楽しくて趣味に成って
いたのだ。

侵略者を撃退するのに好き放題魔法も使って気晴らしが出来、なお
かつご飯にも困らないのだから趣味に成ってもおかしくは・・・無
い、と、思われる。

可哀相なのは1年もの間、暗闇に幽閉された挙句、僕などにされた
犠牲者達ではあるが。

「む、そうじゃ。 よもや傷物にされておるまいな？」

アクティースは不意に一番大事な条件に気が付き、娘の服の裾をピ
ラツと捲ってみる。

その瞬間、ユキの目がパチツと開き、アクティースは思わず飛び退
いた。

（び、びつくりしたわ。）

飛び退く程、やましい意識はあつたんだ、と、誰か見ていたらそう
突っ込んだかもしれないが、生憎誰もいないので突っ込まれる事は
無かった。

「・・・？ ここどこ？？」

ユキは上半身だけ起き上がり、キョロキョロと辺りを見回し、小首
を傾げる。

「ここは神殿じゃ。」

「誰！？」

ユキは驚いて後退り、ドテツと落ちた。

「わらわはアクティースと言う者じゃ。 お前が下賤な吸血鬼の生贄にされておったのでな、助けたのじゃ。」

「きゅ、吸血鬼!？」

ユキはそう言いながら、寝かされていた石の台に手探りで縋り付き、起き上がる。

が、視線は定まる事無く、辺りを彷徨う。

「おお、そうじゃった。 明かりが無ければ見えぬのじゃったな。」
フツツと部屋天井に淡く光が灯り、徐々に強く部屋を照らし出す。暗闇から急激な明るさで目が眩まないように、という、配慮である。ユキは明るくなった部屋を見回し・・・石の台から飛び退いた。かなり昔とは言っても、数々の生贄の血を吸った石の台は、見事に禍々しく変色していたのだから普通の反応だろう。

「あ、あなたは誰? それに吸血鬼って!？」

「まず落ち着くがよい。 お前の危機は去ったのじゃからな。」
そう言われても、この状況で落ち着ける剛の者は、果たして世界に何人いるやら。

寝てしまつて気が付けば訳も分からない見知らぬ神殿の中。

しかも部屋の中はカビと埃と微かに血の臭いが入り混じつて淀んでおり、とても快適とは言い難く、唯一の出入り口の向こうは真の暗闇、そしてその前に立ち塞がる、正体不明の怪しい美女。

しかも吸血鬼から助けたと言う事は、かなりの実力者であり、その気になれば丸腰のユキ如き瞬殺出来るだろう。

一般に言われる吸血鬼は中級だが、それでも銀の武器・にんにく・太陽の光という三点セットの弱点を突かなければ勝てない相手なのだから。

そのどれも持ち合わせていないように見えるアクティースを信頼して落ち着けと言われても出来る物ではない。

拳句に自分の使命を思い出しては尚更である。

「いけない! 早く戻らないと!!」

「戻る？ どこへじゃ？」

「元居た神殿です！ 黒竜が来てしまっ！」

「そんなもの、ここにはおらぬ。」

ユキは一瞬、何を言われたのか分からなかった・・・が。

「こんな狭い所にいる筈がないでしょう！？ そうじゃなくて、早く神殿に戻らないと！」

「じゃから、黒竜などここにはおらぬと言っに。 呑み込みの悪い娘じゃな。」

「だからこんな所に！」

「黒竜を語って生贄を求めていた吸血鬼はわらわが始末した。 じやから安心せい。」

ユキは暫しキョトンとし、その意味を理解するにつれ・・・ガックリと泣き伏した。

「そ・・・そんな・・・。」

「なんじゃ？ 吸血鬼の餌食になった方が良かったとでも言うのはあるまいな？」

「その通りよ。」

「なんじゃと！？」

「黒竜であろうが吸血鬼だろうが、私の命を捧げるだけで皆が平和に暮らせたのに！ なんて勝手にそんな事を！！」

あまりに予想外の展開に、アクティースも流石に戸惑った。

命を助けた恩を着せ、巫女にしようと考えていたのに、これでは本末転倒である。

「・・・命を助けてやったのじゃ、礼ぐらい言って欲しいものじゃな。」

「それが余計な事だと言うのよ！ あなたは吸血鬼を倒して英雄気取りかもしれない！ でもそのために、私達の命は風前の灯よ！！

どうしてくれるの！？」

「どうと言われても・・・のお。 どうせいと言っのじゃ？」

「どうにもできないでしょう？ あなたがどれだけ強くとも、人間

だもの。一人で数万の軍勢を追い返せて？ ああ・・・みなに何と説明したらいいのか・・・。」

「なんじゃ、その程度の事で良いのか。 わらわはまた、吸血鬼を生き返らせるとでも言われるかと思っておったわ。」

「・・・は？」

床にの字を書いて落ち込んでいたユキは、キョトンとしてアクテイスを見上げた。

「なんじゃその顔は？ たかが数万程度の軍勢を追い返せば良いのじゃろ？」

「じゃろって、数万よ？ どうやってあなたがそんな事出来るのよ。それに」

ユキは簡単に言うアクテイスを怨みがましい目でねめつけるが、アクテイスは意にも介さずニコニコと笑いながらユキの言葉を遮った。

「じゃから、わらわには簡単な話じゃと言っておる。 その代り、お前がわらわの巫女となるのが条件じゃ。」

「わらわの巫女？ あなた神様？？ 私の命と引き換えに守ってくれると??？」

「そうじゃな、命を頂戴すると言つのも、ちと違つのじゃが。」

どうやら当初の目的を果たせそうだと、アクテイスは上機嫌になった。

ニコニコと笑うアクティースを見上げ、ユキはガツクリと頂垂れる。

確かに普通の人間とは思えない美貌を持ち、スタイルも良く、吸血鬼を倒せる力が本人の言う事を信じる限りあるのかも知れない。

だが、神はこの世界に來なくなって久しい。

だからこそ、神ではなく実際に助けてくれる黒竜に縋っていたのだ。吸血鬼だろうが竜だろうが、ユキにもリセ国民にもまったく関係は無い。

ようは助けになるか、ならないかだけだ。

「ああ・・・本当にどうしよう・・・。」

「・・・本気で信じておらんようじゃな。」

「当たり前でしょう！？ 偉そうに天界でノホホと暮らしてるだけで助けてもくれない神なんて誰が頼れるのよ！！」

「わらわは神ではないと言うに。」

「神以外に誰がそんな事出来るというのよ！ ああ・・・死にたい・・・。」

「信用ないのお。 では、わらわの力を見せれば納得しよう。 着いて来るがいい。」

そう言いながら、回れ右してスタスタと闇の中へ歩いて消えるアクティース。

ユキは暫し躊躇してから、意を決して闇の中へ足を踏み入れた。

そこまで言うからには、もしかしたら今までの吸血鬼以上の力が・

・
ドダダダダダダダン。

「危ないのお。 階段が見えぬのか？」

「いたたたた・・・ 見えたら転げ落ちないでちゃんと降りていくわよ！！」

「おつと、そうであつたな。まあよい。追いついて来た事だし、わらわの手を取るがよい。外まで導いてやろう。」

追い付いたと言うのかこれは、と、言いたくもなるが・・・とりあえず言わないでおく。

「明るくしてよ。さつきみたいに。」

「それは止めた方がよいじやろうな。」

「なんでよ?」

「かつて、生贄に捧げられた者達の死骸が、ゴロゴロ転がっておるのぞ。そこに転がっておる者などなかなか見ものじゃぞ。」

死ぬ覚悟があつても、やはり成れの果てを見たいとは思わない。

ユキは素直に掴まれた手を握り返し、痛む体に気合いを入れて、アクティースに着いて歩き出した。

その手はひんやりとしており、生きた者の感じがしない。

(まさか、この人こそ、吸血鬼じゃ・・・ないよね?)

アンデッドの一種と言われる吸血鬼は、死体のように体が冷たいと言う。

しかしこうなつた以上、どんな魔物であれ助けになるなら縋り付くしかない。

リセは小国でありながら、国王や侍、それに忍者と、優秀な人材が多い。

しかし、数百人で数万の軍勢を倒して国を維持し続けられるかと言えば、不可能だ。

(とにかく何でもいから助けになつて!)

心中で必死にそう願っていたら、不意にヒヤッとした風がユキの体を撫でた。

どうやら外に出たようだが・・・夜中だけに何も見えない。

「では、わらわの真の姿をお前に見せてやろう。」

「だから見えないってば。」

思わずそう答えた瞬間、ユキは手を放されると同時に、全身を押し付けられた。

何が起こったのかサッパリだが、感覚的に急上昇しているような、そんな感覚。

辺りは暗闇なのに大地は銀色に輝き、やがて白い靄に身を包まれ、再び暗闇になった。

押し付けられる感覚が不意に無くなり、ユキは身を起こそうとして突然吹き始めた強風に、吹き飛ばされないように大地にしがみ付いた。

「なんなのよぉー！！！！！」

混乱しつつそう叫ぶと。

『見晴らしが良いであろうが？』

（はい？ 見晴らし？？）

そう言われても・・・暗くて何も見えないわけで。

「こんな暗闇で何が見えるっていうのよ！！！」

『ならば、もう少し待つがよい。 風に気を付けてな。』

そうアクティースが言った瞬間、サツと朝日が差して来た。

白い靄の中から登って来た太陽は、遮る物が無いため、その姿をハッキリと見せていた。

そして、その違和感が付くまで、ユキは数秒を要した。

「・・・ここどこ！？」

山の中にいた筈なのだが、そもそもその山らしき物さえ視界には無い。

グルツと見渡しても、それは変わらなかった。

と、言うよりも。

周囲に何も無いのだ。

『どうじゃ。 こんな太陽など見た事もあるまい？』

「確かにな・・・」

普通に答えかけて、気が付く。

声の主、アクティースはどこだ？ と。

それに、声も何かがおかしい。

「アクティース・・・さん？ どこにいるの？」

『お前の下じゃ。』

「下？」

下と言われても・・・銀色に光る大地があるだけで・・・。

（いや待て私。大地が銀色に光るっておかしいし。あまりに違和感のある世界に放り込まれたから気にしてられなかったけど・・・。つていうか、下ってこの中？）

そんな事を考えつつ、銀色の大地をコンコンと叩いてみる。とても硬い。

と、言うより、土でさえない。

言うなれば岩の上にいるような・・・？

しかもこれ、鱗っぽい・・・。

「まさか!？」

ユキは自分の想像が信じられず、改めて辺りを見渡すために身を起こした。

その瞬間強風に体を攫われ、少しの浮遊感、そして、落下。

「キヤアアアアアアアアア!!!!!!!」

思いつきり目を瞑って絶叫した。

が、すぐに何かに落ちて落下が止まる。

『危ないではないか。落ちたら死ぬぞ。』

（いや今落ちたし。）

そう思いながら目を開けると。

そこには、太陽の光を反射し、煌めく銀色の鱗に覆われた、美しい巨大な竜がユキを見降ろしていた。

『ここは遥か上空なのじゃ。落ちたら木端微塵じゃったぞ。』

口も動かさずに、そう、竜から言葉が伝わってくる。

テレパシーと言うものだ。

言葉に違和感があると思ったら、脳に直接言葉を伝えられていたからだった。

ユキはそれらを理解すると、改めて驚きのために気を失った。

チュンチュンとスズメの鳴き声に気が付き、ユキはムクリと身を起こした。

「気が付いたか。」

背後からの声に、ビクウツ！ と、驚く。

「まったく、わらわの姿を見て気を失うとは、失礼な娘じゃな。」

ブンツと勢い良く振り向くと、アクティースが岩に座ってタバコを吹かしていた。

「まあよい。わらわの姿を見ても、まだ納得出来ぬか？」

そう言われても、ユキは呆然とアクティースを見返す事しか出来ない。

あれは夢ではないのか、それとも現実なのか、判断が付きかねたからだ。

そんなユキの目の前で、アクティースはタバコを不意に消した。

その存在そのものを、である。

火を消したわけではなく。

軽く手を振っただけで、手品のように消したのだ。

アクティースが無造作に、ツイツと指差す先、そこにはポツカリと穴が開いていた。

「その先に昨日お前のいた神殿がある。どうしても吸血鬼が良いやいと言うならば、一番奥の儀式の間入り口で、お前の手首を裂き、血を撒くがよい。一日待たずに復活しよう。」

ユキとしては吸血鬼の方が良いわけではないのだが……。

「そう言われても……。昨夜見た、銀色の……。あれ、本当にあなたなの？」

「そうじゃ。わらわは銀竜アクティース。竜族の指導者の一人にして天界の使者じゃ。もっとも、最近は人間と関わる事はあまりないがの。」

「竜族の指導者……。」

「黒竜は我が息子なのじゃ。その名を語って悪事を働く以上、見過ごす事は出来ぬ。ゆえに始末した。それが納得出来ぬと言われても、それこそわらわの知った事ではない。なんならお前の国を相手に戦ってもよいぞ。結果は見ておるがな。」

今まで国を守ってくれていたのが吸血鬼なら、黒竜で実力を測る基準には成り得ない。

しかし、その吸血鬼を倒せるならば。

「本当に、私の命と引き換えに、国を守っていただけなのですね？」

「くだいのお。わらわは人間と違って約束は守る。ましてやお前の国を軍勢から守る程度、暇つぶしにもならぬほど簡単な事。

鋼鉄の軍艦に乗ったつもりで任すがよい。」

「え？ 鋼鉄の軍艦？？ なんですかそれ。」

「いやいい。たとえば悪かったの。では、わらわの神殿に招待しようかの。」

「あ、お待ち下さい。」

「なんじゃ？」

「その、神殿と言うのはどこに・・・？」

「ここから西に向かって海を渡ればあるが？」

「海の向こう！？」

「そうじゃが？」

「・・・そうですか。では、本当にお願いできるのですね？」

「本当にくだいのお。そこまでわらわを信用しない奴も珍しいわ。」

「

「そう言われましても、確かに私はあなた様の正体は見せていただきました。しかし、私は竜と言うものの力を話でしか聞いた事がありません。とてもそんな遠くから駆け付けて来られるようにも思えません。」

「そう言われてみれば、姿を見せて飛んで見せただけ。」

（力があると言っても、見せていなければ信用も出来ぬか？）

「そうは思うが、この辺の山一つ吹き飛ばしても意味がないし、と、アクティースが考えていると。」

「この近くに住む事は出来ませんか？」

「そう言われると出来ぬ事は無いのだが。」

「最近、と言っても数百年程だが、人間に頼られたり、教えを請いに来る者もない神殿である。」

「いなくなっても問題があるとは到底思えない。」

「問題は、引越すのが面倒臭いというただそれだけである。」

「それに、今更新しく神殿を作るのもかったるい。」

「アクティースは竜の性質に漏れず、面倒臭がりでものぐさな性格なのだ。」

「先ほど、血を撒けば吸血鬼は復活すると言われました。この洞

窟もどうにかしないといけないですし・・・。」

「正直、物凄くやりたくないアクティースである。」

（この洞窟を塞ぐには、崩せばいいだけの事じゃな。クーナ達に

やらせればよいか。　だが、神殿なあ。　どこに作るうかのあ・・・。

アクティースは人間の姿をしているが、本来の竜の時と全く力や性質などに違いはない。

だから雨風に濡れようが吹かれようが、風邪や病気になる事も無い。それはクーナ達竜巫女も同じであるが、野外で生活するのもそれはそれでだるい。

酒を飲むのも雨の中では薄まってしまつて不味くなるし、それに体が汚れる。

だからこそ神殿を作つて住みたいのだが・・・地形が良く分からない。

とりあえずこの辺に作るかと、適当にやるわけにもいかない。

しかし、この辺に引つ越して来ないとこの娘は巫女にならないだろうし、日中に飛ぶのも色々問題がある。

となると夜中になるが・・・と、沈黙したまま岩に腰掛け色々考えていると、不意にポツツと頬に水滴が付いた。

雨かと思つたが、見上げた空は晴天。

雨など降る筈も無い。

「本当に・・・お願い・・・します・・・。」

「じゃからわか・・・!」

苛立たしげに声に振り返つた時、アクティースは己の過ちに気付いた。

気付くのが遅すぎた。

ユキを巫女にする事だけを考えていたアクティースは、ユキの心情や立場をまったく理解していなかった。

生贄になつた娘は、生きていてはいけないのだ。

なぜなら、命を捧げる事によつて、相手に奉仕、または当地に縛らなければならないのだから。

「竜巫女に成つて生きながらえました」

なんて言い訳は通用しない。

ましてアクティースは、天界から使命を帯びてこの自然界に降臨しているのだ。

畏怖の対象に成ってはいけない、とは言われていないが、もうなりたいとも思わない。

昔のように、大した事のない貢物を持って行列を作られるのも嫌なものだ。

もつとも、そうやって人と交わろうとしないから忘れられていったのだが、アクティースにとっては幸いな状態であった。

だからこそ、遠く離れた地でユキを巫女に迎えようと思っていたのだ。

アクティースにとっては、のろまな軍勢が攻めて来ても十分間に合うのだから。

だが、ユキはそんなアクティースの力を知らない。

昨晚、雲の上を高速で飛行して太陽を見せに向かったが、ユキにそんな非常識な事態を理解出来る筈も無かったのだ。

また、天界から派遣される時、たった一つ条件があった。

人間に対し、回復魔法を使ってはならぬ、と。

死にそうな人が来た時、ホイホイ治しては運命が狂う。

死ぬべき定めである命運を変える事になりかねない。

混沌の悪魔や神々と違い、竜族の使う独特な魔法は人間などには効力が無い。

しかし、白魔法を覚えて使えば効果を發揮する。

だが、その結果は下手すれば時代が激変しかねないのだ。

たとえばある農夫の若者が死にかけていたとする。

それを人間が直した場合、そこで死ぬべき運命だったとしても、易々と軌道修正する。

若者は平凡に畑を耕し、やがて寿命で死ぬだろう。

しかし竜族が治した場合、下手すればその若者は英雄となり、偉大な功績を残すかもしれないし、大悪党になって大量虐殺を犯すかもしれない。

竜族が極端に関わってしまうと、運命も命運もしっちゃんめっちゃかになってしまうのだ。

組み上がっていたパズルがバラバラになるように。

それと言うのも、竜は元々この世界にいたわけではないからだ。

幸い、自然界に使わされた竜族は黄金竜メガロスと銀竜アクティースだけで、二人とも面倒臭がりな性格のために白魔法を覚えようとはしなかった。

しかし、アクティースは今、それを猛烈に後悔した。

ユキは生贄としての使命を最優先とし、そして、喉を掻き切った。隠し持っていたナイフで。

「ば、馬鹿者！！　なんて事をするのじゃ！」

「お・・・ね・・・」

慌てて駆け寄り抱き上げたアクティースに、ユキはそう呟くと、事切れた。

「馬鹿者・・・。　誰が死ねと言ったのじゃ。　これではわらわは、お前を巫女にする事もできずに約束を守るしかないではないか・・・。」

アクティースは確かに面倒臭がりな性格だが、生真面目でもあった。ユキと交わした、命の約束。

それは強大な力を持つ銀竜アクティースの、魂を縛る結果になった。

なんとかユキを生き返らせる事が出来ないか、アクティースは必死に考えた。

クーナは白魔法が使えるが、多少であつて生き返りなど使えない。メガロスも白魔法が使えないため、頼る意味がない。

他に誰かいないか・・・そこまで考えた時、ある人物が頭に浮かんだ。

アクティースはユキを抱えたままレポートし、出現した次の瞬間には眼前の家の戸をノックも無しに開け放った。

「助ける！」

そう言われても、面喰らつたのは家主である。

「・・・お前なあ、久しぶりに現れて、いきなりそれかよ？」

「なんでもよいわ！ わらわを助ける魔王！！」

「お前を助けるってどう言う事だ？ お前はピンピンしているし、その子は・・・。」

アラムはそう言ってから口をつぐみ、アクティースに歩み寄ってユキをマジマジと見てから空を見上げた。

「わらわはお前も知つての通り白魔法が使えるぬ！ じゃからお前に生き返らせて欲しいのじゃ！！」

「・・・無理だ。」

「何故じゃ！？」

「残念だが、この子の命運が尽きている。いくら俺でも生き返らせる事は出来ん。と言うか、お前に関わって死んだのか？」

「そうじゃ！」

アクティースは急いで事の顛末を話して聞かせた。

「なるほどな。冷たい言いようかも知れんが、お前に関わってしまったために命運が尽きたようだ。」

「な・・・なんじゃと・・・？」

「お前も知つての通り、竜族は人の命運を変える事がある。お前に命を託したために、お前の運命に引き込まれたんだろうな。」
アクティースは絶句して、言葉が出なかった。

「元々生贄として死ぬ運命だったんだし、あまり気にするな。どうしてもその娘が可哀相と思うなら、人間のように墓でも作ってやるんだな。それよか美味しい酒があるんだが、飲んでいかなえか？」
流石にアクティースはムカツとした。

人が一生懸命だと言うのに、気にするなだ酒だと！？ と。
だが、その眼は無粋でも何でもなく、アクティースを本気で心配しての眼差しだったために、怒りのままにぶちまける事は出来なかった。

「それに、あまりお前が悲しむと、その娘が天に昇れねえよ。心配でな。」

「なんじゃと！？ お前、見えるのか！？」

「当然。俺を誰だと思つてんだよ。」

「それでなんで生き返らせられぬのじゃ！？ おかしいではないか！」

「だから、その肉体の命運が尽きてるんだって。クーナ達みたいに、お前が巫女にして助けようとしても間に合わなかっただろ？ その娘はどうやっても死ぬ運命になっちまったのさ。そうなっちまうと、俺でもどうにもできん。世界の運命を変えちまうからな。」

「では、自分が関われば、全てがおかしくなると言うのか？」

「それでは何のために自分達はこの世界に来て住んでいるのだ。」

「アクティースは自分が生きている事、それ自体が罪と思えて来た。やはり、故郷と共に滅びれば良かったと言うのだろうか。」

「だが、自分のために死んだなら、これだけは譲れないとアクティースは覚悟を決めた。」

「のう魔王。」

「なんだい？」

「神殿を作ってくれ。」

「・・・守護する気か？」

「そうじゃ。 わらわはこの娘の期待に応えたい。 わらわのために死んだのなら尚の事じゃ。 すまぬが面倒を見てくれぬか？」

「やれやれ、そう言うんじゃないかと思っただぜ。 だが、新しく神殿を作るのも面倒臭いし、場所も無いな。」

「あの神殿では駄目かの？」

「どっちの神殿だよ。 地下のか？ 生贄のか？」

「どっちもじゃ。 わらわ達はどちらでも不便はないでな。」

「お前は良いかも知れんが、巫女達が嫌がるぞ。 そもそもお前、綺麗好きであんな地下に住んだら3日ともつまい。 生贄の神殿も住むように出来ていない。 不便すぎるだろ。」

「ではどうすればいいのじゃ！？ わらわはなんとかしたいのじゃ！！」

「相変わらず短気だな。 お前。 話は最後まで聞くもんだぜ。」

「わらわの性格を知っているならさっさとええ！！」

「お前なあ、それがものを頼む態度か。 結界だ。」

「・・・結界じゃと？」

「そうだ。 異空間にお前の神殿を作る。 そうすりゃ場所は関係ない。」

「じゃが、地下神殿はどうするのじゃ？」

「浄化しちまうさ。 その上で埋める。 じゃないと、何かの拍子に神殿と外部が通じてみる。 復活してた吸血鬼がゾロゾロ出て来たら面倒だ。 あいつらは焼き尽くしても、灰から復活するからな。 神殿はお前の住居その物を移動すれば、引越しの手間もかからんな。 その娘の遺体を埋葬しておいてやるから、先に神殿に行つてクーナ達に伝えてこいよ。」

「いや、この娘はわらわが埋葬しよう。 せめて、巻き込んでしまった償いはせねばの。」

「愁傷なこつて。 じゃあ、準備が整ったら連絡してくれ。」

西の王国リセまで再び戻ると、例の地下神殿入口付近に穴を掘り、ユキを埋葬した後に、アクティースは神殿に戻った。

「引っ越しするぞ。」

帰って来たアクティースに挨拶する暇さえ与えずそう宣言されて、クーナ達は絶句した。

「隣の大陸に引っ越しじゃ。外に干している物などを取り込み次第行くぞ。」

「ちょ、ちょっとお待ち下さいませ。何があつたのですか？」

「詳しい話は後じゃ。ともかく準備せい。」

アクティースの性格を良く理解しているクーナは、これ以上説明を聞く事は出来ないと判断し、二人を連れて洗濯物を取り込み、準備を済ませる。

「ところで、どのようにお引越しをなさるのですか？ アクティース様は飛べますが、私達はそんなに長距離の飛行はできません。荷物もございます。」

「心配するでない。魔王、やれ。」

「おめえなあ！ 人を召使とでも思ってたんじゃないのか！？」

クーナ達の背後にいつの間にか現れていたアラムが声を荒げる。

「こ、これは始原の」

「ああ、挨拶はいいよクーナ。じゃあ引っ越ししちまおう。」

「それなのですが、どのように・・・？」

クーナが遠慮がちにそう聞くと、アラムは額に手を当てて天を仰いだ。

もつとも見えるのは天井だが。

「お前の性格を忘れてたわ。」

「良きに計らうがよいぞ。」

「えらっそうに。」

呆れ果ててそう言ってから、クーナ達に改めて向き直る。

「これからこの神殿に結界を張り、異空間に封印する。通路は大陸にある、西の王国リセ。そこに開く。その王国を守護する

のが目的だ。」

「守護……で、ございますか？」

「そうだ。結界から出て、多少山菜など採ったりするのは構わんが、あまり出歩かない事だな。お前達は異国人で目立つ。その代り、必要な物は俺が揃えてやる。結界を張る前に、神殿外で必要な物があれば取り込んでくれ。」

「それならばもう終わっていますか……。」

「じゃあ結界を張る。で、だ。おいアクティース。」

「なんじゃ？」

「入口は元のままだが、奥の部屋を改造するぞ。」

「改造？ どうするのじゃ？」

アラムはニヤツと笑うと、奥の部屋の戸を開け放った。

「どうだい。」

得意気に言うアラムの開けた戸の先。

今までは洗濯物などを干す裏庭へ通じる裏口だった場所。

土も剥き出しで、何も無く、ただ裏口だけがあつた部屋。

そこが、綺麗に石畳が敷かれ、戸のあつた壁の代わりに流れる小川、その小川にかけられた橋を渡ればいつもの裏庭。

もつともその先の景色は一変していたが。

「こ・・・これは・・・。」

「すつごゝい！ きれゝゝ！ お洗濯も楽だよメレンダ！」

「ほんとだねルパちゃん！ でも、なんで景色が？」

三者三様な反応を見せる巫女達であるが。

「どこに通じておるのじゃ？ ここは。」

アクティースは平然としていた。

「お前が出て行く時楽だろ？ 本来の姿で速攻出て行けるぜ。」

「じゃから、どの辺かと聞いておる。」

「地下神殿上空だ。それと、地下神殿は先に浄化して埋めておいたし、この神殿があつた場所は土砂崩れで埋めておいた。他に質問は？」

「この水はどこからどこへ通じておるのじゃ？」

「ファレーズの中腹にある川だ。水中に線で出入り口を繋いであるから安全だぜ。新鮮だが冷たいから気を付けろよ。巫女達は溜めて温めた方がよからうな。この国のように風呂も出来るよう、桶も用意しておいたぜ。」

見れば片隅に、巨大な桶がドンと置かれていた。

「なんなら、露天風呂でも温泉でも追加するぜ？ ただ、敷地外に出るなよ。落ちるぞ。」

「あの、始原の悪魔様。」

「なんだい？ クーナ。」

「詳しい事情は分からないのですが、もしかして私達の存在は秘密なのですか？」

「そのようだな。だからここで煌々と明かりを灯しても、外に漏れないし外から見えんように結界を張ってある。その代り物体の出入りは自由自在だ。ちょいと細工して、風を弱める工夫はしてあるけどな。じゃないと、雲の上に繋がっているから、風で凄いい事に成る。」

「上出来じゃな。褒めてやろう。」

「ヘエヘエ。ところでお前、生贄はどうすんだ？」

「どうとは？」

「お前が守護すると宣言しておらんだろ。今まで通り毎年生贄が捧げられるわけだが。」

「当然頂く。気に入った者がいれば巫女に加えられるしの。」

「それ以外は食うのか？」

「その時によるの。ともかく魔王よ、引越し祝いじゃ。酒と

つまみをはよ用意せい。」

「普通逆だろうが。おいクーナ。」

「はい？」

「材料は用意してやるから、なんか作ってくれ。」

「かしこまりました。ルパさん、メレンダさん。」

見ると、二人は話し込んでいる間に勝手に川に入り、あまりの冷たさに硬直していた。

時は魔王が討伐されてから、約170年が経過していた。

こうして、アクティースはグラン大陸へと移り住み、リセを守護する事になった。

そして30年もの間、リセは侵略される事も無く、平穏な日々を過ごす事に成る。

一方、その頃ルーケはどうしていたのかと言うと。
既にこの世にいなかった。

刀を振り上げながら飛び上がると同時に左手で手裏剣を投げ、投げ終わると同時に刀の柄を握り振り下ろす。

頭目掛けて投げつけられた手裏剣を半歩横にずれてかわし、真横に構え左手を剣の背に添えて突き上げた剣でガツシリと受け止める、と、見せかけて、剣と刀が当たる瞬間に左側へ剣を斜めに下げて刀を滑らし、バランスが崩したところを素早く剣を撥ね上げ相手の腹を切り裂く。

忍者はその瞬間、人形に戻った。

「だいぶマシになったな。」

「マシって、そりゃないっすよ師匠。」

ルーケはもう、駆け出しの戦士では無かった。

確かに戦士としての才能はその辺にいる人と変わらなかったかも知れない。

しかし、通常の時間で換算すれば約1000年。

見た目は二十歳でも、もう熟練の戦士に成っていた。

「あくまでマシだ。 お前が戦士としての才能があれば、もう俺に追いつけるほどの時間が過ぎてるんだからな。 それでもまあ、見れるようにはなった。 流石は俺だな。 俺の指導の賜物だ。」

「自分で言うかなあ。 でも、それなら師匠、もう」

「まだだ。」

「なんでだよ！ いつになったら俺は元の世界に戻るんだ!？」

「マシになったただだ。 それにお前、知識の方が疎かになってるじゃねえか。」

「畏ならだいぶマシになったぜ?」

「ほ、じゃあこの部屋の中に隠し通路がある。 発見してみる。」
「げっ。」

ルーケはキョロキョロと辺りを見回し、見当を付けて探し始める。

そんな時、入口をコンコンと叩く音がした。

「ご主人様、プリンですの〜。」

「おう、入れや。」

「ええ！？　なんでプリンさんが！？」

ルーケが驚いて顔を上げると、現実世界と異次元を繋ぐ戸が開き、プリンが入って来た。

「よくよく考えたら、完全に時間を止めちまうとお前が死んじまう事に気が付いてな。　もの凄くゆっくりだが流れるようにしたんだ。あれから多分10日くらい経ってるんじゃないかな？」

「そうですね。　ご主人様、普通のお知らせと、悲しいお知らせがありますの。　どちらからお聞きになりますの？」

「普通から。」

即答に対し、プリンはニコツと笑うと、

「南の王国の屋敷に働く事になりましたの。　それで、悲しいお知らせですが・・・。　ガードさんが亡くなられたですの。」

「えっ！　ガードさんが！？　いつどこでどうグゲツ！」

「煩い。　お前はちゃんと隠し通路を探せ。」

スパーン！　と、見事な回し蹴りで、プリンに駆け寄って来たルーケを撃沈する。

「埋葬はしたのか？」

「はいですの。」

「そうか。」

そう答えたきり、アラムもプリンも押し黙る。

「ねえ師匠。　ガードさんて・・・。」

「なんだ？」

ルーケは聞いていいのかどうか迷ったが、蹴られるのを覚悟で聞いた。

「どういう人だったの？」

アラムもプリンも少し沈黙したままだったが、やがて諦めたように口を開いた。

「あいつと知り合ったのは、ある戦場だった。」

「戦場!？」

「俺はある人間と結婚し、約60年間、約束に従ってその国を守った。だがその後、数年しか持たずにその国は隣国に攻め滅ぼされたんだ。」

「なんでまた。」

「馬鹿みたいに安心しきっていたのさ。 嫁の生存中だけだと言いつづけていたのにな。 外交も疎かにし、完全に孤立していたんだ。 そんな戦場で、あいつに会った。」

ガードは傭兵であつた。

当時から不利なのは傭兵間に伝わっていたが、ガードの親友がその王国に恩があり、加担すると言ひ出した。

最初こそ渋つたが、腐敗した宮廷内で祭り上げられた幼い女王に謁見した時、ガードは甚く思ひ入れしてしまった。

戦争に負ければこの女王とその側近を死刑にして事を収め、他の王族などは生き長らえる。

そういう算段が見え見えだつたのだ。

何とかしてこの幼い女王を守りたい。

それは幼い時失つた、自分の娘と重なつたからかもしれない。

娘は流行り病で死んでしまつたが、この女王は生き長らえる事が出来るかも知れない。

ガードとその親友は、勝ち目のない戦争で獅子奮迅の働きをしてみた。

傭兵として普段家にいないガードに対し、妻は悲しみに耐えきれず、娘の死と共に去つて行つた。

闘病中に衰弱し死んで行く娘を守れなかつた妻の深い悲しみに、ガードは引き留めきれなかつたから。

守るべき者も無くなつたまま戦場を駆け回つたガードにとって、この戦場で戦つたために今まで生きていたのだと、心底思えたのだ。

しかし、腐敗しきつた宮廷は、やはり腐つていた。

目立つ働きをするガードとその親友をわざと罠に嵌め、窮地に陥れたのだ。

この二人さえいなくなれば、速やかに王国は滅亡し、自分達は安泰だ、と。

愛用の剣は既に折れ、奪つたボロボロに刃こぼれた剣を手に、二人は敵に囲まれて覚悟を決めた。

「ここまでか。」

「ちと頑張り過ぎたな。」

最後の最後まで力の限り戦った、満足感があつた。

もうこの戦いに勝ち目はない、そう思ったからこそ、二人は死後、使い道の無くなる有り金全てを使い、ある冒険者に女王の救出を依頼してある。

それも成功するかは分からないが、運命を決めつけて行動を起こさないより遥かにマシだと、二人は思っていた。

「さて、最後に一花咲かせようか。」

「そうだな。 名も無き傭兵にここまで蹂躪されたとあつては、こいつらも長くはあるまい。」

疲れ果てた体に鞭打って、二人は最後の突撃をしようと思った。

「お前らが死ぬ必要はあるまい。」

バサツと翼を打ち鳴らし、腕に幼い女王を抱えたアラムが舞い降りたのは、その時だった。

「女王は平民として、ガード達がシッカリと成人させ結婚し、今は子供に囲まれて幸せに暮らしている。 だが、二人とも傭兵として暮らすわけにいかなくなつたから、屋敷で守衛として雇つたんだ。」

「その・・・王国は、滅んだんだよね？」

「ああ。 女王を出せと騒いだが、他の王族と引き換えに黙らせた。」

王家の醜さをまざまざと知つた女王も王族として生きる気はなく、普通の庶民として生きていく事を承諾した。

血筋でいえば絶える事も無いが、守るべき領土も民もいないのに王を名乗っても無意味だ。

「なんで、生きるために争わなきゃならないんだろう。」

ルーケが真剣に悩んでそう言うと、アラムはヒョイツとプリンをルーケの方に押しやり、

「お前、プリンをどう思う？」

「ご主人様???」

「どどどどうってどう答えると!?!」

キョトンとするプリンと、思いつきり動揺するルーケ。

「女として見て、プリンをどう思うと聞いている。」

「いや女としてって・・・そりゃ、可愛いと思うけど・・・?」

「私の好みではないですよ。」

「グハッ!」

「一刀両断だな。」

ガツクリ頂垂れるルーケと平然と答えるプリンに、笑うしかない状態ではある。

「まあいい。 アンポ。」

ボウンと、例の美女が現れる。

「お前にどっちかやると言われたら、お前はどうか答える? 両方とも人間の女だったらとしてだが。」

「どっちかって・・・女の子を物みたいに言わないで下さい師匠。」

「そうですね・・・。」

実際、プリンは今捨てられたら、確実に飢えて死ねるだけに切実な話である。

「いいから選べって。」

「・・・うん・・・選べない・・・。」

「優柔不断なやつぢゃなあ。」

「そういう問題ではないでしょう!?!」

「俺ならどっちと言わず、両方手に入れるがな。 アンポ。」

美女を人形に戻し、ニヤツと笑いながらポンポンとプリンの頭を軽く叩くと、プリンはホツとするが、ルーケはムスツとした。

「それ、質問がおかしいですよ?」

「おかしくねえよ。 人間に限らず、生物には欲がある。 多かれ少なかれな。 雄が雌を求めるのは自然の摂理だ。 そうでなければ種族を維持できない。 動物は強きが全てを手に入れ、弱きは全てを失う。 理性と知識が売り物の人間だって同じ事だ。 力の弱

い者を守るのは法律しかない。しかし、法律が全てに成ると弱者が強者を席卷する。」

「それって、なにか歪んでいるような？」

「兄貴は法で全てを治めるべきだと言った。だが、俺は力が全てだと言った。強きが強くて何がいけないとな。人間は小賢しいくらい知識をフル活用して、弱さを補う。しかし、虎と戦う時に肉体しか無ければ人間はほぼ勝てない。知識を使って勝ってもそれは強さだと俺は思うがな。だが同時に、欲があれば争いも起きる。」

「その争いを起こさないようにするのも知恵でしょう？」

「だが、大半の生物は、平和に利用するより自分のために使い、争いを起こす。たとえばお前の言う世界平和だが、犠牲も無く統一できるか？」

「うーん・・・まったくは無理だと思うけど・・・。」

「欲に駆られなくても争いは起きる。お前のように理想を求めるだけではなく、生きていくためにもな。水を、土地を求めての争いだってある。」

「だから、そんな理由で争わなくてもいいように、統一が必要なんじゃないですか！大陸を一つの国家にしまえば、領土で争う事はなくなるでしょう！？」

「急に強気だが、そんな事はない。お前は単純に統一したら平和になると思っているようだ、平和にするには治めなければならぬ。だが、広い大陸をあまねく統治する事は一人では不可能だ。

住めば必ず不満も出て来るし争いだって起きる。戦争という巨大な単位から小範囲になるだけの事。」

「それだけでも、不幸は確実に減るでしょう！？」

「その統治も知識が必要だ。だが、お前はそつちをまったく習得しようとしねえ。」

「それこそ魔術師などの補佐があればできる事ではないですか！一人では足りなくとも仲間で補い合えばいいのでしょうか！？」

「だからっ！ お前は人の話を聞けっ！」

「今こうしている間にも苦しみ悲しんでいる人がいるんですよ！？ 師匠はなんでそんなに力があるのに助けようとしなんでしょうか！」

「ありすぎるから関与してねえんだ！」

「そんなの言い訳だ！！」

「言い訳じゃねえ！ お前はまだそんな程度の知識しかないのか！ いいかよく聞け！」

「言い訳なんて聞きたくない！ 俺は！」

「二人ともストップですのー！！！！」

エキサイトした二人に挟まれ、プリンはかなり苦しい。

実際にルーケが詰め寄ったために、文字通り挟まれているのだから堪らない。

「こつ言つ時、おつ いが大きいと邪魔ですよ！」

鎧を着ていたので分からなかったが、ルーケは思いっきりプリンの胸に体を押しつける形に成っていた。

「私はお仕事に戻りますの！ 勝手にやって下さいですのおゝ！」
よつばど痛かったのか、目に涙を浮かべてプリンはそう言うと、バアーン！ と壊さんばかりに思いっきり戸を開け放ち、ドスドスと足音を立てて出て行こうとした。

「待てプリン！」

「なんですの！？」

勢い良く振り返った瞬間、バサツと色とりどりの花束を顔の前に突き出され、プリンはギョツとする。

「師匠！ どつから出してんのですか！？」

そんな突っ込みも鮮やかに無視して。

「転職祝いだ。 持ってけ。」

「わあゝ！ ありがとうございますゝ」

コロツと機嫌を直して、プリンは満面の笑みになる。

「つてわけで、お前が出て行くのはまだ早い。 剣の腕だけではなく知識もちゃんと身に付けろ。 じゃないと・・・。」

「いつも答えはそれじゃないですかっ！！ いつになったら終わりなんですか！？」

「知識に終わりは無い。 だが」

「また始まったですよ。」

「そんなんじゃないって終わらないじゃないですかあー！！」

「最低限は身に付けろと言っている。 じゃないと」

「俺はもう待ちきれない！！」

そう言うと、ルーケは部屋の外へ駆け出した。

「あつ！ 待てー！！」

「待てませんー！！」

「今開けるな!!」

だがそんな制止も聞かず、ルーケは異空間から戸を開け放し、飛び出してしまった。

「・・・ご主人様、お聞きしてよろしいのです?」

ボタン、と、飛び出して呆然と突っ立つルーケの背後で、戸が勝手に閉まった。

「聞きたい事は分かっているから先に応えよう。普通は死ぬ。」

「やっぱりそうです? 強運の持ち主なんですよ。」

「いや、それが不幸を巻き起こす原因なのかも知れないぞ。まったく、時間を引き延ばしてまで教えてやったのに、迷惑ばかりかけやがるなあいつは。」

異空間と現行の時間の繋がりは、いわば点。

激しく回る巨大な円盤に書かれた小さい丸、それに飛び乗るようなものののだ。

ちなみにそれ以外の場所に飛んでしまった場合、瞬時に消滅する。時間の流れによる歪みで、魂ごと引き裂かれて塵となり果てるからだ。

「なるほど、星が無いわけだ。」

「星・・・ですか? 占星術とか言うあれですか?」

「そうだ。親父の気紛れか、自然界の一番外側、つまり雲の遙か上空にある、無重力で無酸素の空間があつて、そこに隕石と呼ばれる石が浮かんでいるんだが、その向こうに異界が透けて見えるように作つたんだ。星と呼ばれる光は、その異界に瞬く光の粒なんだけどな。まあ、そんな事はどうでもいいんだが、その星は全て誰かしらの運命を輝きで表すようになってるんだ。」

「不思議ですよ。」

「親父は狂気に囚われたが、完全に狂っていたわけではないから、残っていた穏やかな慈悲の部分がそうさせているのかも知れん。」

ともかく、あいつを弟子にした瞬間から、あいつを示す星が消え失せた。俺にも理由が分からなかったが、これでやっとわかったな。

「理由・・・ですの？ 死んだわけではないですの。 消える理由が分からないですの。」

「あいつがこの世から消え失せたから、星も消えたのさ。 実に簡単な答えだ。 わかつてみればな。」

「消え失せた・・・ですの？ 先ほど背中は見えましたの。」

「死んだわけでもなく、この世から消え失せた理由。 それはな。」

話を聞いたプリンは、目を丸くした。

第一章 完

第二章 へ続く

<http://ncode.syosetu.com/n0676g/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6786f/>

悲しき勇者 異説 愚者の舞い 第1章

2010年10月10日20時36分発行